701
Ka44
701-Ka44ウ
*76W10196 *

始

701
Ka44

帝國圖書館藏

鳥と藝術

金井紫雲著

芸艸堂出版部

帝國圖書館藏

自序

昭和二十二年四月十日　バードデーという嬉しい催しが行はれ、上野の國立博物館では珍らしくも鳥に關する藝術品の陳列があつた鳥類に關する藝術的研究がはじめて軌道に乘つた形である、私がかねてからの念願も屆いて、これからこうした研究も盛になり、鳥の研究の上に、藝術の探究の上に新しい分野が開かれようというのである。

このさゝやかな著書は、私が十餘年以前から材料の蒐集にかゝり、資料の調査を重ね、東洋藝術に關係の深い鳥類五十三種につき、その形態、習性や、文學美術其他の藝術との交渉を趣味的に記述したもので、おそらく　までに現はれなかつたものである、幸にして文化日本の再建に幾分でも役立つことが出來れば、著者としての滿足これに過ぎたものはない。

昭和二十二年の秋

著　者

76W10196

國立國書館
昭和 23.4.10
購入

はしがき

一、本書に收めました鳥の類は五十三種ですが、藝術上から、特に理想の鳥である鳳凰を加へました。

一、藝術や趣味の上から記述する時は、場合によつて科學上の分類などゝ別の方法を取らねばならぬことになります、たとへば、鳥學の上から同一のものである鴨と鴛鴦、木兎と梟を分けたり、大瑠璃と小瑠璃と全然科を異にする鳥を、瑠璃の名稱のもとに一つに書いたりする例です、これも科學者の方々には目を閉ぢて見て頂かねばなりません。

一、本書に引いた古書や新刊書の數は少からぬものですが一々擧げません、出所は大抵卷中に明かにして置きましたから……なほ科學上の說明には內田博士や黑田博士の御著書を參考にしたこと多大です、特に御諒恕を願ひたいと存じます。

鳥と藝術

目次

一、鶴（つる）……二
瑞鳥鶴と畫題—鶴の名畫—牧谿の鶴—泉石の『赤壁横江』—雪舟の花鳥屏風の丹頂—元信の鶴—正信の『竹石白鶴』—探幽の杉戸—應擧の名作と應震の大作—光琳の『立鶴屏風』—抱一にも立鶴屏風—若冲の作十華山の『瑞鶴』—竹田の『歳寒二友双鶴』—近代の名作—鶴の種類—丹頂—鍋鶴—姉羽鶴—袖黒鶴—鷹狩と鶴—鶴の棲息地—丹頂の生態—九州の鶴の渡來地—八代の鶴—鶴と文學—萬葉の鶴—目出度き鳥として—俳句の鶴—漢詩の鶴

二、鶯（うぐひす）……三
日本畫と鶯—梅との緣—口碑傳說—謠曲『梅ヶ枝』—鶯の生態—報春鳥の名—實物と繪畫の鶯—鶯に配せらるゝ草木—大作に乏し—玉堂氏の『四つ目垣』—大觀氏の『早春』—鶯と文學

三、鷽（うそ）……二八
鷽の特長—愛すべき小禽—うそ替の神事—いろ〳〵の異名—鷽の歌—俳句の鷽—
繪畫に現はれた例—家光公の作—現代畫人の作
四、連雀（れんじやく）……三一
連雀の概說—黃連雀緋連雀—ほや鳥の異名—美しい鳥—古畫の連雀—應擧の作—
現代の人々の作—俳句の連雀
五、雲雀（ひばり）……三五
大伴家持の名歌—飼鳥としての雲雀—雲雀の文字—雲雀の種類—雲雀の形態—雲
雀の習性—揚雲雀と臺切り—芭蕉の句—雲雀の繪
六、燕（つばめ）……四一
親しみの深い小鳥—燕と畫題—波に燕—燕の巢—母性愛の傳說—『白氏文集』の燕
の詩—燕の名畫—勝田竹翁の傳—光琳の傑作—雅邦の柳燕—高然暉の『山水飛燕』
—現代人の作—白燕—燕の文學—燕の習性

七、瑠璃（るり）……四九
大瑠璃と小瑠璃—美しいのは雄—夏鳥で秋は去る—竹林鳥の名—俳句の瑠璃—瑠
璃の歌—誤りの多い瑠璃の繪—御舟の遺作と瑠璃
八、鳩鴿（はと）……五三
徽宗皇帝の『桃鳩圖』—牧谿の鳩—邊文進の鳩—雅邦の鳩の屏風—現代人の鳩の繪
—溪仙氏の『傳書鳩』—鳩と鴿—雉子鳩—白子鳩—烏鳩—青鳩—傳書鳩—平和な鳥
—鳩の杖—漢詩の鳩
九、尾長（をなが）……六〇
尾長鳥の形態—關東地方に多い—大和鵲の異名—繪畫に現はれたもの—南風氏の
『梅花遊禽』—十畝氏の『艶陽紅霞』—古畫の尾長は山鵲—山鵲は支那の鳥
一〇、叭々鳥（ははてう）……六三
東洋畫と叭々鳥—叭々鳥の原產地—生態習性—人語や鳥聲を眞似る—詩文の叭々
鳥—叭々鳥の渡來—泣菫氏の隨筆—牧谿の傑作—雪舟の名作—雪村の作—狩野派

の作—現代畫家の作—畫題の叭々鳥

一一、雉（きじ）……六九

華山の傑作『谿間野雉』—雪舟の筆—抱一と文晁の佳作—椿山の『春坡野雉』—微笑氏の『野火』—雉に配する植物—雉の種類—その異名別名—雉の文學史實—雉と傳說—賈氏射雉

一二、山鳥（やまどり）……七八

雉の姉妹鳥—日本獨特の山鳥—山鳥の尾十おろのはつ尾—山鳥の供御—繪畫に現はれた山鳥—光瑤氏の『春律』

一三、杜鵑（ほとゝぎす）……八一

杜鵑と藝術—夥しい異名別名—繪畫と杜鵑—蘆雪の作—應擧の作—月に配す—卯の花と杜鵑—北齋の構想—悲劇の鳥—卵を他鳥の巢へ—俳句の杜鵑—杜鵑の形態と渡り—郭公とじういち—筒鳥

一四、翡翠（かはせみ）……八八

美しい色彩の鳥—翡翠の名—ソビの語源—水乞鳥—『槿園隨筆』の說—狹衣物語の水乞鳥—翡翠の生態—翡翠の畫趣—雪舟の『翡翠圖』—岸駒の名作—竹田の作—現代畫壇の人々の作

一五、鵲（かささぎ）……九六

鵲と畫題—七夕と鵲—鵲の鏡の傳說—鵲和尙—『詩經』の鵲—鵲の棲息地—山鵲と山娘と—鵲の名畫—朗世寧の作—椿逸の作—現代畫人の作—鵲と文學—漢詩には—俳句の鵲の巢

一六、佛法僧（ぶつぱうさう）……一〇五

姿の佛法僧—『嗚呼矣草』の先見—佛法僧と文獻—『札幌本府』の佛法僧—繪の佛法僧—長野草風氏の『三寶の輝き』—大觀氏の作—泰生氏の『若き佛法僧』

一七、錦雞（きんけい）……一〇八

錦翅彩羽—原產地は支那—古書に記す種類—程敏政の詩—繪畫に畫かれた場合—呂紀の作—周之冕の作—直庵の花鳥屏風—元信の作—銀雞の美

一八、白鷴（はくかん）……一一三
白鷴は支那の鳥—渡來した年代—白鷴の形態—その種類—呂紀や王若水の作—應舉の『陶靖節放白鷴圖』—探幽の作—白閑亭林響—現代作家の作
一九、伽藍鳥（ペリカン）……一一七
ペリカンの種類—伽藍鳥の名—特長は嘴—日本へ飛來した記錄—ペリカンの見世物—古信の寫生畫—山村耕花氏の作—ペリカンの棲息地—ペリカンの生態
二〇、孔雀（くじやく）……一二三
鳥類隨一の美—應舉の傑作—徹山の孔雀—孔雀畫家秋暉—岸駒の作—白孔雀—雅邦水墨の孔雀—孔雀の棲息地—孔雀渡來の初め—徽宗皇帝と孔雀—『雀屏中撰』—孔雀明王—歌と俳句
二一、鷹（たか）……一二八
鷹の威容と畫趣—前田青邨氏の鷹狩—十畝氏の獻上畫—古畫の鷹—林良の『朝陽鷹圖』—雪舟の作—直庵の鷹—鷹狩の沿革—鷹狩の流派—鶴の御成—鷹の種類—白鷹—鷹の文學—定家卿の鷹三百首
二二、鷲（わし）……一三六
鳥界の猛者—花鳥畫の一異彩—鷲の名畫—林良の『双鷲』—現代畫人の作—岳陵氏の『荒天睨鷲』—希望氏の『黎明』—『萬葉集』の二首—俳句の鷲—鷲の種類
二三、鳶（とび）……一四一
古畫には少い鳶—栖鳳氏の鳶—龍子氏の『舞扇』—鳶の尾の形態—都會の猛禽—海邊の鳶—『三才圖會』の鳶—宴席の品を浚つた話—鳶の珍話—鳶と雀の緣—『古事記』の金鵄—鳶と文學—俳句の鳶
二四、木兎（みみづく）……一四八
夜の猛禽—古書の描いた形態—顔盤の特徴—その種類—青葉木兎の聲—梟と鵂—木兎の歌—俳句の木兎—木兎曳—一休の贅贅—現代畫家の作—小虎氏の作
二五、梟（ふくろふ）……一五三
木兎の姉妹鳥—梟の眷族—傳說では親不孝の鳥—『山家集』の梟の歌—梟の句—梟

の繪—小虎氏と秋光氏の作

二六、樫鳥（かしどり）……一五七

『かけす』の名—笛畝氏の『巣ぐるみとらへて』—桂月氏の『秋晴』—愈晴の『桂花樫鳥』—樫鳥と風物—その種類—珍鳥瑠璃かけす—樫鳥の文學

二七、鷺（さぎ）……一六一

鷺の名畫趙仲穆の『柳鷺』—牧谿にも芦鷺の傑作—徐淵の作—呂紀の作—顧德謙と惲南田—雪舟の花鳥屏風—狩野派の人々—探幽の鷺—乾山の柳白鷺屏風—光琳の鷺—南畫の鷺—近代の作—默庵の五位鷺—藝阿彌の五位鷺—鷺の種類—五位鷺—青鷺—鷺の配合と植物—畫題の鷺—五位鷺の傳說—鷺娘—鳥鷺合戰—蓑毛のみだれ—漢詩の鷺

二八、鵜（う）……一七五

夥しい鵜の繪—宮本二天の名作—訥言の『水中捕魚』—鵜の種類—鵜飼のはじめ—萬葉集の『潛鳥歌』—長良川の鵜飼—鵜船と鵜匠—鵜飼の繪—十畝氏の『玄明』

二九、鳰（にほ）……一八〇

鳰の姿—その種類—鳰の浮巢—色彩と形態—宗達の二名作—雪信の作—紫峰氏の『蓮』—大觀氏の『紅蓮』—鳰の文學—浮巢の歌

三〇、秧雞（くひな）……一八四

扉を叩く秧雞—秧雞の歌—芭蕉の句と水雞塚—秧雞の句—秧雞のいろ〳〵—扉を叩くのは緋秧雞—秧雞の繪

三一、鷭（ばん）……一八八

北齋の名作—愛らしい小禽—鷭と繪畫—敏捷な活動—鷭の額板—鷭と文學—鷭の歌

三二、鴉（からす）……一九一

忌まるゝ鳥—その一面—慈烏の名—鴉の種類—東洋畫と鴉—牧谿の『濡れ鴉』—宗達の名作—一休の自畫賛—華山の傑作—墨仙氏の佳作—百穗の作—澤嶂の『飢餓』

三三、鶺鴒（せきれい）……一九五

鶺鴒の種類—親しみの深い鳥—その形態習性—鶺鴒の古名雅名—稻負はせ鳥—俳

句の鶺鴒—狩野派の畫と鶺鴒—雅邦の作—大觀氏の作—廣業栖鳳合作の屏風
三四、雀（すずめ）……二〇一
花鳥畫は雀から—名作『雛雀圖』—雪村の竹雀—崋山の傑作『睡猫驚雀』—栖鳳氏の雀—圖案の雀—竹と雀の緣—雀の二種—雀の習性—雀の跳び方
三五、鶸（ひたき）……二〇六
鶸の藝術—二つの分類—常鶸—瑠璃鶸—野鶸—黃鶸—さめ鶸—繪には常鶸—珍らしい揚月の作—現代の人々の畫いた鶸—ひたきの語源と歌
三六、鳴（しぎ）……二一〇
晩秋の情趣—鳴立澤—古歌の鳴—秋の旅鳥—夥しい種類—俳句の鳴—繪畫の鳴
三七、四十雀（しじうから）……二一三
四十雀とその形態—習性と營巢—名稱から來た迷信—四十雀と文學—四十雀の繪—蘆雪と景文と—應擧の作—春草の『落葉』
三八、椋鳥（むくどり）……二一七

椋鳥の大群—噪林鳥の名の如く—その形態—小椋鳥—習性—異名いろ〳〵—俳句の椋鳥—繪畫の椋鳥—椋鳥の合戰
三九、鵯（ひよどり）……二二一
鵯の飛ぶ形—鵯の漁る餌—鵯と南天の實—鵯と山茶花—鵯と紅梅—椿咲くころ—家隆卿の逸話—石井林響と島鵯—名妓米蝶と鵯—鵯の種類—我國特有の鳥—島鵯と白頭翁—鵯と文學—雪舟の『枯木鵯』—元信の作—松榮の柳鵯—雅邦の作—最近の作—白頭翁
四〇、百舌（もず）……二二三
晩秋の天地に甲高い聲—百舌の草くき—百舌の種類—赤百舌—稚兒百舌—史實に見た百舌—萬葉の歌—俳句の百舌—宮本二天の名作—その他百舌の作
四一、鶺（つぐみ）……二三六
鶺の渡り—その種類—黑鶺—赤腹—ぬえの正體は虎鶺—繪畫の鶺—鶺の彫刻
四二、獦子鳥（あとり）……二四一

放庵氏の近作—群をなして飛ぶ鳥—史實に見えたる『あとり』—名稱のいろ〳〵—
萬葉集の歌—『和漢三才圖會』の說—貝原益軒の說—形態と習性と—俳句の『あと
り』……二四六
四三、啄木鳥（きつつき）……二五一
鏡花の『啄木鳥』—啄木鳥の種類—寺つつきの傳說—啄木鳥の歌—俳句の啄木鳥—
抱一の名作—百穗の作—啄木鳥のごとく
四四、鶉（うづら）……二五九
徽宗皇帝の『水仙鶉圖』—李安忠の鶉—張氷涯の鶉—小栗宗舟の作—土佐光起の作
—珍らしい鶉の繪—現代作家の作—鶉の形態—羽毛色彩の變化—營巢產卵—鶉飼
養の流行—鶉の文學—旅順は旅鶉
四五、雁（がん）……二七三
好畫題『蘆雁』—雛宗の作—惠宗の蘆雁—牧谿の作—二天の傑作—雪舟の『蘆雁』—
狩野家の人々—南畫の蘆雁—玉蟾の名作—平沙落雁—雁と人物—『初雁の御歌』—
現代畫家の蘆雁—吉田登穀氏の『銀河』—雁の種類—眞雁—雁金—白雁—菱喰—黑
雁—酒面雁—雁の習性—雁風呂—雁の文學—雁と詩文
四六、鴨（かも）……二八二
雁と姉妹鳥—雁は寂しく鴨は和やか—鴨の名畫—徽宗皇帝の作—光琳の飛鴨圖—
元信の作—應擧の鴨—竹田の作—近代及現代作家の作—夥しい種類—眞鴨—小鴨
—巴鴨—霞鴨—鴛鴨—鴨と文學—家鴨—家鴨の繪
四七、鴛鴦（をしどり）……二八九
鴛鴦は鴨の一種—鴛鴦の思ひ羽—鴛鴦の番ひ—畫題の鴛鴦—若沖の『雪中鴛鴦圖』
—立原杏所の名作—光琳の屏風—現代畫家の作—鴛鴦の問題作—萬葉集の鴛鴦—
『をし』の語源—群棲する鳥—俳句の鴛鴦
四八、千鳥（ちどり）……
千鳥と文學—繪と千鳥—山雪の雪汀小禽屏風—應擧の月に千鳥—光琳の千鳥の型
—抱一の作—百穗の『荒磯』—千鳥の種類—千鳥の形態

四九、都鳥（みやこどり）……二九三
『伊勢物語』の都鳥―謠曲『隅田川』―季節の違ひ―北齋の『隅田川』―都鳥卽ちゆりかもめ―千鳥科のみやこどり―萬葉集の歌―『夫木集』の都鳥―山雪の傑作『波水禽屏風』
五〇、鸚哥（いんこ）……三〇〇
羽毛の色彩美―鸚鵡の渡來―夫木集の歌―詩文に現はれた鸚鵡―雪衣娘―綠衣使者―夥しい種類―柳里恭の『鳥類譜』―現代の諸作
五一、鵞鳥（がてう）……三〇四
崋山の『秋卉鵞鳥圖』―應擧の『王右軍觀池鵞』圖―愛鵞の故事―錢舜擧『白鵞圖』―鵞鳥の先祖は雁―日本に渡來の始―文學方面の鵞―鵞鳥と詩文―鵞鳥の習性
五二、雞（にはとり）……三一一
最も古い家禽―雞の原種―『本草綱目の說』―雞の五德―雞の靈異―雞の名稱異名―天岩戸の長鳴鳥―『萬葉集』の歌―『伊勢物語』のくだかけ―諫鼓の鳥―雞と畫題―雞の觀賞―大和雞―烏骨雞―矮雞―長尾雞―軍雞―蘿窓の名畫―若冲の傑作―應擧の雞―現代作家の雞―軍雞とその名作―烏骨雞の作
五三、鳳凰（ほうわう）……三三
鳳凰は四瑞の一―北甘山の鳳凰―鳳凰の詩―桐竹鳳凰―正倉院御物中の鳳凰―鳳凰堂―林良の傑作―沈南蘋の作―若冲と常信―爲恭の傑作―鳳凰の表現法變遷―鳳凰と植物

鳥と藝術 目次 終

桃鳩圖　　徽宗皇帝筆

口繪圖版目次

玻璃版

桃鳩圖　徽宗皇帝筆

翡翠圖　雪舟筆

風雨鳶圖　與謝蕪村筆

蓮と鴉圖　俵屋宗達筆

翡翠圖

雪舟筆

風雨鳶圖

與謝蕪村筆

蓮と鴉圖

俵屋宗達筆

鳥と藝術

一　鶴（つる）

瑞鳥鶴と畫題　鶴はその端嚴な姿と、清楚與雅な色彩と、鳥類中での長壽といふことから、古來瑞鳥として扱はれ、詩歌に文章に、繪畫に彫刻に、凡ゆる方面にこれが表現され、その名作と稱せらるゝもの丈けを擧げても少からぬ數に達する、殊に東洋畫にあつては、花鳥畫といふ一部門があるので、鶴はその主要なる畫題となり、さま〴〵の形式を以て畫かれてゐる、いま鶴を主題とした、名數畫題や、謎語畫題を擧げて、その說明を略記しやう。

一品當朝　海潮に丹頂を畫く、これは唐の文官一品の位にあるもの丶服の模樣が鶴なので、鶴を以て一品の位を現はすものとし、海潮は潮の音、朝官の朝に通ずるを以て、目出度い畫題となつてゐる。

一品太夫　一品は鶴を以て現はすこと、前例の通り、太夫は松の象徵、秦始皇の故事に據る。

六　鶴　支那五代の世に、淮南から蜀王に六鶴を獻じた、黃筌が王の命を奉じて、その便座の壁面に、その六態を畫いた、則ち、唳天、驚路、啄苔、舞風、顧翎、顧步と、これからその殿を六鶴殿と稱するに至つた。

五　客　鶴と白鷴、鸚鵡、孔雀、白鷺の五鳥を稱す。

清風高節　鶴に風竹を配す、風竹は則ち清風を表はし、高節は鶴の操正しいといふ意味に通はす。

梅妻鶴子　林和靖の故事から來る、卽ち梅を植ゑ、鶴を養ひ、梅を妻とし鶴を子とすといふ意。

連封一品　白鶴に蓮を配し、蜂を點ず、明の人、王仲元の意に出づ、一品は則ち鶴、蓮は連、蜂は封、何れもその字音に通はす。

海鶴蟠桃　海波に旭日、白鶴と仙桃の蟠屈せるを畫く、鶴は千年の壽を保ち、仙桃は三千年の齡を延ぶ、海の大と旭日の旺なると、岩の不朽なると目出度いものづくめの畫題である。

鹿　鶴　鹿と鶴を畫く、何れも祥瑞とせられる。

知更鶴圖　裴耀卿、常に一鶴を飼ふ、此の鶴時を知つて庭上梧桐の上に鳴いたといふ、後素集にある。

林逋放鶴　林和靖西湖に鶴を放つの圖である、古來好畫題として畫かる。

和靖彈琴　同じく林和靖よく琴を彈ず、傍に童子鶴を抱いて眠る。

張子看鶴　張子常に鶴と龜とを飼ひ、之を看て樂しむ。

竹林放鶴・竹林に鶴を放つの圖、矢張り林和靖に出づ。

松巢鶴圖　松上の鶴で、その枝に巢あり、巢の中に雛あり、所謂鶴の巢籠りであるが、事實かうしたことは無い。

雲中白鶴　世說に『公孫度、邴原を目すらく所謂雲中白鶴、燕雀の能く羅する所にあらず』と、雲中に白

鶴の舞へるを畫く。

芝仙祝壽　靈芝と、鶴と、竹と梅、皆目出度いものばかり集めたもの。

海屋添壽　海に面した樓閣を畫き、氣宇の濶大を表はし、更に長壽の鳥、鶴を配す。

黄鶴樓圖　支那武昌府城の西南にある、昔費禕登仙し毎に黄鶴に乘つてこゝに憩ふ、唐詩選に崔顥が黄鶴樓の詩あつて聞えてゐる。

雞群鶴立　所謂雞群の一鶴であるが、畫題としては、雞頭花の群り咲く中に白鶴を配したもの。

閑雲野鶴　悠々自適の意なるも、時に雲中に鶴を畫くものがある。

仙　客　鶴の別名である。

乘鶴美人　支那の仙人王子喬が白鶴に乘つて雲中を徜徉するの圖であるが時に王子喬の代りに美人を以てすることがある、その意。

松鶴遐齡　松に鶴を畫く、ともに齡遐(はるか)なるものである。

松婆鶴操　松と鶴と紅薔薇を畫いたもの、婆は紅薔薇を象徴す。

嵩岳遐齡　高山と旭日、松と鶴を畫く。

張志和　支那の仙人で常に鶴に騎る。

梅鶴高士　林和靖のこと、梅妻鶴子に同じ。

鳴九皐　詩經の小雅鶴鳴篇から出てゐる、鶴九皐に鳴て聲天に聞ゆとある、皐とは澤中の水溢れ出で穴をなす處、其所から數へて九に至るは深遠の意。

◇

鶴の名畫　鶴の名畫と稱せらるゝものも、その數決して少くない、その主なものを列擧して見やう。

牧谿の鶴　その第一に擧ぐべきは、京都紫野大德寺藏國寶牧谿の鶴である、この幅は、中觀音、右猿猴、左が鶴の三幅對で、既に世人のよく知る所、これはもと今川義元の所持するところであつたが、義元の歸依してゐた太原和尚が此の畫と永樂錢五十貫文を携へて上洛し、錢は妙心寺の山門造營の資に喜捨し、畫は大德寺へ納めたと由緒も名高い、九皐に鳴く丹頂を畫き、背景は水墨の竹林を以てしてゐる、此の畫に就いて特に注目されるのは、立鶴を畫いたものゝ多くが、翼の次列風切羽の黑いのを尾羽が黑いやうに畫いてゐるのが常であるのを、此の鶴は、やゝ翼の一部のやうに見える事である、それから眼光の如何にも活々した點で、將に鶴の名畫中、隨一に擧ぐべきものである。

泉石の『赤壁横江』　京都相國寺藏、泉石の『赤壁横江』『九皐唳月』も、名畫として逸すべきものではない『赤壁横江』は、畫の左側に斷崖を畫き、その削りなしたるやうな下部には、溪流碧潭に流入る勢ひを示し、これを以て赤壁を表現し、その中央に丹頂の舞へる姿を手一杯に現はした、思ひのまゝに翼を張り、首を半圓形に曲げて遥かに江を凝視するが如く、双脚十分に張つて飛翔の力强さを見せてゐる、その舞姿の美しさ

誠に筆紙に盡すところでない、古來鶴の飛翔する姿を畫いたもの少くないが、此の圖の如く整然として嚴かなる感じを與へるものは少い、從つて舞鶴を畫くもの何時も之を以て範とする。

九皐唳月は、清楚なる立鶴圖で、竹林を添へてゐる、その嘴から眼、微妙なる線が首となり胴體に接續する處、無限の味がある、泉石は明の人、その畫歷に就いては、多く傳へるものがない、唯、『元明清書畫人名錄』に、『文正字泉石、翎毛八分書』とある、此の二作は絶海中津國師が滯明九ヶ年、永和二年歸朝の際携へ歸り、相國寺に傳へたものといふ、絶海中津國師は、足利義滿の私淑してゐた名僧である。

雪舟の花鳥屏風の丹頂　雪舟には、花鳥屏風一双の中に、二羽の丹頂と群鳥を畫いた名作がある、大橋新太郎氏の所藏である、鶴の畫かれてゐるのは右の半双で、飛泉巉岩を背景に、老松の根幹嵯峨たるを配し、これに椿の朱花を點出し、丹頂の一羽は直立して聖者の如く、一羽は木蔭にあつて、何物をか凝視するが如くである、この立鶴の姿の端正なる、思はず襟を正さしむるものがある、鶴に名作少しとせぬも、此の丹頂の如く謹嚴なるものは少なからう。

元信の鶴　元信にも鶴の名作が少くない、自然を見る眼が如何にも敦厚で、その中に一種の氣韻を有するのが元信の特長である、その鶴を畫いたものとしては、先づ京都南禪寺淸涼殿の襖繪の『松鶴圖』を擧げなければならない、用筆極めて簡素、然もよく丹頂の習性を捉へて居り、松は筆致極めて雄勁である、更に西脇濟三郎氏所藏の花鳥六曲一双に、松下の丹頂を畫いてゐるが、これは牧谿の鶴の妙處を狙つたらしく、仔鶴を伴つて松下を徜徉する姿態が眞に迫つてゐる、この外、島津公爵家の舊藏にも、元信と稱する『桃鶴圖』があつて、同じく仔鶴を伴ふ處を畫いたのがあるが、これは比較にならぬほど畫品が落ちてゐる。

正信の竹石白鶴　狩野派の作の中では、まだ〳〵澤山の人が鶴を畫いてゐる、正信の筆で、京都眞珠庵の所藏である『竹石白鶴』は國寶に指定されてゐる逸品であり、同じく知恩院の襖繪に、尙信の作があるが、これには丹頂と、眞鶴を手一杯に畫いて、如何にも雄大な感じを起させる、さうした點で、不思議な力を有つてゐる作である、殊に、翼を張つた眞鶴の姿勢が面白い。

探幽の杉戸　探幽で有名なのは、京都大覺寺書院の杉戸の鶴である、右には眞鶴と丹頂各一羽を畫き、左は、丹頂一羽、九皐に鳴くの姿である、此の作の優れてゐる點は、軀の均整の取れてゐることで、脚などに一の力が籠つてゐる、この外、藤田家舊藏の竹鶴圖は、中壽老、左鳴鹿の三幅對で、筆致極めて雄渾、これとやゝ似てゐるのが、島津家舊藏の双鶴で、唯、向が左と右だけの違ひである、島津家といへば同家にはなほ、秋月の花鳥の大幅があり、桃と松の間に鶴と尾長を畫いてゐるのであるが、此の鶴が、相國寺の泉石の『赤壁横江』の鶴そつくりで、唯嘴を開いてゐるのと、閉ぢてゐる丈けの相違で、他は寸分違はないのが面白い。狩野派では、まだ常信や雪信、伊川院などにも、相當な出來の鶴がある。

◇

應擧の作と應擧の六作　四條圓山系統の人々には、殊に鶴を畫いた作が澤山ある、就中、應擧にはその作

が多い、或は屏風に、或は襖繪に、或は双幅とし、三幅對に畫き、舞へるもの、立てるもの、丹頂、眞鶴、殆んど應接に遑もない、殊に島津公爵家舊藏の金地靑色、松鶴竹雞の六曲一双の如きは、應擧としても力作に屬するものであらう、老松のもとに一番ひの丹頂と、三羽の雛を畫き、その周圍には蹲蹴や、蒲公英、菫などが咲いてゐる、極めて美しいもの、これが春で、竹雞の方は秋を現はし、一双で四萬六千八百圓で落札したほどである、應擧には、この外、靑山子爵家の『芭蕉鶴』の名作があり、吉田丹次郎氏藏の『鶴』もよい出來である、なほ神戸川崎家舊藏の『双鶴』松方公爵家舊藏の丹頂と眞鶴を配した『双鶴』なども擧げられる、圓山派ではなほ、應震に『金地波鶴屏風』の大作がある、半双は飛翔せる鶴、半双は水邊に立つ鶴を畫いたもので、如何にも氣品よく、應擧の畫風をよく傳へてゐる。

松本双軒庵の舊藏品には、吳春の『松上双鶴』があり、加賀の鍋爪家には、一鳳の『旭日双鶴』があつた、神戸の田村家の景文の『松下双鶴』も四條派としての味を十分に見せてゐた。

岸駒にも鶴を畫いたものが少くない、『蘆鶴』など好んで畫いた、德川伯爵家には、もと屏風の大作があつたが、その筆の覇氣は、ともすれば粗笨になつて、鶴のやうな姿勢端嚴なものには調和しない憾みがある。

◇

光琳の立鶴屏風　光琳派の鶴は、一種裝飾的な味があつて面白い、昭和九年の春、上野の帝室博物館に開かれた名作屏風畫特別展覽會に陳列された、光琳の『群鶴圖屏風』の如きは、將にその代表的のものである、畫かれたのは眞鶴で、右半双に十羽、左半双に九羽、悉く首を伸ばし、足を揃へて立つ中に、右に唯一羽嘴を下に向けたのがあり、左にも一羽、背をかゞめたのが居る、左右相對し、その兩端には僅かに波を見せた奇拔なる構圖、これこそ全く光琳獨特の手法で、落欵も『法橋光琳寫之』と謹んで記されてゐる、もと德川伯爵家に傳へられ、十數年前大倉男の手に歸した作である。此の作の面白さは、姿勢の妙と、巧みに省略された筆の妙によること勿論であるが、丹頂でなく眞鶴にした處に却つて趣きがあり味があるのである。

抱一にも立鶴屏風　此の作と殆んで同巧異曲なのが抱一にある、もと吉田楓軒翁の愛藏品であつた、立鶴二枚折屏風である、流れに五羽の眞鶴を畫き、一羽丈けが背をかゞめてゐる、光琳の作に比較すると、色彩や構圖、やゝ綿密になつてゐるが、光琳ほどの大膽さがない、少しく技巧的になつてゐる、併し流石は抱一で、自家の工夫丈けは、十分に見せてゐる、抱一の鶴としては、大澤百花潭氏舊藏に中壽老、左右松鶴梅竹龜の三幅對がある、此の鶴も眞鶴で、例の溜墨の面白い松に抱一一流の柔みのある筆でよく調和が取れてゐる。抱一は丹頂より、眞鶴を好んだと見え、舞鶴海波といふやうな作にも必らず眞鶴を交へてゐるやうである。

◇

若冲の作　若冲にも鶴の作は珍らしくない、鳥に就いては、隨分鋭い觀察を爲し、それに一流の技巧を加へて畫くので、時に依るとやゝ誇張された形にもなるが、そこに却つて面白味を生じて來る場合もある、京

都金閣寺の襖繪は有名なものであるが、これにも若冲らしい處が隨所に現はれてゐる、身をかゞめて首をのみ伸してゐる形の如きは、他の人の作にはあまり畫いてない反肉なものである、片岡直溫氏の舊藏のものにも、松下に四羽の丹頂を畫いたのがあるが、首の黑い羽毛の畫き方などが隨分奇拔で、少からぬ誇張が見える、傑作とはいはれないが、兎に角一種の見方をしてゐることは認め得られる。

奇拔な鶴の表現としては、森本蕪庵氏藏の蕭白の筆も隨分變つてゐる、双幅で、背景に小川の流れを見せ右は眞鶴で二羽の雛を點出し、左は丹頂で雛一羽を配してゐる、その背景はよく出來てゐるが、眞鶴の眼の緣から胸毛に續く黑い線や、丹頂の嘴下から首筋へ連なる黑羽毛の描き方など、實に思ひ切つたものといはねばならない。

◇

崋山の『瑞鶴』　南畫の方面では、崋山にも、椿山にも、竹田にも、中々名作がある、崋山の作では、もと花村家にあつた『瑞鶴』の如き名作の中に數へられやう、崋山も餘程得意の作であつたと見え、畫簡も添へられてゐる。

夕陽灘上立徘徊、紅蓼風前雪翅開、應爲不知栖宿處、幾回飛去又飛來。

と賛をしてゐる。この外にも多々あらう、椿山には更に多い、その中でも濱松の中村氏の所藏であつた『海鶴退齡』ほ傑作である、縱二尺二寸、幅二尺三寸、これに手一杯に波を描き、大きく旭日を現はし、これに

舞鶴一羽を中央に畫いた非常な力作である、波の筆の勢ひにもよく椿山の特色が見られるが、鶴の形は泉石の『赤壁横江』によく似てゐる、椿山には、また鶴の雛ばかり畫いた面白い作がある、これは、元波多野古溪氏の愛藏したものであつた。

竹田の『歲寒二友双鶴』　竹田には、有名な『歲寒二友双鶴圖』があるこれは天保三年、竹田五十六歲の爛熟期の作で、竹田は此の作が出來ると共に、京都の如仙の處へ送り、山陽の題詩を求めさせた、山陽は喜んでこれに次の詩を題した。

老楳蟠鬱亞疎枝、鳴鶴在陰雄與雌、應望孤雛游未返、湖雲春水影迷離。

如拙は竹田の子、山陽は竹田が子を思ふの情を雌雄の鶴の雛を育むの愛になぞらへたのであつた、これあるが爲め、此の幅は非常に有名なものとなつてゐる。

南畫には、まだ梅逸に鶴の作が多い、双軒庵舊藏の『老松双鶴』九州森家の『歲寒三友群鶴』などは名高いもの、支那の人では、沈南蘋に多く、密畫でよく畫きこなしてゐる。

◇

近代の名作　明治以降、現代の作にも鶴を畫いたものは殆んど枚擧に遑もない、その中で、記憶に殘つてゐる大作のみを擧げて置く。

橋本雅邦　竹林遊鶴　花雨翠居舊藏

同	若松双鶴	川上大將遺愛	一二
都路華香	閑雲野鶴	第八回文展	
池上秀畝	丹頂遊白砂	第五回帝展	
菊池契月	鶴	第三回帝展	
福田平八郎	鶴	第四回帝展	
荒木十畝	鶴	第九回帝展	
町田曲江	高	第十回帝展	
森白甫	鶴	第七回帝展	
金島桂華	鳴九皐	第八回帝展	
石崎光瑤	野鶴	第八回帝展	
兒玉希望	海鶴圖	第三回青々會	
長野草風	双鶴	第九回院展	
小林古徑	鶴と七面鳥	第十五回院展	
山村耕花	牡丹に鶴	第十五回院展	
木村武山	鶴の巣籠	第十七回院展	

前田青邨　鷹狩　第二十一回院展

堂本印象　松鶴佳色　岩崎家獻上屏風

此の外に平福百穗氏の、帝室御物海鶴屏風があり、曾て博物館に陳列された、百穗氏の花鳥畫中の大作である、なほ昭和八年の七絃會に、百穗氏の丹頂が出品されたが、これは絶筆で未完成のものである。

◇

鶴の種類　かうして繪畫に現はれた鶴は、多く丹頂と眞鶴ばかりであるが、時とすると黑鶴が畫かれたり紅鶴が現はれたりすることがある、さて、日本で見られる鶴は、幾種類あるかといふと、先づ丹頂をはじめとして、眞鶴、鍋鶴、黑鶴、姉羽鶴、袖黑鶴の六種である、左に形態を記して見やう。

丹頂　鶴の中で、最も上品なのは丹頂である、體も他の鶴類に比して大きく、身長四尺二寸、風切羽は三十三枚、尾羽は短かく十二枚である、風切の次列は黑色を呈し、これを疊むと丁度尾羽が黑いやうに見える頸には美しい赤色の部分があり、丹頂の名はこれに依つて起る、嘴は綠を帶びた淡褐色で、頰の邊から眼の下、頸にかけて暗灰色の部分があり、細かく記すまでもなく形態はよく知られてゐる。

滿洲から西比利亞方面で繁殖し、日本や支那に渡つて冬を越すのであるが、今は日本內地ではその姿を見ることが出來ず、僅かに飼ひ鳥に依る丈けであるが、北海道にはその生棲地がある、これは後に詳記する。

眞鶴は、眞那鶴とも書き、白頂鳥とも呼ぶ、大さは身長三尺三寸、頭から背にかけて首筋が白いが、頰の

下から暗灰色の線があり、此の暗灰色はだん〳〵擴がつて背と胸に亙り、翼は大雨覆のあたり黑いが、だん〳〵薄くなつて風切羽の先は白く、尾羽も白くなつてしまふ、丹頂ほど美しく上品な處は少いが、色の變化は此の方にあるので、琳派の人々などは此の方を多く描く。眼の周圍は赤く、足は太く褐色を帶びてゐる、濠洲、外蒙古、西比利亞方面に蕃殖し、冬は日本や支那方面に飛來し、翌年の春、再び北國をさして歸つてゆく、鹿兒島の阿久根は、眞鶴の飛來地として有名であり、天然記念物として、その保護法の行はれてゐることもよく知られてゐる。

鍋鶴　鍋鶴は、眞鶴より更に幾分小さく三尺餘、前頭部に赤色の裸出部があり、頰から首筋までは白く、首筋の下半部から全身暗灰色を呈してゐる、東部西比利亞から、滿洲西北部、北蒙古邊に蕃殖し、冬期群をなして我が國にも飛來する、眞鶴の飛來地である鹿兒島縣の阿久根にも眞鶴に交りて飛來するが、此の種多く群をなして來るのは山口縣の八代で、こゝは天然の安息地帶、人々もよくこれを保護してゐるので、鍋鶴は悠々として水田などに降り立ち、餘り人を怖れぬほどになつて居り、八代はこれが爲め有名になつてゐる。

姉羽鶴　姉羽鶴は、鍋鶴より更に小さく二尺八寸位の身長であり西比利亞から滿洲蒙古邊に蕃殖し、稀に北海道に現はれる、陸前地方に飛來した記錄もある、色は背から雨覆にかけて暗灰色、眼の周圍から後頭にかけて赤色を呈し、脚は黑味を帶びてゐる、嘴の基部の太いのも特色の一つであらう、眞鶴程藝術上にも現はれてゐない。

袖黑鶴　袖黑鶴は身長四尺、夏は西比利亞地方で蕃殖し分布は中央亞細亞方面にまで亙つてゐる、成鳥は純白色で、眼の周圍から頭部へかけて紅色、嘴は褐色を帶びてゐる、袖黑の名は、翼の初列風切と雨覆が一寸黑色を帶びてゐるので、袖先が黑いと見られたわけである、日本にも稀に渡つて來るが、極く少ない、丹頂、眞鶴に次いで美しい鳥である。

黑鶴は、別に鼠鶴とも呼び、松前鶴とも稱へる、鼠鶴といふのは、その體色から來てゐることといふまでもない、松前鶴といふのは、その昔北海道あたりで見かけた爲めであらう、此の種類は體長四尺位、頭部には羽毛少く、殆んど裸出し、その色は赤色である、喉から頸部にかけても赤色の所がある、眼の後方から頸の側面にかけて白い斑點があり、嘴は基部が綠色で、先端は淡黃色、脚は黑色を呈してゐる、北アジア地方にも分布し、冬季渡りをするが、その途すがら日本を通過するのである、いま上野の動物園にはこれが飼はれてゐる。

◇

鷹狩と鶴　鶴は昔はよく日本內地にも飛來したものと見え、德川時代には、鶴の御成といふて、將軍が自から、鷹狩を行ひ、鶴を捕へてこれを禁裡へ供御に上つたものであり、その御成の場所、卽ち留場は、葛西小松川邊であつたことも知られてゐる、但しこれは眞鶴に限り丹頂は靈鳥として捕獲することはなかつた。

併し丹頂も時々飛來したものと見え、現に北齋の『富嶽十三景』中、相州梅澤の圖には、富士山を背景にし

て、丹頂が眞鶴と共に水澤に降りたり飛んだりしてゐる所が畫いてあるし、更に古く鎌倉時代には賴朝が鶴を由比が濱に放つたといふやうな話も殘つてゐる、ところが濫獲の結果、何時か關東邊では全く見られず、眞鶴、鍋鶴は、山口縣の八代や、鹿兒島縣の阿久根で見られるが、丹頂は最近に發見せられたる北海道釧路附近に於ける棲息地の外は、自然のものを見ることが出來ない、此の釧路の丹頂については、史蹟名勝天然記念物第三集四號に、葛精一氏が詳細に亙つて報告してゐるが、これに依ると、從來丹頂の生活狀態などに就いて誤りのあつたことが少からず發見される、いまその報告を基礎として、藝術上に參考となるべき諸點を擧げて見やう。

鶴の棲息地　順序として、其の棲息地であるが、場所は釧路市から北へ約十里ほど入つた『くちやろ川』と『ちるわつない川』に挾まれた濕地の內、特に山麓に近い湧水地帶及び『あしせつちり川』の上流山間部卽ち平苫內驛の北方點、幌呂驛近所の東南部で、『幌呂川』と『あとしやらか川』の合流點の間にある濕地の一部で、この外、その姿を見られる處は十數ヶ所ある、これらの地は何れも泥沼地で、浮島が散在し、蘆や眞菰が繁茂し、草の丈けが高く見通しの出來ない所が多く、殆んど人跡もとめぬやうな處なので、鶴に取つては絕對の安息地である、だから、此處の丹頂は渡りをしない。

丹頂の生態　その巢に就いて、葛氏は左の如く記してゐる。

巢は地上（浮島）に營まれ、その形略々圓筒形で基部の直徑約四五尺、高さ二尺五寸前後で上方に至るに從つて漸く狹く、直徑二尺位なるを普通とする、構巢材料は主として草原地帶に點在する『はんのき』の枯枝を用ひ、其の基部のものは太く直徑七、八分長さ一、二尺のものを用ひ、上方に至るに從ひ、漸次細枝を用ひて居る、巢は最初約三寸位、樹枝を積みたる後巢の周圍に叢生する葦を四方から折り曲げて之を敷き、更に其の上に枯枝を積み前同樣葦を折り込み、斯くして前記の高さに及ぶのであつて、巢を取らんと欲すれば先づ周圍の葦を切り、然る後に非ざれば巢を採集することは出來ない。巢は斯る構造を有する故に頗る堅牢で、橫轉等の憂なく、又最上層部卽ち產座に當る部分は極めて細く且つ軟かい樹枝或は雜草の枯莖葉を主材として、中央部の凹所は比較的小さく皿狀を呈して居る。

と、これに依れば、從來、松上の鶴などと稱し、松樹の上に營巢してゐる處を畫いたものなど全く誤りで、それは鸛の見誤りであつたことがわかる、動物園では、細竹を皿形に圍めてゐるが、これはやゝ自然に近い。

丹頂の交尾期は、四月中旬から五月にかけてゞあるが、產卵は六月から七月頃で、昭和九年上野動物園の例によると、七月三日產卵してゐる、抱卵は三十三日で、一腹二卵、年二回產卵するといふ、雛の中は、黃褐色の羽毛に蔽はれてゐるが、これは約一年にして、白色となる。その食物は自然のものにあつては、芹、鰌、牧草の軟葉、ひるむしろ類の穗狀をなす花部、人參などで、鰌は最も好むところである。

九州の鶴の渡來地　九州の鶴の渡來地である鹿兒島の阿久根と山口縣の八代とは、近頃鳥に關する種々の著書に依つて詳細に傳へられてゐるから、こゝには大體にとゞめる。

阿久根は鹿兒島出水郡で、九州鐵道の鹿兒島に近い阿久根驛附近で、こゝに渡來するのは眞鶴と鍋鶴で丹頂は見えない、晝の中は此の附近の水田の中などに悠々と降りたりしてゐるが、夜になると矢張阿久根に程近い荒崎邊に泊る、毎年こゝに渡來して來る鶴の數はかなり多く、最も多い年には千五六百羽に達したといふ、これは鍋鶴で、眞鶴は鍋鶴の約二割位に當ると、これは川口孫治郎氏が發表された研究の一部である。なほ稀に黑鶴の渡來をも見たことがあるといふ。

八代の鶴　八代の方は、山口縣熊毛郡にあつて、三方丘陵に圍まれた景勝の地で、こゝに來るのは鍋鶴ばかりである、多い時には二百羽位來る、そして靜かに水田の邊に降りて餌をあさつたりする處は誠に繪そのものである、この地は昔から鶴を靈鳥とし保護もよく行屆いてゐるので、危害を與へるものもないから、鶴はよく人に馴れ、數歩の近くに到つても怖れて飛び去るやうなことはなく、村の人々も餌を蒔いてやつてこれを大切にしてゐる、動物愛護の美しい話である、かうして阿久根も八代にも、秋十月頃に渡來し翌年三月頃、天よく晴れた日に、再び北の國に去つてしまふのである。

◇

鶴と文學　鶴は靈鳥として崇められ、保護されてゐた位であるから、文學の上にも中々縁が深い。

萬葉の鶴　『萬葉集』を見ると、鶴をいろ〳〵に詠じた歌が三十首にも上つてゐる、その多くは鶴の鳴く音に感懷を寄せてゐるのである。

兒らしあらば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の曉の聲　守部王

港風寒く吹くらし奈呉の江に妻喚びかはし田鶴さはに鳴く　大伴家持

家持にはなほ、二十卷に、『訪人の情に爲りて思を述べて作れる歌』がある。

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は國方し思ほゆ

家おもふて寐を寢ず居れば鶴が鳴く蘆邊も見えず春の霞に

と、多情多感なる萬葉の詩人達は、鶴の聲を瑞鳥の聲として聞いてゐるのでなく、妻を思ひ、家を懷ふ切なる心をそれに繫いでゐる、大空を渡る鶴の姿を見ても

難波潟潮干に立ちて見わたせば淡路の島に鶴渡る見ゆ　作者未詳

足柄の筥根飛び越え行く鶴のともしき見れば大和し念ほゆ

と望鄕の思ひに通はしてゐる、それにしても難波潟から淡路島へかけて、鶴のさわに渡つた昔は戀しき氣持がする。

目出度き鳥として　鶴を瑞鳥として、その目出度さを詠じたものは、それより後の歌に多い。

かめ山のいはねの松にすむ鶴はきみか千代へんためしなりけり　周防内侍

あたらしめ神のみてくらさせるかと澤邊に鶴のむれゐたるかな　好忠

君か代のなか井の浦にむれゐたるともに千とせを契るたづかな　二條天皇大后宮肥後

松のもと千年の鶴のよるのこゑかめのみやまにさそかよふらむ　藤原俊成

などはその一例で、この外、蓬萊山に通はせたり、百年の齢を保つといふことを詠じて賀の歌としたものなど數へあげれば際限がない。

◇

俳句の鶴　俳句の方では、季題に『鶴來る』が冬であり『鶴歸る』が春である、この外に『鶴の巣』『鶴の巣こもり』などが春になつてゐる、二三の例句を擧げると、『鶴來る』には

遠眼鏡はづして鶴を仰ぎけり　潮鳴

といふのがある、これは、阿久根や八代に鶴の渡來するといふことが名高くなつてからの句であらう、巣籠りの方は、昔から鶴（かうのとり）と鶴と間違へられて、松上に巣を營むと思はれてゐたので、今日の研究から見れば全く誤りである、いま鶴の營巣を見やうとするには、動物園で見る外はない。

そのよしを記して鶴の巣籠れる　並木

などがそれである。

この外、冬の季題に霜鶴といふのがある、これは霜の降る夜は鶴も寒からうといふ想像から來た題である。

霜の鶴土にふとん被されず　其角

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴　几董

初春の句は、日出度いものとて、鶴がよく現はれて來るが、それは鶴の生活や習性とは何のかゝはりのないものである。

鶴に乘る願はなくて今朝の春　古白

鶴さもあれ顔淵生て千々の春　其角

松の苔鶴やせながら神の春　漱石

などその一例で、かうした鶴に對する概念は、たとへ科學的に鶴の習性や生活が十分に知られるやうになつても、容易に忘られぬであらう。

漢詩の鶴　支那の詩などにも、よく鶴は現はれて來る

欲レ洗霜翎下ニ澗邊一、却嫌菱刺汚ニ香泉一、沙鷗浦雁應ニ驚訝一、一擧扶搖直上レ天。　褚載

といひ更に、

誰寫青田質、高超雁鶩群、長疑風月夜、清唳九霄聞。　失名

といふ、或は白樂天の

松際雪相映、雞群塵不侵。

といふて畫趣を見せ、又、張仲素の詩中には

清唳因風遠、高姿對水間。

の文字があり、又、揚妹が

僊丹傳頂壽無涯、豈許蜉蝣浪得知

も鶴の形容をよく寫してゐる。

◇

〽をりからそらも花曇り、颯と吹來る濱風に見る間に一天晴渡り、青海原の沖合に漁る船の眞帆かた帆、時分はよしと景季が、差圖にしたがひ解放せば、一度にどつと羽音して伸上りたる千羽鶴、足に結びし短冊の光りあけ日にかゞやきて、ヒラ〳〵〳〵四方に舞行く源氏山。　清元――千羽鶴空麗

二　鶯（うぐひす）

日本畫と鶯　松竹梅の『歳寒三友』が、日本畫の好畫材として、洽く行はれてゐる爲めに、松には鶴、竹には雀、梅には鶯といふように、それぞれの緣が結ばれて、非常に親しみの深いものになつてゐる、殊に梅には全く鶯がつきものゝやうに思はれてゐる。

梅との緣　これは單なる人爲的の配合ではなくて、實際梅の花の咲く頃になると、鶯が人里近くに訪れて來て梅の樹などにとまる、それは梅の幹や枝の皮の間に潜む蟲を捕食するためで、何時かはこれが人の眼にとまり、繪などに畫かれて、立派な畫材となつたわけである。唯に繪などに畫かれるばかりでなく、あの美しい囀りは、他に比類のない位素晴しいもので、自然これが飼ひ鳥の王とまで稱せられるやうになつたのである。

口碑傳說　そればかりでなく、此の微妙なる囀りから幾多の口碑や傳說も生れて、彌が上にも人の心を樂しませてゐるのである。その傳說の第一は、『鶯宿梅』である、紀貫之が娘の邸內に美しい紅梅があつて、香氣が高く、優れた樹であつた、村上天皇これを聞召され、內裏に召させ給うた處、女は貫之遺愛の樹とて

勅なればいとゞもかしこし鶯の宿はと問はは如何にこたへん

と詠じて奏した、天皇叡感あり、遂に內裏に召さるゝことを止めさせ給うた。これは餘りにも有名な物語である。

また、『雜和集』に載せられた傳說も名高い、孝謙天皇の御宇、大和の高圓の寺の僧、最愛の子を亡つて悲しい月日を送つてゐた、ある朝のこと、庭の梅ヶ枝に一羽の鶯が來て、美しい聲で啼いてゐる、不圖その鳴く音に耳を傾けると、

初陽每朝來、不相還本栖

と聞える、僧はこれを聞き、筆紙を取り出してそのまゝ綴つて見ると

初春の旦ごとには來て見れとあはてそかへるもとの栖かに

となつたので、扨ては我が子の靈、鶯となつて訪ねて來たかと、一度は驚き、一度は嘆きそれから持佛堂に入つて、終日子の冥福を祈つたといふ。

謠曲『梅ケ枝』　謠曲には『梅枝』があつて、非業に死した伶人富士の妻が、旅僧に身の上を語る、その末句には、これも有名な

梅が枝、梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯、〻面白や鶯の、〻面白や鶯の、聲に誘引せられて花の陰に來りたり、我も御法に誘はれて、今目前に立ち舞ふ舞の袖、是こそ女の夫を戀ふる、想夫憐の樂の調

の文字がある。

◇

鶯の生態　鶯の習性や、形態などはあまりにもよく知られてゐる、人里に來て、美しい聲で鳴くのは、雌を戀ふて鳴くので、やがて交尾が終ると、山間に歸り叢などに巣を營んで卵を生む、巣は笹の巣などで筒形に作り、中に葡萄色した美しい卵を生む、大抵五六個である、時とすると、杜鵑や郭公が、その中に卵を生む鶯がそれを知らずして育てあげると、此の杜鵑や郭公の雛が、一方ならぬ暴君で、あはれにも鶯の雛を巣から投り出してしまう、これもよく知られてゐることである。併し時には滿足に育つて、夏から秋と山に過し多から早春にかけて人里に餌を求めて出るのである。

報春鳥の名　鶯の異名を報春鳥といふ、これに就いて、『三才圖會』は次のやうに記してゐる。

荆州每至二冬月一、於二田畝中一、得土堅圓如卵者、輙取以竇、破レ之鶯在二其中一、無二羽毛一、候春始生羽破土而出、諸山記云、鶯如鴝鵒而色蒼、每至二正二月一、鳴曰二春起一、至二三月一、止鳴曰春去、採茶之候也、呼爲報春鳥。

と、此の外、黃袍黃公、金衣公子、倉庚、楚雀、黃鸝、搏黍、靑鳥などの別名があり、日本でも春告鳥、經讀鳥などゝ呼ぶ。

◇

實物と繪畫の鶯　繪畫に現はれたる鶯は、實物よりは美しい橄欖色の羽毛に畫かれ、全體の姿も、遙かに細く描かれる、これは鶯が梅の花の咲く頃、人里に現はれると、丁度矢張りこの頃、繡眼兒(めじろ)が訪れて來るので、繡眼兒の色彩が鶯の寫生に影響してゐるのではあるまいか、何にしても、實物よりは優しく美しい。

鶯に配せらる草木　次に鶯に配せられる植物を見ると、早春の季節であるから、大抵極り切つたものが多い、その中でも、梅は紅梅にせよ、白梅にせよ一番多きを占めてゐる、次が柳である、まだ芽の十分に綻びぬ柳の枝に鶯を配したのは上品なものである、笹原に鶯を見せたのは、實感であり、實景であるから矢張よくその自然を寫してゐる。

大作に乏し　併し、鶯は形の小さい鳥であるし、群れて飛ぶといふやうな事がないから、鶯を主題とした

大作などはあまりない、數ある鶯の繪で最も優れてゐるのは、藤田男爵家所藏の吳春の松竹梅三幅對である
これは竹を中心とし右には雪松に鶯をとまらせ、左は青梅に翁を配した凝つた意匠のもので、此の鶯はよく
寫生されてゐる、松の形も非常に面白い、双軒庵舊藏品中には、景文の名作がある、これは中が富士山、右
が柳鶯旭影、左が曉禽紅樹の三幅對で、三幅對としての典型的の作、柳に鶯を配したものではなほ、應擧に
もよい作があるし、清暉も之を畫いてゐるし、狩野家では元信や、常信にこれを見る。
梅に鶯は、あまりに平凡であるが、それでも抱一には、面白いものがあるし、その遺鉢を傳へた其一あた
りもよく之を見る。杏所には、瀟洒な構圖のものがある。奇拔なものとしては一蕙の卯杖で、七草の寄せ籠
に卯杖を配し、これに鶯を畫いた如何にも春らしい感じの作がある。

玉堂氏の四つ目垣　現代の人々の中で、川合玉堂氏に『四つ目垣』の名作がある、これは戊辰會展覽會に出
品されたもので、朽ちかゝつた四つ目垣に、鶯が一羽とまつてゐる洗練された筆致のもの、これに似た作は
荒木十畝氏にもある、これは同じく竹垣ではあるが建仁寺の破れ垣で、垣の彼方から紅梅が一枝顔を出し、
鶯はその枝に點出されてゐる。

大觀氏の早春　大觀氏の『早春』は第十一回の日本美術院展に出陳されたもので、これは野薔薇の實が赤く
枝頭に殘り、そろ〳〵草も萌え出でやうとする處、鶯が地に何か漁つてゐる、構圖極めて清楚である、栖鳳
氏には『春』と題した面白い作がある、これは推高く積まれた薪の上に鶯を畫いたもので、意匠があまり類が

ない、此の作は第七回の淡交會に出たもの、靫彦氏にも竹の葉に鶯一羽畫いた澁い作がある。
此の外、小虎氏に『木瓜と鶯』があり、千靱氏に『寒竹』平八郎氏に『雪』荻邸氏に『鶯』などゝいふそれぞれ變
つた構圖で鶯を畫いた作が、著者の手記に載つてゐる。古い畫題では、石榴に鶯を配した『金衣百子』その、
『山村飛鶯』などゝいふのもあるが、皆平凡である。
かうして畫かれた鶯を見て直ぐに感ずるのは、大抵右から左を向いてゐる處が多いが、現代の大家といふ
人々の作は、いひ合せたやうに、左から右を向ひた形を畫いたものが多い、熟達の結果であらう。

◇

鶯と文學　文學の方面では、古く萬葉あたりから、さま〴〵の方面に現はれて枚擧に遑もない、

あしびきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ鶯のこえ　山部赤人
春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげに鶯鳴くも　大伴家持
春日野に友鶯の鳴き別れ歸ります間も思ほせ吾れを　柿本人麿

など、將に金玉の文字である。
漢詩にも少からずこれを見る。

欲囀聲猶澁、將飛羽未調、高風不ㇾ惜ㇾ便、何處得ㇾ遷喬。　鄭　愔

など、よく此の鳥の氣分を傳へてゐると思ふ。

三　鷽（うそ）

すく〳〵と延びのよろしき木賊の芽けさも來鳴けり鷽といふ鳥　島田旭彦

鷽の特長　鷽は雀科に屬する小禽で、雀よりは幾分大きい、頭は黑く、背は靑灰色、尾は黑く翼の一部に白色部がある、顏から咽喉にかけて美しい薔薇色で、腹に灰色を呈す、此の薔薇色が此の鳥の特長で如何にも美しいし、聲も亦耳も傾けるに足る。

愛すべき小禽　我が國では、樺太や北海道、本州の山地にあつて繁殖し、梅の花の開く早春の頃になると群を爲して人里近くに現はれて來る、時にそれが梅の花を害したり、櫻などの蕾を荒したりすることもあるが、庭木の間に此の姿を見る時は、如何にも和やかな氣分を懷かせる。

うそ替の神事　東京の龜戸天滿宮では、鷽替への神事があつて、神社から簡單な木彫の鷽を授けるのは、よく人の知る處、總ての災害凶事を嘘にして新しき幸福を願ひ求めるといふことから來てゐる、他愛のない話ではあるが、天神の祠丈けに面白い。

◇

いろ〳〵の異名　支那では『拙老婆』だの『灰兒』だのといふ異名がある、灰兒は全體の色彩から來てゐるのであるが、『拙老婆』は何の意味であらう、それよりも面白いのは、日本の『照鷽』『雨鷽』である、此の咽喉の色の鮮かに美しいのが照鷽で雄のことであり、雌はやゝ淡いので雨鷽とせられてゐる、『琴彈鳥』の名も優しい、これは囀る時に脚を動かすが、これが琴を彈くやうであるからとて、かう名付けられてゐるのであるが、『うそ姫』といふのも『琴も彈く』といふ處から女性に見られてゐるのであらう。

鷽の歌　早春に訪れて來るといふところから、歌人の詩興を愛つて

うそ鳥の春かたけぬと鳴く聲に森の樫の木脫きすてにけり　長塚節

うそ鳥よ汝が鳴く時に我が好む枇杷のわつかに靑むうれしも　同

など、歌はれ、また

ひそやかに家居はしつれ春されば庭木に鷽の啼くがともしき　久保田不二子

きさらぎの雨降る庭にうそ鳥のかそけく啼くをききとめて居る　同

など、此の鳥のさゝやかなる鳴き聲にも、細かい神經の動きが感ぜられる。

俳句の鷽　俳句では春の季題に入れられてゐる、有名なのは白雄の

照る雨や瀧をめぐれば鷽の啼く

で、情景共によく出てゐる、此の外

鹿垣にうそ啼く里のやすみかな

と吟じてゐる。

鶯の聲き〻そめてより山路かな　式元
飼鶯を鳴きつぶしたる雀かな　長翠
春の門鶯鳴きやんで夜となりぬ　青々

その『琴彈鳥』といふ名についての句としては

春の雪降らすや鶯の琴の音　山只

といふのがある、形の上の名であるが、かうなると鳴く音にまで縁が繋がつて來る。

◇

繪畫に現はれた例　繪畫に現はれた鶯を見ると、洗石に四條圓山派の作品に多い、應擧には、『竹に鶯』の名作がある、洗練された筆で、よく此の鳥を活躍させてゐる、蘆雪は連翹に之を配してゐる、蘆雪は小禽を好んで畫き、筆致に一の癖はあるもの〻才氣煥發、中々の達筆である、景文には桃花に配した作がある、達者といふ丈けのものだが、鳥の姿はよく寫されてゐる。

家光公の作　變つたものでは、德川家光公に有名な『囀鳥』の幅がある、藤田男爵家の襲藏であつた、鳥はさして巧者でもないが、これに澤庵和尚が

世の人のそれはそれにてこのとりのうそとよぶこそ有名無實なれ　冥元

と贊をしてゐるので名高くなつてゐるのである。

現代畫人の作　現代の人々では、福田平八郎氏の作によく此の鳥を見る、氏の描く處は、實物よりは細目で、尾も一寸長く見えるのでもあるが、如何にも調子よく、『雪野』と題した作など、殊に面白く見られた。川端龍子氏が昭和八年の個人展覽會に出品した山楓四季の中、冬の『銀枝』は面白い、枝と枝の間に雪の殘つてゐる野楓の木に五羽の鶯を配してゐるのであるが、五羽が五羽、姿を異にしてゐるのが殊に興を引く。

富田溪仙氏は昭和十年の尙美展に『棗』を出品して、鶯を配してゐる、棗とは面白いものを捉へたものである。

◇

いづこより籠ぬけ來にけむうそ鳥の吾家のつまの梅に遊べる　田安宗武

四　連雀（れんじやく）

連雀の概說　倭名抄云、連雀者唐雀也、今俗所稱者雀之有毛冠也、是鳥希見、疑異國鳥矣。

按連雀今處處有、狀如雀之大、頭背胸灰赤色、翅黑有黃白圓文、羽尾端略紅、其尾短黑頂上有毛冠、眼頷邊黑、常棲山林成群、以形美、人畜樊中、或披尾如舞略似孔雀形勢、但聲不好、如曰比伊比

伊豆此與=練鵲=字同音、而物異、其練鵲卽帶鳥也、連雀卽冠鳥也、今人稱有=毛冠=鳥不=曰毛冠、其鳥謂=有=連雀=。

黃連雀　形狀同連雀而羽毛端共黃。

これは寺島良安の『和漢三才圖會』の記す處、常に先づ『本草綱目』を引くのであるが、こゝには『倭名抄』を引いてゐる、その『按ずるに』からが良安の說であるが、連雀を說いて簡單ながら要領を盡してゐる、古人の自然に對する觀察も、決して侮ることが出來ないと思はせられる。

黃連雀緋連雀　連雀は、連雀科に屬し、黃連雀と緋連雀の二種がある、普通繪畫などに畫かれるのは黃連雀で、黃連雀といふ名の外に、『十二黃』『太平鳥』などゝ呼ばれる、初列風切羽の先端と尾の端が黃色なので、黃連雀といふのであるが、總體の感じは葡萄褐色、翼に一寸白色の部分があり、眼の周圍から嘴の下が深黑色である、緋連雀の方は、形やや小さく、黃連雀の黃色な部分が紅色で美しく、躰の葡萄褐色も幾多濃い感じである、朱連雀ともいひ、十二紅ともいふ、その著しい特長は、その羽冠で、これが直立してゐるのが甚だ面白い、嘴は細く短いが銳く、眼光は烱々としてゐる。

ほや鳥の異名　この鳥は共に北極からシベリヤ地方で繁殖し、冬になると群をなし、北海道方面をはじめ本州北部から、伊豆七島、九州方面へ渡る、羽色が美しいので、その群飛するさまは誠に壯觀であり奇觀である、そして靑森地方では寄生樹の果實を好んで食べるので、『ほやどり』の俗名がある、『ほや』は『寄生樹』の方言である、本州地方に來ると、よく八つ手の實などを漁つて食べる。

◇

美しい鳥　連雀は形が面白く、色彩も美しいので、東洋畫にはよく現はれて來る、山口蓬春氏が所藏する傳玉若水の花鳥橫物に現はれた連雀は緋連雀であるが、形が實に立派であり、細くとも力がある線が此の鳥を躍動せしめ、賦彩また[illegible]である。

古畫の連雀　福井の松平侯爵家舊藏、呂紀の花鳥双幅中にも、枇杷の上にこれを描いてゐる、中々謹嚴な大作である、それから紀州家の『兩朝金璧連珠畫帖』には、梅花に連雀を配してゐる馬麟の作があるが、これも寫生は整つてゐる。此の梅に連雀を配した構圖は、日本でも狩野派の人々がよく倣ひ、島津家には松榮の作があつた、また枇杷に此の鳥を畫いたものは、元信にもある、小品ではあるが、中々の密畫である、矢張り宋畫あたりの影響であらう。構圖にも筆致にもそれが見える。

應擧の作　四條圓山系統のものでは、應擧に『菊と連雀の圖』がある、橋本辰二郎氏の藏品である、連雀は冬鳥で、秋から冬を經て、春に到つて去る鳥であるから、菊などに配するのは殊に面白いのであるが、此の圖のやうなものは珍らしい、吳春には『合歡に連雀』の作があるがこれは、對照がそぐはない、季節に誤がある、景文は四季花鳥屏風の中にこれを畫いてゐるが、これは東洋畫の一つの型式であるから、敢へて咎むべきではない。

現代の人々の作　現代の日本畫に現はれたのでは、昭和八年、川端龍子氏が個人展覽會に出品した『楓に連雀』同六年の個人展覽會に出品した『惜春』と題した作など眞先に擧げられる、『惜春』は山櫻に連雀を配したものである、山櫻に連雀を畫いたものでは、横山大觀氏にもその作がある、但しこれはやゝ前畫きである。

小室翠雲氏は昭和十年の個展に、『仙洞雪』と題して沈丁花に此の鳥を畫いたが、これは珍らしい配合である。

水上泰生氏は『清秋』といふ芙蓉の作を、十回の帝展に出品したが、これにも連雀を畫いてゐた、同じ年、上村松篁氏の『春園鳥語』にも此の鳥が配せられ、それから、第十四回の帝展で特選を贏ち得た竹原朝風氏の『豐秋禽喜』は、面白い構圖の作であつたが、石榴を廻る小禽の群れの中で、連雀は一際目出つてゐた、第十四回の日本美術院展覽會には、小山大月氏の『麗日春禽』があつて、海棠に連雀を配し、美しい畫面を見せてゐた。

◇

俳句の連雀　文學の方面には、あまり著しいものはない僅かに俳句の方で、秋の季題に扱はれてゐる位、それとても、數は至つて少い。

連雀の尾はむつかしし鳥の形　土芳

連雀や獨しだるゝ松の中　蓼太

連雀の名は唐鳥に似たる哉　三成

連雀の尾をしだるゝや谷の水　一晴

緋連雀一齊に立つてもれもなし　青畝

五　雲雀（ひばり）

大伴家持の名歌　この歌は『萬葉集』第十九卷に收められた雲雀の歌として有名なるもので、作者は大伴家持と傳へられてゐる、長閑なる春の日、青麥が黑い畑土の上に幾十筋かの綠の縞を描き、菜の花が黃金色に咲き出づる時、その青麥の間から、揚雲雀が空高く名乘り出る、その朗らかな小刻みな囀りを聞く時は、何ともいへぬ愉快な氣分に浸される。

うららうらに照れる春日に雲雀あがりこゝろ悲しもひとりし思へば

實際雲雀は春の鳥の中でも、最も朗らかなもので、その囀りを聞いてゐると、魂が拔け出て春野をさまよふやうな感じに打たれる、『萬葉集』を繙くと、また第二十卷の中にも、

朝な朝なあがるひばりになりてしか都にゆきてはやかへりこむ

ひばりあがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞棚引く

の二首がある。

前のは安倍沙美麿の作で、都を戀したふの餘り大空高く舞ひあがる雲雀の身を羨む心根が文字の上に遺憾なく現はれ、後者は矢張り大伴家持の歌で、家持が難波へ勅使として參向し、その歸るさ霞立ちこむる都の空を望みての述懐である、實際雲雀の歌を聞いてゐると、かうした感じに打たれるものである。

西洋でも雲雀には有名な歌がある、ブラウニングのピパの歌の如きはその一つで、よく人口に膾炙され、日本でも最近谷崎潤一郎氏の『春琴抄』には鵙屋春琴と雲雀の話が美しく描かれてゐる、兎も角もかうして、雲雀が春の鳥として印象を深めてゐることは、今も昔も變りはない。

◇

飼鳥としての雲雀　飼ひ鳥としても雲雀は、これからだんだん盛にならうとしてゐる、細編みの胴の長い籠で、雲雀を飼つてゐる家は、其處此處に見られるし、同好家によつて啼合せ會も開かれてゐるし、番附などまで出來てゐる、その囀りを聞いてゐて、何處となしにのんびりした氣分になる點では、鶯の感傷的なのとは違つてゐる。

殊に支那人は雲雀を飼うことが上手である、中には天才的なのさへある、青島や大連あたりの苦力などがあのやうな勞働をしてゐる傍ら悠々として雲雀を飼ひ、その忙しい仕事の食休みには雲雀の聲を聞いて樂しむといふやうな暢氣な半面があり、更に輪に輪をかけた呑氣なのになると、朝仕事に出るのに、雲雀の籠をぶら下げて行き、仕事が終ると、またその鳥籠を提げて歸る、日本人も鳥好きの國民であるが、こんな點では、とても支那人には及ばない。

◇

雲雀の文字　雲雀といふ文字は、誰れがつけたか實に面白い、雀といふ文字をつけたのは形や大さ、色彩など似てゐることの表はれであり、雲は雲の中にまで高く登るといふところから來てゐること勿論である、それなら『ヒバリ』と稱へるわけは何處から來たか、新井白石は、その著『東雅』の中に

ヒバリは日晴なり、此の鳥晴ぬれば飛鳴して雲端に上るといふなり。

と記してゐる、これも成るほどと肯ける。

支那の名は、『告天子』『嘆天』『叫天子』などとある、何れも高く舞ひあがり、且つ賑やかに啼くことが、よく現はれてゐる、尤も此の文字の中で、告天子といふのは、普通の日本に見る雲雀とは幾分違ひ、形も大きく、嘴も大型で淡紅色を帶び、種々の鳥の啼き聲を眞似るといふ特性があり、その爲め百音鳥といふ別名もあるといふ、併し日本では矢張り告天子をヒバリに見てゐる。

◇

雲雀の種類　種類の中には、大雲雀といふのがある、俗に鬼ヒバリとも呼んでゐる、色彩は普通の雲雀と大して異る處はないが、形狀はやや大きく、その翼の長さ三寸五分から四寸に達し、平常は西比利亞から樺太、千島、北海道の邊に產し、多になると內地へ渡つて來るし、支那にも出現する、それから冠雲雀といふ

のがある、頭に著しい三角形の冠羽があるので、直ぐ區別はつく、普通の雲雀でも囀る時には一寸冠羽を立てるが、冠雲雀の冠羽はそんな程度でなく連雀のやうに著しい形を示してゐる、此の種は日本の內地では見られず、朝鮮から亞細亞の北部、歐洲にも分布して居れば亞弗利加の北部邊でも見られる、それから濱雲雀といふのがある、額から頰にかけて黑と蒼色で線條を爲し、更に著しい特徵としては眼尻の邊から頭上に左右耳なりに羽毛が伸びてゐる、色彩は上の方が褐色で下の方は白色、此の種類は歐洲から亞細亞に跨つて棲息してゐるのであるが、日本には稀れにしか見られない。

雲雀の形態　鳥學上からいふと、雲雀は燕雀類のヒバリ科に屬する愛らしい鳥で、其形狀や色彩等は洽く人に知られてゐるが、體の上部には茶褐色の羽毛があり、澤山の斑點を散布し、大雨覆の先は白色で一つの帶狀を呈し、顏から下部にかけては栗色、頰から脇には濃い褐色の斑點がある、頰はやゝ色濃く、腹は白く夏は此の褐色の部分が脫け、黑い處が著しく目立つて來る、大さは翼の長さ三寸四五分に上り、體の大さは五寸三分ほどに達する、後趾の爪が非常に長く、五六分もあるのは素早く地を走り廻る爲めの便宜である、その分布區域は隨分廣く、日本では四時見られるとはいふものゝ、矢張り靑麥の伸びるころが一番印象深く囀る聲も美しく、春の景物として逸すべからざるものである。

子雲雀の育つ日頃や春の風

子規の句にこんなのがある、雲雀と季節の關係をよく現はしてゐる。

◇

雲雀の習性　雲雀の形態や習性に就いてよく記してゐるのは、矢代通賢の『古今要覽稿』である、曰く、

天氣晴朗にして、日暖かなる時、忽ち草中より露路に直上し、啼き倦む時は飛ひ降りる、また草中に入る、その輕捷なること更に他の鳥の及ぶ處にあらず、さて此の巢は四月の頃、草中に地を茶碗の大さに深く穿ちて周圍に藁を入れ、其の內に草根いくばくを集め、馬のすす毛の類を多く交へ、すべて三重となし、卵をその中に孳すること大抵四つにして稀に五つを孳することあれど、大さ雀卵の如し、此の鳥の雌雄を分つには、額の毛の立つものを雄とし、立たざるを雌とす、雌はよしやその毛を立つることありといへども、これを雄に比すれば、いささか異れりとす。

と實によく盡してゐる。

揚雲雀と臺切り　此の空高く昇つて囀るといふ習性を利用してそれを飼ふのに揚雲雀といふ飼ひ方がある、それは籠から放つと、よく馴れた雲雀は野にあると同樣高く昇り、美しい聲で囀り、ある時間まで囀ると今度は籠に戻つて來る、かうした飼ひ方の出來るのは、此の鳥の特徵で、趣味もまた格別のわけである、いま一つは『臺切り』といふので、長い籠の一定の高さまで登ると、その中で囀るやうに仕立てる、これはその道の巧者でないとうまく行かぬさうである。

芭蕉の句　雲雀の習性として知られてゐるのは、その營巢の地を擇ぶことである、麥畑のやうな處に巢を

構へるにしても、眞ん中などには決して作らず、人の通行する路に近い處に作る、それは蛇などに襲はれることを恐れるからだといふ、それから空から舞ひ下りて巣に戻るにも、巣の所へ眞直には降りない、必らず巣から數間離れた處に降り、歩いて巣に近づくのである。

永き日を囀り足らぬ雲雀かな　芭蕉

これは芭蕉の句、雲雀の歌は、雲雀の生活そのものである。

子や待たん餘り雲雀の高上り　杉風

ある折はうそにも落ちて雲雀哉　千代女

これらも雲雀の習性をよく見た句である。

◇

雲雀の繪　雲雀は春の風物として如何にも長閑なもので、昔からよく畫に現はれて來る、住吉内記には春草に麥を配し雲雀の遊ぶ處を畫いた有名な作があるし、來章には麥雲雀と稻雲雀と對幅にした洒落れた作がある、四條圓山の人々の作など一々擧げたら際限はあるまい、

最近の作では、昭和九年三越の展觀に現はれた荒木十畝氏の『長閑』、川端龍子氏が、初風莊の展覽會に出品した『雲雀野』これは一面のクローバーの中に雲雀を點出した變つた構圖の作である、山口蓬春氏にも『春』と題して百花の中に雲雀を配した美しい作があるし、宇田荻邨氏には『桃雲雀』の氣の利いた作があり、人物を配したものでは、故山口八九子氏が、帝展五回に出品した『雲雀を揚ぐる夕』など、まだ觀者の記憶に新しきものがあらう。

六　燕（つばめ）

けさ見ればいつか來にけむわが門の苗代小田につばめ飛ぶなり　香川景樹

此の歌を誦してゐると、恰も四條圓山あたりの洗練された構圖筆致で、さ綠の苗代小田の上に燕の飛び交ふさまが、一幅の繪になつて目の前に浮んで來る、また

つばくらめ親待ちかねてならべればわれも遲しと見る軒端かな　大隈言道

を見ると、軒端に巣を營み、雛を育てる愛らしい姿が偲ばれる。

親しみの深い小鳥　かうして燕が人に親しみを有つてゐるのは此の鳥が深山幽谷を棲息地とせず、必らず人里に來て、軒に巣を作り、その殊勝にも雛を養ふさまが人の同情を引き、自然この鳥を保護するやうになつて來たからである、今日進んだ鳥學上の習性研究に依ると、此の鳥が、植物を傷ふ害蟲などを捕食して、人の生活上に貢獻してゐることは、極めて大なるものがあるが、昔の人が燕を愛し、これを保護した事は、かうした理由からでなく、唯目の前に見る母性愛の純情に動かされたからであらう。それといま一つは、春

來り、秋去る、そして、渡りの季節を違へず、その巣を忘れず、そこに此の鳥への愛着を感じて來たからである。

◇

燕と畫題　更にこれを美術の上に現はれた實例に就いて見る、燕が遠い南の國から、八重の潮路を遙々と再び日本に尋ねて來る季節は、青柳の糸の風に靡いて、見るもの聞くもの長閑な時である、その柳の枝の垂れた間を、燕の斜に飛び交ふさまは、誠に風情あるものである、だから、『翠柳燕語』だの『柳燕圖』だのといふ畫題が極めて多いので、これに次いでは蓮の花の漸く咲き出づる頃、燕にあつては一番の活躍時代で、もうその頃は、可愛い雛が巣の中に並んで、黄色い嘴を一杯に開いて親の持ち運ぶ餌を迎へてゐる時である。

波に燕　それから『波に燕』も中々多い、これは秋に去つて南の國に赴き再び春に歸つて來る、その遠い波路を、その健やかな翼で乘り切つて來る、それを讃へた意味も加はつてゐるのである、この外、牡丹の上に飛ばすもの、藤棚の下を潜るもの、人に依つていろ〳〵に趣向をかへて畫く。

燕の巣　更にその巣の扱ひ方が面白い、古來、土地々々で此の燕を保護した關係上、その巣もいろ〳〵に出來てゐる四隅に糸をつけた板を吊つて之に巣を作らせるもの、壁から棚を張出して、營巣の便を圖つたもの、處に應じ、場所に從つて之を導いてやると、燕はよく嘴に土やその他の材料を運んで、立派に巣を作りあげる、併し、時とすると蛇などに襲はれて可愛い卵や、雛を奪はれることも屢々ある。

母性愛の傳說　その親燕が、雛を奪はれたり、卵を浚はれたりした時の悲しみは、全く他所の見る目も憐れである、さうした事から、親燕が雛を保護する種々の傳說さへも遺つてゐる、例へば幾度か雛を奪はれた悲しさに、可憐な燕が復讐を企て、何處から探して來たか、蛇の襲ひ來る口に縫針を刺して置いた、蛇は矢庭に雛に襲ひかゝらうとしてその針を咽喉に突き刺し、苦しみに堪へかねて軒から轉げ落ちた話、それから漸く成長した雛が巣から墜ちて死ぬことが間々あるので、親鳥が馬の尻毛を探して來て、雛の足と巣とを結びつけ墜落を防いだといふ話、眞僞は兎に角として、こんな小鳥でも如何に母性愛の深いものであるかといふことを傳へる好個の挿話である。

白氏文集の燕の詩　更にかうした燕の愛を賦した作が、白居易の『白氏文集』中にある。曰く、

梁上有雙燕、翩々雄與雌、銜泥兩椽間、一巣生四兒、四兒日夜長、
索食聲孜々、青蟲不易捕、黄口無飽期、嘴爪雖欲弊、心力不知疲、
須臾千來往、猶恐巣中饑、辛勤三十日、母瘦雛漸肥、喃々教言語、
一々刷毛衣、一旦羽翼成、引上庭樹枝、擧翅不回顧、隨風四散飛、
雌雄空中鳴、聲盡呼不歸、却入空巣裏、啁啾終夜悲、燕燕爾勿悲、
爾當返自思、思爾爲雛日、高飛背母時、當時父母念、今日爾應知。

と、文學の驅馳實に自由自在、よく此の鳥を描いてゐる。

◇

燕の名畫　燕の名畫の中で、最も印象の深いのは、勝田竹翁の『蓮燕圖』である、水墨で、極めて簡楚な筆の中に、花瓣の散り果てた蓮を描き、これに一羽の燕がとまつてゐる、筆の餘勢は伏せる葉となり、直線の蘭となつてゐる、此の燕の姿、僅か數筆に過ぎないが、實によく活躍してゐる。

勝田竹翁の傳　竹翁は名を貞寛、一に定則、又重則といひ字を陽溪、一に養溪といふ、通稱は伊之助、後に沖之丞と改む、別に東濱、翠竹庵、秋友齋等の別號がある、三河國加茂郡の鄕士で、慶長十八年、僅か八歲にして土井大炊頭に召され、狩野休白の門に入つて畫を學び、寛永七年、二十五歲にして三代將軍家光公の御部屋繪師となつた、初めは狩野派の畫風であつたが、後に雪舟、雪村の畫風を慕ひ、枯淡雅潤一家をなし、八十二歲の高齡を以て歿したといふ、此の蓮燕圖は、その代表的傑作と稱せられるものであるが、作は餘り多く傳へられてゐない。

光琳の傑作　燕の傑作としては、横濱の原富太郎氏祕藏光琳の『波に燕圖』を逸することが出來ない、微妙を極めた波の細線の上に、二羽の燕を點出したのであるが、此の燕も、極めて簡略な筆で、僅かに數筆に過ぎない、そして上墨の勇勁な用筆に對し、波の細線が、面白い對照を見せてゐる、素晴しい出來榮である。

探幽にも『柳燕、蓮燕』の面白い作がある、これは越前松平侯の舊藏で、右が柳燕、左が蓮燕の双幅である柳も、蓮も、淡墨で瀟洒に畫き、柳にはとまる燕を、蓮には翔る燕を形をかへ、位置を異にして畫いてゐるのが、實によく調和し東洋畫獨特の味を見せた、探幽の筆の含蓄が、今更乍ら偲ばれるものがある。

探幽に次いで常信もよく燕を畫いてゐる、波に燕、柳燕、それらは好んで畫いた處で、狩野派の一つの特長を最もよく發揮してゐる。併し、それより遡つて元信に至ると、筆致も大分違つて來る、元信の作で、著者の記憶に殘つてゐるものでは　松平侯爵家舊藏の『柳燕圖』、井上侯爵家舊藏の『蓮鷺燕』など主なものであるが、これは探幽や常信などに見る簡勁素朴の味よりは、重厚雅醇といつた風で、同じ柳を畫いたにしても、元信の方は、一枝一葉も苟もせずといふ風な行き方である、松平家のものは、中大黑、左柳燕、右鴨の三幅對であるが、構圖はあまり類例を見ないものである、相阿彌の作にも氣の利いた『柳燕圖』がある、これはまた極めて堅實な構圖で、筆も亦洗練されてゐた。

雅邦の柳燕　近く橋本雅邦にも柳燕の傑作がある、これは曾てセントルイスの博覽會に出品されたもので着色の大幅、畫面の大部分は雨に煙る翠柳で、その濃淡が非常に趣き深く、その柳の下に二羽の燕が翔つてゐるのであるが、同じ柳燕でありながら、まるで構圖が變つてゐる。

高然暉の山水飛燕　風景畫の中に燕の畫かれる場合も多い、その中で、高然暉の『山水飛燕圖』は忘られぬ印象をとゞめてゐる傑作である、それは神戸の川崎男爵家のものであつた、僅か九寸四方位の小點であるが上部には高然暉一流の丸い山々の重疊した處を畫き、麓は全く雲烟となり、そこに四羽の燕が飛んでゐる、構圖から見ても、あまり類例を見ないものであり、燕などほんと五六分の大さに過ぎないが、實によく活躍

してゐる、素晴しい作である。

風變りのものでは、神戸の田村家舊藏に張子政の『柳燕圖』があり、此の柳燕、さして構圖に變つた處はないのであるが、當時の文人禪僧等十數名が、思ひ思ひの賛をしてその全幅を滿たしてゐることで、蓋し一種の藝術的遊戯に過ぎないのであるが、繪のよいのと賛の面白いので、かくは不朽の名聲を留めてゐるのであらう。

賛といへば、抱一にも燕の自畫自賛で面白いのがある、苗代田の鳴子の上に一羽の燕を畫き、これに

なわしろや乙鳥ふたつ　のしなへうち

と、流石に俳味が溢れてゐる。

◇

現代人の作　次に現代の人々の作を見る、最も印象の深いのは、昭和十年の春、川端龍子氏が南洋風物を主題とした個人展覽會に、『南燕圖』と題して出品した作で、これは氏が得意の群青の波の上に、十數羽の燕の飛翔を畫いたもので、如何にも熱國の情趣を偲ばせるものがあつた。

海に燕を配したものでは、第十一回の日本南畫院展覽會に、田中咄哉州氏が出品した『山海』六曲一双の中一脈相通ずるものある作である。

海の部で、水墨を以て澎湃たる巨濤を描き、その上に燕數羽が飛翔してゐる、構圖極めて雄大、『南燕圖』と

荒木十畝氏にも『巣立ち』と題した面白い作がある、雨中の電線に燕が並んでとまつてゐる構圖、巣立ちしてから間も無い感じがよく出てゐた、これは昭和四年個人展覽會の作品であつた。故湯田玉水氏にも『燕語』の作がある、石上に双燕の私語するが如く囀り合ふてゐる平和な畫境、よくその氣分が現はれてゐた。

かうした花鳥畫以外に、燕を畫いたものでは、第十五回日本美術院展覽會に於ける、小山大月氏の『籠』を擧げなければならない、東北邊の農家の厨を描いたもので、籠の上に、吊巣があつて燕が雛を育てゝゐる、關東邊では見られぬ面白い境地である、中村岳陵氏もこれに一寸似た作がある『繩墜簾』に燕の斜に飛び交ふ圖で、構圖が珍らしかつた。

白燕　燕を描いた作は、まだいくらもあるが、古畫には、時に白燕を畫くことがある、現に秋暉などにはその大作があるが、白燕は、唯動物の白化作用に依る一の畸形に過ぎぬのであるが、昔は瑞祥として喜んだものである。

工藝美術では、大倉男爵家の、柳に燕の蒔繪の釣花生が有名である、桃山時代の作で、畫風は土佐に近く極めて大まかな味のあるもので、柳は例の桃山百双屏風の畫風に近く二羽の燕の形も面白い。

◇

燕の文學　文學の方面に於ける燕は、その現はれてゐる範圍もあまりに廣く、和歌では、『萬葉集』の十九大伴家持の

燕來る時になりぬとかりかねはふるさと思ひつゝくもかくれなく

といふ淺りを言ひあらはした歌の外に、かうした感じを歌つたものが、いくらもある。

二月のなかはになるとしりかほにはやくも來けるつはくらめかな　民部卿爲家

荒ほてゝ春のいろなきふるさとにうらやむ鳥ぞつばさならぶる　前中納言定家

かそいろはあはれとみらむつはめだにふたりはひとにちぎらぬものを　讀人不知

などは、燕をとほして、時代の人の思想が窺はれる。

燕の習性　燕の習性は既に人の知る處、その翼に比して足の長くないのは、此の鳥、地を歩み、樹の枝などに永くとまることが少い爲めであり嘴の大きいのは、翔りながら小蟲を捕へるのに便利になつてゐる、その翼の强く、速力の早いことは有名なもので、一時間に百八十哩も飛翔する、併し一度にかうした速力は出さない、悠々と翼に餘裕をもつて飛ぶ。

種類には、普通種の外、岩燕、雨燕、砂濱燕、琉球燕などがある、その一旦作つた巣を忘れずに、再び戻つて來るといふ可憐な習性は、古來幾多の挿話を殘してゐる、畫材の上からも、文學の上からも、また人生に多大の貢獻をするといふ上からも、燕は愛すべき鳥である。

野老柴門日々閒、旦無欄檻礙飛回、勸君莫入珠簾去、鞨鼓如雷打出來。　劉克莊

七　瑠璃（るり）

大瑠璃と小瑠璃　瑠璃鳥と一口に呼ばれ、その色彩の美しい處から、繪にもよく畫かれてゐるが、瑠璃には大瑠璃と小瑠璃があり、大瑠璃は鶲科に屬し、小瑠璃は鶫科で、全然別のものである、唯形や色彩が似てゐるので、昔から瑠璃鳥の名のもとに包含せられてゐる、併し科が別であるやうに、雙方を比較すると多少の違ひがある、一番見分け易い點は、大瑠璃は形も大きく、頭から背、尾にかけて鮮麗なる瑠璃色であり、眼や嘴の下から胸の邊まで黑く、腹は白色、尾にも基部に白色の處があり、嘴は小瑠璃に比して太く、先が一寸鈎なりになつてゐる。

小瑠璃は大瑠璃に比し、その名の通り一まはり小さく駒鳥位の大さで、矢張り美しい瑠璃色ではあるが、やゝ黑みを帶び、眼の邊は黑いが胸から腹へかけて白色であり、嘴も細い。何れも千島から北海道、本州到る處に見られ、山地にあつて繁殖するが、冬になると南洋方面の熱帶地方に渡り越冬する、富士山麓須走村での調査に依ると、大瑠璃は四月中旬から下旬にかけて渡來し、初鳴四月中下旬、卵期五月上旬から七月下旬まで、九月には去つてしまうといひ、小瑠璃も殆んど同じで、鳴きのやむのは七月の下旬であるといふ。

美しいのは雄　以上の美しい羽色を有するのは雄で、雌は大瑠璃は茶褐色、咽喉と腹は白く、小瑠璃は背

面橄欖色で胸の邊やや黄色を帶びてゐる、その巣は、崖下や道端、土手などに落葉や草の根、蘚苔類などを集めて作り、四個から五個位の卵を生む、卵の色彩は、小瑠璃の方は美しい青磁色で、斑點はなく、大瑠璃の方は地色が淡い褐色で、これに紫がゝつた斑點を散布する。

夏鳥で秋は去る　大瑠璃、小瑠璃共にかうした生態で、いはゞ夏鳥に屬するものであるから、春から夏にかけての風物に添へることは出來るが、秋には全然姿を見せない、畫家などは此の邊に、十分の注意を要する。

◇

竹林鳥の名　大瑠璃には古來竹林鳥の異名があり、小瑠璃には青鶲の名がある、碧鳥の文字は双方に用ゐてゐるやうである、『和漢三才圖會』には

按瑠璃鳥、狀大如雀而頭背翩上翠碧色、頰頷至ニ臆下一純黑胸腹白、嘴脚尾俱蒼色、其聲圓滑清囀如レ曰ニ知與豆比知與豆比一、畜之籠中弄レ之。

とあり、その文も圖も立派に大瑠璃である。

俳句の瑠璃　俳句の方では、どういふわけか、これを秋の季題に入れてゐる、改造社の『歳時記』には

心そめつるりひわ目白青しとど　廣寧
何の木の花を吸ふとや瑠璃頻赤　路青

青雲にまぎれて瑠璃の渡りけり　敲水
瑠璃來鳴く畑一境のきよきかな　青々

の例句四つを擧げてゐるが、何れの句にも季節はは つきり出てゐない、唯、敲水の句に渡りを讀んでゐるのが清新の感じを與へる。

瑠璃の歌　短歌などに讀まれた例は極めて稀れである、唯一首

薄雲は清澄山をとざしつゝあかときにして瑠璃鳥の聲　上坂信勝

といふのを見出した、大方これは大瑠璃の方であらう。

◇

誤りの多い瑠璃の繪　色彩が美しいので、畫中のものとしては極めて面白いので、よくいろいろのものに配せられるが、古いものには季節と鳥の關係などおかまひなしのものなど相應に多い、藤田男爵家舊藏の中に、景文の『雪中松に瑠璃』の作がある、作としては相應な出來であるが、雪の降つてゐる時分には、大瑠璃は遠く南洋邊で越冬してゐる筈である、紀州家舊藏品に、柳里恭の『紅梅翠雀圖』といふのがある、此の翠雀といふのが、胸の邊を見ると大瑠璃に似て非なる處があり、全體が瑠璃色なので、先づ大瑠璃と見るべきであるが、それにしては紅梅にとまつてゐる點が季節の無視である。

現代の人でも宇田荻邨氏は、第十五回の帝展に白梅に小瑠璃を畫いてゐたが、これも季節違ひである、な

ほ氏には、連翹に小瑠璃を畫いた作もある、色彩の對照から見ると如何にも美しいが、連翹の咲く頃には、まだ小瑠璃は日本に渡つて來ないと見るのが至當である。

御舟の遺作と瑠璃　大瑠璃をよく畫つたのは、故速水御舟である、平常此の鳥の形と色彩とを愛し、いろいろと寫生もしてゐたといふ、その遺作展覽會の出品だけでも、『枇杷と瑠璃』『仙果瑠璃鳥』『美男かつらに瑠璃』の三作を數へた、此の中『美男かつらに瑠璃』は構圖も面白く美しい作であつた。

此の外、栖鳳氏には、竹林に大瑠璃も畫いた『初夏』があり、川崎小虎氏には夾竹桃に大瑠璃を配した作を數へ、第十二回の日本美術院の彫刻には、藤井浩祐氏の『小瑠璃』があつて異彩を放つてゐた。

八　鳩　鴿（はと）

徽宗皇帝の『桃鳩圖』　鳩の藝術の神品としては、先づ徽宗皇帝筆の『桃鳩圖』を第一に擧げなければならない、圖は既に知られ切つてゐる處であるから、今更これを繰返す要もないが、左手から差し出した桃の小枝にとまる山鳩の姿態は眞に迫り、その桃の枝の配置としつくり合つて、一點一劃の加除を許さない、正確なる寫生を基礎としながらも筆致極めて謹嚴、一種宗教的威嚴に打たるゝものあるは、皇帝の筆の威力を示すもの、誠に東洋畫としての至寶である。圖には『大觀丁亥御筆』とあり、下に天水の押字があり、帝二十六歳

鳩の作といふ、如何に天禀の才を有してゐたかゞ知られる。

皇帝、諱は俗、神宗の子で趙宋八代の皇帝である、その政治上の事蹟は見るべきもの更になく、その最後の如き、金の爲めに亡ぼされて悲慘な死を遂げてゐるが、藝術の上に於ては全く不世出の天才で、徐熙あたりから出てゐる精緻絢麗なる畫風は、全く皇帝に依つて大成せられたというてよい、世に皇帝の筆と稱するもの、少くないが、これこそ眞蹟として隨一のものであり、井上侯爵家の祕藏であり、先年同家の賣立に際しても、此の圖だけは家寶として家に傳へることゝなり、近くは滿洲國皇帝御來朝に際し、親しく御覽に供へて御旅情を慰め奉つたこと、なほ世人の記憶に新なるものがあらう。

牧谿の鳩　此の精緻極まる鳩の作に對し、簡疎な水墨の略筆で、よく神韻を傳へてゐるものに、牧谿の、『鳩』がある、左手から斜に差出した枝の上に、翼を休むる雉鳩一羽、嘴を羽の間に入れ、眼を閉ぢて憩ふ處靜寂そのものであり、禪味そのものである、牧谿の此の種の作の筆の渾熟してゐることは敢へて贅言を費すの要もないが、此の作の如き、僅かに濃淡の墨色だけで、鳩の色彩の眞を現はし、これを中心とする天地の靜けさを描き出してゐること、唯敬服の外はない。これは朝吹常吉氏の祕藏する處である。

邊文進の鳩　邊文進にも『桃鳩圖』のよい作がある、滿開の桃の枝に鳩が一羽とまつてゐる構圖で、中々精緻を極めた作、徽宗皇帝の『桃鳩』などに比べると調子は低いが、併し品位はある、これは高橋是清氏の舊藏であつた。

奇拔な構圖で記憶に殘つてゐるのは、傳雪舟といふ島津家舊藏の大幅である、圖は水邊に蓮が畫かれ、枝振り面白い松が圖の中央に位置を占め、上に鳩が一羽翔つてゐる、此の鳩の翼を擴げた姿は珍しい形で、聊か不自然のやうにも思はれるが、流石に雪舟の筆といはれるだけあつて、引締つた出來である。雪舟にはなほ華表の上に鳩の一羽とまつた變つた構圖のものがある、これは八幡大菩薩の五大文字を記し、文明八年壬辰秋の落款がある。いふまでもなく八幡宮への獻納品で、この幅は井上侯爵家の舊藏であつた。

狩野家の人々もよく鳩を畫いた、『桃鳩』とか、『枯木鳩』とか、大抵は定まつた題で、構圖までが極まつてゐる、元信の『枯木鳩』(島津家舊藏)『柳鳩』(片岡直溫氏愛藏)などその一例で、大體お約束通りであるが、簡素な筆の中によく鳩の姿態を寫してゐるのは敬服に堪へない、探幽もよく畫いてゐる、神戸の田村氏の『梅鳩』や、佐竹侯爵家傳來の『雪中鳩』など擧げられる、この外雅樂之助にもあれば、常信にもあり、守景にもあれば、安信にもある。

別派のものでは松花堂の作、友松の作、四條圓山の人々もよく畫いてゐる、殊に景年には『群鳩』の大作があり、景文には糸櫻に鳩を配した美しい作がある。椿山の『春庭香艶』の大作にも鳩が美しく畫かれてゐる。

◇

雅邦の鳩の屏風　明治以降の人々の作を擧げても少くない、先づ雅邦には、金地に鳩と烏とを畫いた屏風一双があり、鳩の方には柳が配してある(竹内家舊藏)寫眞も明治後の花鳥畫の大家だけによくこれを畫き、その嗣、十畝氏にも幾多鳩を畫いた力作があるが、梅咲く藪垣に、白子鳩を配した『春寒』雨に濡るゝ山茶花に鳩のとまる『幽林休禽』など情景並び到るの名作、菱田春草には、『松上双鳩』の力作があり、小華には石榴双鳩がある。

現代人の鳩の繪　現代の人々の作で、著者の手記に載つてゐるもの丈けでも左の諸點がある。

小室　翠雲　『和樂』　梨花に鳩
結城　素明　『鳩』　若楓に双鳩
川端　龍子　『夕月』　竹林に鳩　『庭上印象』
櫛原　紫峰　『雉子鳩』『白桃双鳩』『雪中双鳩』
横尾　翠田　『淨晨』　雪中に群鳩
上村　松篁　『春園鳥語』
田中　青坪　『和春』　群鳩に雛一羽の六曲
松元　道夫　『慈光』　春の庭に白鳩
大村　廣陽　『春のうす雪』　竹林に鳩
兒玉　希望　『暮春』　水車に山鳩
武口多景志　『鳩』　木瓜の木に配す

中島　清　『京の店』　屋根の上の家鳩

溪仙氏の傳書鳩　此の外に、第二十一回日本美術院展覽會には、富田溪仙氏の『傳書鳩』があつて評判となつた傳書鳩は、普通の山鳩や家鳩とは、形も變つてゐるのであるが、鳩舍から群飛するの狀態は繪としても面白いもの、溪仙氏の此の作はよく傳書鳩の習性を寫し得て興味深い作であつた。

◇

鳩と鴿　鳩は、いま略して鳩の文字を用ゐてゐるが正しくは、どばと、又は家ばとには『鴿』を用ひ野生の種類には鳩の文字を用ふるのである、鴿（はと）、家鴿はもと河原鳩から出たもので、頭は鼠色、頭の邊は金屬性を帶びた光澤のある綠色で、首から下背にかけては淡灰色、翼には二條の横斑がある、嘴は灰黑色で脚は赤い總て鳩鴿類の特色は嘴にあつて、比較的小さいが、その基部は膜に被はれ鼻はその中にあつて開口する、神社や佛閣、或は人家に飼はれて愛育されるのは、此の種であるがこれが原種である河原鳩は、反對に海岸の斷崖などの洞窟に營巢してゐたものであつた、それが原種は何時しか絶滅してしまひ、その種から出た『とばと』『いへばと』が、家禽として繁殖してゐるなど、不思議な因緣といはねばならない。

雉子鳩　野生の鳩の中で、一番多く知られてゐるのは雉子鳩である、色彩は頭から頸、胸にかけて葡萄色頭の横側から、黑と灰色の斑紋があり、肩から雨覆羽の大部分も、黑と茶色の斑紋がある、雉子鳩の名稱は蓋しこの色彩から出たものであらう、繪畫に現はれるのは多くこれで、牧谿の鳩も、雪舟の作も、大抵此の

を畫いてゐる、日本では到る處に分布してゐるが、唯琉球に居るもののみが、幾分羽色を異にしてゐる。

白子鳩　白子鳩は、俗に珠數かけ鳩と呼ばれて、よく知られてゐる種類である、體の形がほつそりしてゐて全身赤みがかつた灰色、背の頸筋に黑い輪があり著しい特長となつてゐる、昔は澤山棲息してゐたのであるが、濫獲の結果であらう、今は少くなつて、僅かに埼玉、千葉の江戸川筋御鷹場附近に棲息してゐるのを見るばかり、他には全く見られぬといふ、古來畫に現はれた鳩が、多く雉子鳩であるやうに、いまの畫人の畫く鳩には、此の白子鳩が多い。それから全身白色で美しい銀鳩は此の種から出たものである。

烏鳩　烏鳩といふのがある、鳩の中では大形のもので、本州の南部溫暖の地方に棲息する、羽色は名の通り全體黑色で紫色又は綠色の光澤があり、頸及上胸はその光澤も一層美しい、本邦產の鳩中最大のものといふ、特長はあるが藝術上にはあまり交渉はない。

青鳩　羽毛の美しいのに青鳩がある、これは本邦特有の鳩で、他種に比しやゝ小さいが、頭から頸にかけて青綠色を呈し、頭の上から背、胸にかけてやゝ赤味を帶び、下は綠色で腹部の中央は白色、翼の雨覆は紫赤色、非常に飛翔力强く、山林に棲息する、此の鳩、時により繪畫などに現はれることがあるが、餘り多くはない。

傳書鳩　この外、傳書鳩は、『どばと』から出たもので、近來盛に飼育せられ、軍事上、その他日常の通信用にもだん〳〵廣く利用されて來た、傳書鳩に就いては、興味ある沿革があるが、それは、著者の前著『鳥』

にも記して置いたしこれも詳記するは、本書の役目でないので省略する、なほ外國産のもので、『冠鳩』が、籠鳥として飼育されて居り、時に繪畫にも現はれて來る、近頃の作では、西澤笛畝氏が曾てこれを繪にしたことがある。

◇

平和の鳥　鳩は昔から平和の鳥として、特別の親しみをもたれてゐる、その歸巣といふ特性は、今日のやうに立派な傳書鳩といふものが出來ぬ前から、その書信を齎らすといふことに使はれた例があり、それが、神佛の使ひと見なされ、或は『三枝の禮』といふやうな倫理的な方面にまで及ぼし、これが爲め神社佛閣ではよくこれを飼養し、人家に於てすらこれを飼ふ、繪畫に現はるゝことの多いのも、かうした特別な親しみから來て居り、畫題にも『鳩唳蟠桃』といふやうな目出度づくめのものがある。

鳩の杖　平和といふことを象徴する意味でも、鳩に添へて畫かれるものは、梅とか、櫻とかいふやうなものが多く、時に枯木などに配したものがあるが、それは却つて鳩によつて和やかな意味を表象するやうに畫かれてゐる。畏きあたりで、勲功のある重臣の老いたる人々へ許される鳩の杖も、かうした感じから出てゐる、即ち鳩は噎せぬ鳥故、それにあやかる爲めである。

とびかけるやはたの山の山鳩の鳴くなる聲はみやもとどろに　鎌倉右大臣

これは鶴ヶ岡八幡宮を詠じたもの、その『みやもとどろ』の鳩の啼く音は、今も昔も變りはない。

我を秋とふる露なれば山鳩のなきこそわたれ君まつのえに　よみ人しらず

これも、いま、『松上双鳩』などゝなつて繪に畫かれる風情である。

いづこぞや鳴く山鳩の聲はして夜ほまだふかしありあけの月　木下幸久

花しろししのぶが岡の夕ぐもり鳩ぞ鳴くなる雨近みかも　間島多道

など、これも繪である。

漢詩の鳩　漢詩にもよく、現はれて來る、呉菊潭の

可憐一拙誤=平生=、天澗林高失=去程=、自=卷=舌來=棲立穩=、不知浮世幾陰晴。

は、歐陽修の

誰謂鳴鳩拙無用、雌雄各自知陰晴

と、一脈相關聯するものがあるではないか。

更に蘇軾の詩には、『記得金籠放雪衣』の句があり、鳩の別名を雪衣といふことこゝに始まる、なほ『正字通』には

唐鄭復禮曰、波斯舶上多養鴿、鴿能飛行數千里、放一隻至家、以平安信。

と傳書鳩の昔を傳へてゐる、これほどの鳥でも巣を營むことは拙く、『禽經』にも『拙者莫如鳩、不能爲巣』の句があつて、蜀では之を拙鳥といふとか、あまり有難くない名ではある。

九　尾長（をなが）

尾長鳥の形態　尾長は鴉科に屬する鳥で、その形はやゝ鵲に似てゐる、大さは幾分小形で、頭部は濃い黑色、頭から下と背は灰色、翼の風切羽は、第一第二初列風切の黑い外は皆內側黑く外側青く、嘴は細く鋭くして、その長さ約一寸、尾はその名の通り長く六寸から七寸ほどあつて、淡青色で美しく、唯中央の二枚だけが、先が白くなつて居り、一つの特長を示してゐる。

關東地方に多い　此の鳥は本邦の特產で、本州の各地と、九州の肥前に棲息する、昔は相應に多かつたのであるが、だん〳〵と減少して少くなつてしまつた、然し、關東地方には多いので、特に關東尾長と呼ばれてゐる位である、殊に埼玉縣の越ヶ谷附近に多く、丁度桃の滿開の頃、數十羽群をなして飛來し、花間に戲るのは眞に壯觀であるが、土地の人々は桃園を害されるといふので、却つてその驅除に苦心するほどである。

大和鵲の異名　普通尾長と呼ばれてゐる外、『大和鵲』の異名もあり、『和漢三才圖會』では、練鵲の文字を宛てゝある。曰く

練鵲　俗云尾長鳥、本綱、練鵲似鴉鵲（くろつぐみ）而小、黑褐色、其尾鵲長、白毛如練帶者是也、禽經云、冠鳥性勇、練鳥性柔、帶鳥性仁、所謂帶鳥者、此練鵲之類也、俗呼爲拖白練。

內甘溫、主治益氣治風疾。

按練鵲、大如鳩狀似山鵲而頂純黑、如黑帽、胸柿灰色、背青碧尾長、其中二尾最長一尺許、端白成團環形甚美、嘴脛灰黑色、將雨時群飛、其聲短、其飛也不遠也、關東山中多有之、畿內曾不見之、俗呼尾長鳥。

と、これは將に今日の關東尾長のことである。

◇

繪畫に現はれたもの　かうした形のよい、美しい鳥であるから、繪畫にもよく現はれて來る、併し古畫には少く、近世の畫人の作では、應擧門下の吉村孝敬が、海棠に此の鳥を配したる作など珍とすべきであらう現代の人々には珍らしくない。

南風氏の梅花遊禽　先づ、日本美術院の堅山南風氏が、第十一回の院展に、『梅花遊禽』と題して六曲一双にこれを畫いた外、二十一回展覽會の出品、『射翠帖』の中に、びなんかつらに此の鳥を配してゐるし、第十一回展覽會には、故小茂田青樹氏が『石樹尾長鳥』を出品し、小山大月氏が『春光熙々』と題して木瓜に尾長鳥を畫いてゐる。

十畝氏の艷陽紅靄　帝展の方面では、荒木十畝氏が、曾て『艷陽紅靄』と題し、桃の花咲き亂るゝ中に、此の鳥の遊ぶ處を畫いてゐるし、『玉樹芳草』の題下に、桐に此の鳥を配し、下に葵の咲いてゐる構圖の作があ

り、共に氏の畫集中に牧められてゐる、此の外、京都の金島桂華氏は、『牡丹』の題下に、その艶麗なる花の下に遊ぶ二羽の尾長を畫いたことがあり、別に春陽會の小杉放庵氏には『木蓮尾長』の變つた作がある。

◇

古畫の尾長は山鵲　以上に擧げたのは、關東尾長、一名太和鵲といふ種類であるが、古畫に尾長と稱へるものは、この鳥とは違ふ、頭が櫻鳥の如く、斑點があつて冠毛が後頭に及び、尾羽十二枚の中、中央の二枚が著しく長くなつてゐる、畫題に、『三媚』として海棠と石に配したり、『齊眉松壽』として梅に此の鳥を配したりするところのものである。古くは呂紀、牧谿にもその作があり、高橋是清氏舊藏の名畫に張秋穀の作もある、松方家には雪舟の作もあつたり、双軒庵愛玩目錄中には、元信の『松に尾長』があり、探幽にも伊川院にも・守景にも、常信にも、英一蝶にも、それがある、形が面白いので、どんな樹木に配しても大した不調和を見ない、四條派では蘆雪が紫木蓮に此の鳥を畫いた奮つた構圖のものもある、近くは第十二回の帝展に町田曲江氏が『清幽』と題して山百合咲く山の斷崖に、白羽の此の鳥を畫いた作があり、更に有名なものでは故片岡直溫氏の遺愛品に柳里恭の『枯柯壽帶鳥』がある、これは、畏くも明治天皇の天覽に供へ奉つた名畫である。

山鵲は支那の鳥　扨て此の古畫の尾長は、實は山鵲であつて叭々鳥と共に支那特有の鳥である、色も美しいし、物眞似などする處から、支那では飼ひ鳥として珍重されてゐたのが、そのまゝ日本に傳へられ、斯くは繪畫などに多數現はれるやうになつたのである、『本草綱目』を見ると『能食雛雀』とある、雀位の大さの鳥なら、わけなく食べてしまうといふ。

◇

朝霧にたちぬれながらわか葉せる櫻にゐて遊ぶ尾長鳥見る　野口青眉

一〇　叭々鳥（ばばてう）

東洋畫と叭々鳥　叭々鳥は、八哥鳥、又は哱々鳥、寒皐、鸜鵒などといろ〳〵に呼ばれてゐる、東洋畫には馴染の深い鳥で、古來、いろ〳〵の人によつて畫かれて居り、傑作と稱せらるゝ名畫も相應に遺つてゐる。

叭々鳥の原産地　さて此の鳥は、日本には棲息せず、支那の中央から、比律賓等に產し、日本へは、文人畫の隆な德川時代に、支那から輸入され、籠鳥として愛翫され、一方では文人墨客により珍重されてゐたのである。鳥學上の分類に依ると椋鳥科に屬し、色彩は總體が光澤のある黑色で、唯初列風切の基と、小翼羽の外緣、尾の先端と下尾筒の先が白色であり、嘴は鮮かな綠黃色、脚は橙色で、額に房々した髭があるのが此の鳥の特長となつて居り、その飛翔する時には、翼の白い斑點が、丁度八の字の形に見えるので『叭々鳥』と呼ばれるに至つたのである。

生態習性　古くから畫かれてゐた鳥なので、習性や生態なども比較的よく知られて居り、『本草綱目』の中にも

鸜鵒、集ニ於鵲巢樹穴及人家屋脊中一、身首俱黑、雨翼下各々有ニ白點一、其古如ニ人舌一、剪剔能作ニ人言一、五月五日去ニ其舌尖一則能語、聲尤清越也、歟則口黃也、老則口白、頭上有幘者有ニ無幘者一、好浴水、其晴翟々然、故名ニ鸜鵒一、天寒欲雪、則群飛如告、故名寒皐、皐者告也又使取火也。

とあるし、『三才圖會』には

五月鸜鵒子、毛羽新成取養レ之、以教其語俗謂ニ之花鳴一。

とある。

人語や鳥聲を眞似る　此の中に記してある通り、人語や他鳥の聲を眞似ることは、此の鳥の一つの特長で支那あたりで、此の鳥を愛翫したのは、一は斯かる習性を有するからであつたらう、なほ親しく、此の鳥を飼養してゐる勝田蕉琴氏の說に依ると、叭々鳥がよく人語や他鳥の聲を眞似るやうにするには、舌を切つてやらねばならぬ、切るといふても舌の裏にある膜を細い竹の箆のやうなもので剝いでやるので、これを行ふこと三四回に至ると、漸く物の聲を眞似るやうになる、臺灣の人々はよくこれを爲すと。

繪に畫いて面白いのは、色彩が美しいのといろ〳〵の植物に配せられて、よい調和を見ることが出來るからである、その種類として鷹司公爵の『飼ひ鳥』には、桃色八哥、樺色八哥等を擧げてゐるが、唯飼ひ鳥として珍重されてゐる丈けで、藝術には關係はない。

◇

詩文の叭々鳥　叭々鳥が、他鳥の眞似をするといふことは、餘程この鳥の愛嬌を增してゐると見え、支那の古い詩にも

窓前八哥鳥、學語大輕狂、何須似鸚鵡、自遣ニ羽毛優一。

などとあるし、又、拂レ劒尋侶戲、剪舌學ニ人言一。

といひ、韋應物は

日夕依人全羽翼、空欲銜環非報德。

といふてゐる。

叭々鳥の渡來　叭々鳥の渡來したのは、德川時代で長崎に初めて渡來したことは『大和本草』に

昔年長崎に異國より來る、鳥に似て小なり

とあるのでもわかるが、グッと古い記錄に

天平四年五月壬子、新羅使金長孫等四十人入京、鸚鵡一口、鴝鵒一句、云々

とあるから、遠く奈良朝の時代にも渡來したことがあるのかも知れない。

◇

泣菫氏の鑑識　薄田泣菫氏の『太陽は草の香がする』といふ文章の中に、

鴉によく似た羽の黑い叭哥鳥といふのがあります、東洋の畫家が昔からよく水墨畫に描きなれた鳥ですが、鴉と違つて居るのは年寄の軍人のやうに嘴の上に長い口鬚を生やしてゐることです、水浴が好きな鳥で、時候が寒くなつて雪がちら〳〵降り出すころになると、喜んでそこらを飛び廻ると聞いてゐます

といふことがあり、その雪と叭々鳥に就て

雪舟の描いた八哥鳥は、雪の降る空を見上げて不可思議な動搖を內部に感じる、眞黑な精靈そのものゝ光だと見られます

と記してゐる。

牧谿の傑作　併し、叭々鳥を畫いた名作としては、先づ誰より先に牧谿の作を擧げなければならない、これに有名なものが二つある。一つは井上侯爵家舊藏の『雨中叭々鳥』であり、一は松平伯爵家の『老松叭々鳥』である、『雨中叭々鳥』の方は、上から垂れ下つた濶葉樹の枝に、二羽の叭々鳥がとまつてゐる處で、一羽は横を向き、一羽は全く後向である、その大膽な構圖、然も鳥の姿は眞に迫つて、一點一筆の加除をさへ許さない、無落欵ではあるが、相阿彌の極めのある代表的逸品である。

松平伯爵家の『老松叭々鳥』は、斜に横はる老松の幹に、孤影悄然たる叭々鳥一羽、その嘴を翼の間にさし挿んで、首を傾けた瀟洒な姿態眞に絕妙といふべしである。此の方は松樹の下に、牧谿といふ立派な印章が見られる。蓋し代表作中でも尤なるものである。

雪舟の名作　雪舟の作には流石に叭々鳥が多い、著者の手記を披いて見ても、松浦伯爵家舊藏の横物小品これは唯一羽の叭々鳥に雜草を配し、落欵はその草の中に書いてゐる、吉田楓軒氏舊藏の『岩上叭々鳥』、これは三幅對の一で、中は布袋、右は桃鳩で、左が岩上叭々鳥、そして岩の背に芙蓉が配せられてゐる、これとやゝ構圖の似てゐるのが、淺草の靑地家舊藏で、これは枯木の上にとまつてゐる、傍に葉の廣い何かの枝が現はれてゐる、これは安信が箱を書き、伊川院の添狀がある、神戸の田村家のものに横物の『枯木叭々鳥』がある、雪舟の叭々鳥は、牧谿のものより遙かに手が込んでゐるが、此の鳥の特性を出す點に於ては閒然する處なく、全く入神の技といふてよい、松方家にも、雪中松に叭々鳥の屛風を見たが、强いて擧ぐる程のものではない。

雪村の作　雪村には說田家の舊藏に素晴しい作がある、柳に一羽の叭々鳥を配したもので、本多家の傳來であり一陽の極めがある、更に宮本二天には、水戸家の什寶が聞えて居る。變つた構圖のものとしては、石川縣樋爪家の舊藏品に、沈南蘋の作がある。これは幅三尺一寸縱二尺四寸餘の横物で、二羽の叭々鳥の飛翔してゐる處を畫いてゐる、叭々鳥は籠鳥として知られてゐるので、日本人の作には、飛翔した姿など畫いたのは少いのが當然で、流石に沈南蘋の作丈けある。

◇

狩野派の作　狩野家の人々はよく叭々鳥を畫いた、牧谿や雪舟の影響であらう、神戸の川崎家には、元信の『雪中叭々鳥』があり、帝室博物館にはその子、松榮の『梔子花叭々鳥』がある、これは對照が變つてゐる、探幽には、佐竹侯舊藏の『雪中叭々鳥』、大澤百花潭氏傳來の『叭々鳥五位鷺』、吉田楓軒翁愛藏であつた『枯木叭々鳥』など手記に殘り、常信にも『枯木寒鴉』と對幅になつてゐるのを見た。

變つたものでは、別府新七氏所藏の乾山の作もあげねばならない、圓窓の中に、水墨で一羽の叭々鳥を畫いたものであるが、いつもの乾山とは違つて、立派に北畫風に畫いてゐる點が注目される、松浦伯爵家には等禪の作がある、等禪は長門雲谷庵の僧、夙に雲谷派の畫風を慕ひ、自から稱して雪舟九世といつた、それほどに雪舟に畫風が似てゐる。

此の外、蘆雪は、百花の中に群鳥を畫いてよくこれに叭々鳥を加へ、熊斐には『柳に叭々鳥』の名作があり梅逸には老松長春に叭々鳥を配した外、蕪村には枯木叭々鳥の面白い構圖の作が傳へられ、椿山もよくこれを畫いてゐる。

現代作家の作　現代の作家の中にも、よく叭々鳥が描かれる、二三擧げて見やう。

西澤笛畝	閑庭	第八回帝展
堅山南風	射翠帖	第二十一回院展
横山大觀	叭々鳥	某宮家御所藏

小室翠雲	紫羅	第十四回帝展
荒木十畝	枯木叭々鳥	讀畫堂藏
榊原紫峰	竹林八哥鳥	畫集輯錄

などで、此の中で大觀氏の作は無花果の樹に鳥を配し、翠雲氏の作は紫薇のもとに群れ相鬪かつてゐる。叭々鳥はかうして、籠鳥である爲め、いろ〳〵の植物が配せられても、さのみ不調和を感じないのはその原生地方面に於ける習性等がよく知られてゐないからであらう。從つて何の樹にも配せられるが、矢張枯木に柳位が一番調和してゐる。竹林も面白い。

畫題の叭々鳥　畫題としては『八百遐齡』『八百餘春』がある『八百遐齡』は柏樹、靈芝にこの鳥を描く、卽ち齡長しの意、『八百餘春』はこの鳥に杏花と石とを配したものである。

彫刻では、吉田白嶺氏が、二十一回院展に出品して好評を博したが、叭々鳥の彫刻も蓋し珍しいものである。

一一　雉（きじ）

華山の傑作『溪澗野雉』　春は將に酣に、山藤は紫の房を解いて、その艶姿を誇り、躑躅は巖を彩つて、錦

繡を織る、土を披いて伸びゆく筍、流れに遊ぶ鮒の群れ、その流れには、今し訪れ來つた雄の雉が、咽喉を濕さんとし、雌は土坡の蔭にあつてあたりの樣子を見てゐる、その美しさ、その幽雅な情景、これぞ渡邊華山が花鳥畫中の傑作と稱せられる、『溪澗野雉』の構圖である、落欵には『丁酉四月製華山邊登』とある、實に天保八年、華山自双前五年、その爛熟期の作である、その雉の姿態眞に迫り、一點一筆の加除を許さず、雉の名畫中隨一に推さるべきもので、所藏者說田氏賣立の際、實に拾萬圓に上つたものである。

雪舟の筆　雉の名畫としては、大倉男爵家所藏の雪舟筆花鳥圖屏風をも擧げねばならない、この屏風はもと紀州家の傳來で、一双いづれも備陽雪舟筆の落欵あり、『等楊』の白字方印を捺してゐる、その雉の描かれてゐるのは、左の半双で、中央に流れがあり、二羽の雄雉が、一羽は土坡の上にあり一は水上を翔り、流れを挾んで相對してゐる、上の松が枝には叭々鳥翼を休め、雉の上には燕が輕く飛翔ぶりを見せてゐる、その全構圖は雄勁にして雅致深い筆に依つて統一整齊され、淡彩また煩はしからず、殊に雉の姿態は、寫實から出て躍動妙を盡してゐる。

抱一と文晁の佳作　帝室博物館所藏、抱一筆、四季花鳥繪卷の中に畫かれた雉も美しい、周圍に春の小草を配し、その中に手一杯に畫いてゐる處、よく抱一の持味を出してゐるし、文晁にも、四季花鳥四幅中、櫻花に雉を配した傑作がある、ともすれば奔放不羈、時に粗笨に流れ易い文晁も、此の作は實に周到なる用意のもとに筆を執り、然も爛漫たる櫻花に配した雉の姿もよく調和してゐる、これは大橋新太郎氏の所藏である。

る。

常信にも花鳥六曲屏風で雉と白鷺を畫いた力作がある、福井の松平家舊藏で、雉はその各半双であり、古雅な老松の蔭に飛泉迸り落ち、その前には雌雄の雉が歩を運び、流れの中の岩の上には鶺鴒遊び、松の老幹には尾長左端の蓮と芦には翡翠、空には燕が舞つてゐる、如何にもよく纒まつた構圖である。

探幽にも梅竹に雉を配した作があり、古く元信にもあれば、降つて伊川院あたりにもあり、帝室博物館には周信の松に雉がある、これは、中が壽老、左が梅に鴛鴦の三幅對である。

◇

椿山の『春坡野雉』　華山が『溪澗野雉』の傑作を遺してゐるのでその影響は相應にある、椿山の『春坡野雉』はもと高橋是清氏の所藏であつたが、構圖こそ違へ立派な出來であり、小華となると全く『溪澗野雉』そのまゝの構圖のものを畫いてゐる。

秋暉もよく雉を畫いた、或は櫻花咲きみだるゝ下に、或は藤の紫の波打つ下に、筆勢雄勁な雉を畫き、四條圓山の人々の作にも多く、說田家舊藏の景文の『梅花雉子』の如き、絢爛極まるものである。寬畝にも中々大作がある。

現代の人々の作で、著者の手記にあるものを擧げると

登一内　微　笑　　野　　火

五島耕畝	園裏の秋		十一回帝展
橋本靜水	吹雪		十七回院展
小林柯白	新篁		十八回院展
眞道黎明	讃春		十九回院展
花岡朝生	吹雪		二十回院展
山村耕花	高麗雉		昭和九年個展出品
荒木十畝	殘春		讀畫堂藏
人見少華	古柏宿雉		十三回南畫院
池上秀畝	谷間の春		一絣會出品
西澤笛畝	高麗雉		昭和十年日本畫會

の諸作がある、何れもそれ〴〵の趣向を立て、構圖を考へた作である。

微笑氏の野火　右の内、登内微笑氏の『野火』は、古諺の『燒野の雉』から着想を得たもので、野火の焔に卷かれながら、一心に雛を庇つてゐる可憐な情趣を寫したもので、當時好評嘖々たるものがあつた、五島耕畝氏の『園裏の秋』は、雉子の中でも珍らしい耳雉を繪にしたので、評判を取り、山村耕花氏の『高麗雉』は羽色が殊に美しいので繪にして見たとの事であつた。

雉に配する種物　かうして雉の作を見ると、大抵は季を春に取つてゐる、それは春、山櫻が咲き、藤の房の伸びる頃が、雉の最も美しさを發揮する時で丁あり度交尾期に入るので、雌を戀うて啼く、それが何となく詩趣を唆るのである。故に華山の『溪澗野雉』をはじめ大抵は梅や櫻、藤などに配してゐるので、『吹雪』の中に雉を畫いたものなどあまり見ないのである。

◇

雉の種類　それから、雉が日本固有の鳥であることは鳥學上特筆すべきことである、尤も、朝鮮には、高麗雉が居り、臺灣には、山雉、臺灣雉、帝雉の三種が居るが、普通種は全く内地丈けである、朝鮮の高麗雉の特長としては、頭のあたりに白羽の環のあることで、朝鮮から對馬まで分布して居り、臺灣雉は、一寸高麗雉に似てゐて專門家ならでは見分けがつかぬ位である、山雉といふのは、錦雞や白鷴に近い形で、臺灣特有の鳥である、眼の周圍の裸出部は赤く頭に白毛があり、尾羽の尖も白く背は雪白、翼の一部の紅色の處があつて甚だ美しい、帝雉も臺灣特有の鳥で、全身紫黑色、小雨覆と、尾羽に白い斑點があり、眼の周圍の裸出部丈けが唯紅い、非常に美しい鳥であるが、これが發見されたのは、生蕃人がその羽毛を取つて頸の飾りにしてゐたのを折柄同地に標本を集める爲め出張してゐた動物學者の眼にとまつたのが始めであるといふ。今では禁鳥になつてゐる。

◇

その異名別名　雉は、かく日本獨特の鳥であるが、支那では華蟲、夏翟、疏趾、野雉、原禽、文禽、介鳥、翟雞、鴾雞などと樣々の異名がある、併し　支那に居るのは、尾長雉といふ一種だけであるから、餘り持てはやされず、それ故、繪畫などにも餘り見えない、雉の畫かれさうな處には、大抵錦雞や白鷴が畫かれてゐる、同じ東洋畫でありながら、面白い點である。

雉の文學史實　文學の方では、雉のことも多少は見え、顏潛庵の詩中には

啄レ食山林常自得、引雛麥隴不二相離一。

といひ、王建の詩中にも

麥隴淺々難蔽身、遠去戀雛低怕レ人。

などとある、雉の中に白雉があり、これは羽毛の色素が缺乏して起る、病的現象に外ならぬが、日本でも之が發見されると非常な吉兆とし、孝德天皇の大化六年には、穴戸國から白雉を獻上するものがあつたので、帝これを瑞祥として喜ばせ給ひ、年號を白雉と改めたことなど、史上有名の話だが、支那でも李嶠の詩中に

白雉振二朝聲一、飛來表二太平一

などといふ文字が見える。

日本の文學では、古く『萬葉集』に大伴家持の作

春の野に求食(あさ)る雉の妻戀に己があたりを人に知れつゝ

椙(すぎ)の野にさ躍(わ)る雉いちじろく啼にしも哭かむ隱妻(こもりつま)かも

あしびきの八峰の雉なき響(とよ)む朝けの霞見ればかなしも

があるが、この外、雉子の歌は枚擧に遑もない位澤山ある。柿本人麿の

雉子なく高まど野べにさくら花ちりながらふるみん人もかも

も美しい繪の境地である。

その妻を戀ふといふ可憐な心を、鎌倉右大臣は、

高まどのをのへの雉子あさな〳〵つまにこひつゝ鳴ねかなしも

と詠じてゐる。この外

なきて立つ雉子(きぎす)のやとをたつぬれはすそのゝ原のしはのした草　慈鎭和尙

ほの〳〵とかすめる山の峰つゝきおなじ雉子の聲うらむなり　中納言定家

かりの世と思ふなるべし春の野のあさたつ雉子ほろゝとそなく　和泉式部

つたへ聞く今しもそてのぬるゝ哉野火けつ雉のはねのしづくに　光俊朝臣

など雉の歌として知られてゐる。

俳句では、芭蕉翁の

一　蛻石に啼きかはしたる雉子哉

をはじめとして

蛇くふと聞けば恐ろし雉の聲　言水
はあまりにも有名である。この外
尾をひけば草にとらるゝ雉子哉　其角
なれも其子を尋ぬるか雉の聲　燕村
きじ、啼くや草に武藏の八平氏　也有
榮の花のあけぼの寒し雉の聲　几董
虹の根に雉啼く雨の晴間かな
など面白い。

◇

雉と傳說　雉にはいろ〳〵の傳說がある、その一つが禁野の傳說で『齊諧俗談』に
河内の國交野郡に禁野といふ所あり、天子の御遊獵の地にして、尋常の殺生を停む、かるが故に禁野と
名付く、往古惟高の皇子、この所に狩をしたまひて、金色三足の雉子を得たまふ、それより此の方禁野
となる、今は星の名となる。
とあり、それから有名な雉塚の傳說である、これが矢張禁野に關係がある、內容は拙著『鳥』の中にも記した
が、その梗概を記すと、

嵯峨天皇の弘仁三年、攝津國川邊郡長柄の里に橋を架ける工事が始まつた、幾度架けても落ちてしまふ
ので、誰いふとなくそれには人柱を立てればよいとの說が立つた、扨て如何なる人を立てたらよいかと
里人も思ひ惑つた、こゝに垂水の里に岩氏といふものがあつた、ある日戲れに、『人柱には袴の綴縫の
あるものがよい』といふた、處がその袴に綴縫のあるのは岩氏自身であつた、里人は有無をいはせず捕
へて人柱としてしまつた、橋は架つた、そして里人は岩氏の冥福を弔ふべく大願寺といふ寺を建立した
この岩氏に美しい娘があつて、河内國禁野に嫁いだ、處が一向に物を言はない、その夫これを怪しみ啞
ならば生家に還さうと連立つて家を出た、二人が交野を過ぎた頃何處からか雉が啼いた、夫がこれを射
やうとすると、女は慌しくこれを止めた、夫がそのわけを聞くと女ははじめて口を開き
ものいはじ父は長柄の人柱鳴かずば雉も射られざらまし
と一首の歌を詠んだ、夫は始めて女の啞でなかつたことを知り喜んで共に家に歸り、その雉の啼いた三
本杉といふ處に塚を立てた、これが三本杉の雉塚である。
賈氏射雉　これに似た話が支那にもある、賈氏は周の人、賈太夫とも呼んだ、妻が甚だ醜い、ある時妻を
娶つた、其妻三年物いはず、ある日夫婦相携へて澤に行く、賈氏雉を射た、すると初めて妻が口を利いた。
これは左傳の中にある、前の傳說の出處はこれであらう。

三　山鳥（やまどり）

雉の姉妹鳥　山鳥は雉の姉妹鳥とも見るべき、馴染の深い鳥で、同じ雉科に屬し、鷓雞、山雞、山雉などと呼ぶ、その雉と違ふ處は全く色彩にある、雉の雄は中々複雜な色彩を有してゐるが、山鳥はそれに比較すればやゝ單調であり、雉のやうに眼の周圍の裸出部は赤色であるが、その他は概ね赤褐色系統で、これに細かい斑があり、雉のやうに俗にいふ耳羽はないが、尾羽は雉より長い。雌もやゝ同色で尾は短かい。

日本獨特の山鳥　日本獨特の鳥で、本州から九州あたりまで到る處の山地に棲息し、獵鳥としてよく知られ、その種類には、四國邊に棲息してやゝ色の濃い四國山鳥、九州に見る赤山鳥、東海方面から中國にかけて棲息する薄赤山鳥などがあり、九州には更に、腰の邊に白い部分のある。腰白山鳥が居る。

雉が原野に多いのに對して、山鳥はその名の示す通り、山地に棲息するので、『本草綱目』にも次のやうに記してある。

雉居二原野一、鷓居山林、故得二山名一、形似レ雉而小、尾長三四尺、人多畜二之藝中一。

山鳥の尾　この鳥の特長は、俗に『山鳥の尾』といふ位に有名であり、また鳥自身も非常に尾を大切にする處から、昔から山鳥は叢林に入らず、雨雪降れば則ち岩に伏し、木に栖めば敢へて下り食を求めず、往々にして餓死するとさへ傳へられてゐる。

おろのはつ尾　その尾を愛することの深いといふ點から、山鳥の『おろのはつ尾』といふことが傳へられ、『はつ尾の鏡』といふことも稱へられてゐる、傳說に從へば、山鳥は雌雄谷を隔てゝ眠るが雄は雌を慕ひ、その尾を鏡とし、これに雌の姿を映して啼くといふ、これが『萬葉集』十四卷に收められてゐる。

山鳥の尾ろの秀つ尾に鏡懸け唱ふべみこそ汝によそりけめ

となり、また十一卷の

あしびきの山鳥の尾の一峰こえ一目見し兒に戀ふべきものか

となつてゐる、『長い尾』といふことが形容詞になつてゐるのは有名な

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長き永夜を一人かも宿む

おもへどもおもひもかねつあしびきの山鳥の尾の永きこの夜を

の名歌となつてゐる。この『尾ろの秀つ尾』等に就いては、著者の前著『鳥』に詳記して置いたからこゝには、以上にとゞめる。

山鳥の供御　行事としては、山鳥の供御といふことがある、毎年、國司から山鳥を宮中の供御に上るのが初春の佳例になつてゐた、これを畫いたものに抱一の作がある。

繪畫に現はれた山鳥　扨て繪畫に現はれた山鳥を見ると、思ひの外に貧弱である、それは同じ形でも、雉

の方が色彩の變化に富み、且つは添景にも自由な點があるからであらう。古人の作等には、あまり傑作といふものが傳へられてゐない。

帝展の作品で拾つて見ると、第八回に北上聖牛氏の『惜春』がある、散りかゝる山櫻、青蕨をのぞく山椿、これをやゝ斜に區切る赤松の幹、その山櫻の枝には一羽の山鳥が翼を休めてゐる、唯何となしに美しい作である。

光瑤氏の『春律』　九回には石崎光瑤氏の『春律』がある、これは全然裝飾的效果を狙つた作で、二曲半双に雌雄の山鳥丈けを畫いたのであるが、雄は舞ひ雌は之を仰ぐ、金地をうまく利用して下の土坡には春蘭を二三株配してゐる、一寸面白い、十回には阿部春峰氏の『深雪』がある、雪降りつもる檜の林の中に、山鳥が身をかゞめて潜んでゐる態を畫いた、狙ひ處は面白いが、さのみ畫面の效果は擧つてゐない。

第十四回に石川英鳳氏の『たにまの春』がある、これは構圖も變つて居り、谷間の虎杖（いたどり）の芽の伸びる處、山鳥は巣ごもりして愛らしい雛を抱き、彼方流れに臨む岩の上には、小瑠璃が囀つてゐる、如何にも長閑な溪間の春である。

第十五回には、山鳥を畫いた作が三點もあつた、先づ今中素友氏の『峽谷幽禽』で、これは、一方に斷崖を見せ、山鳥が谷間遙かに飛んでゐる、一つは田中蘭谷氏の『春雪』で、南畫の花鳥である、雪の降りつむ杉林の中に、山鳥が一羽歩んでゐる簡單な構圖、だが山の幽寂さは出てゐた、最後の一點は栗山北洋氏の『淺春』で、まだ芽先前の雜木の枝に、山鳥が一羽居る丈けである、これも構圖は到つて簡單だが、樹木は相應に畫けてゐた。

帝展の外では、昭和十年の春、小室翠雲氏が三越に於ける個展に、『乾坤文章』と題して藤花に山鳥を配した作を見せた、藤の紫に褐色の山鳥と、色の配合が先づ面白い、筆は例に依づて洗練し切つたものであつた

川端龍子氏には山楓四季の中『繡錦』と題し紅葉に之を配した美しい作がある、昭和八年の個展に發表したもの小杉放庵氏も昭和十一年春の個展に『山中秋意』と題してこれを畫いた。

一三　杜鵑（ほとゝぎす）

ほとゝぎすなく聲きくや卯の花の咲きつる岡にたくさひくいも　柿本人麿

杜鵑叫月圖　夏立新鵑叫過時、居人喜聽旅人悲、夜來齊破閑家夢、月照水精花一饑。　岡本花亭

杜鵑と藝術　杜鵑は夏の鳥として、古來我が國では、藝術に非常な深い交渉をもつてゐる、その血に啼くといふ啼き聲は、よろづ感傷的な詩人や歌人に深い印象を與へ、その爲め杜鵑の詩題に上つてゐるものなどは、枚擧に遑もない、それにも拘らず、繪畫の方面では、月に杜鵑とか、卯の花に杜鵑とか、その畫題や構

圖も限られてゐて變化に乏しい。

夥しい異名別名　それからいま一つ不思議に感ぜられることは、杜鵑には、種々な傳說や口碑があり、支那では、それに因む異名や雅名が非常に多く、

杜宇、子雋、陽雀、蜀魂、不如歸、催歸、聖帝、謝豹、峽禽、思歸鳥、勸農鳥、俱伎羅、橘鳥、子規、思歸鳥

などと呼んでゐるが、繪にはあまり畫かれてゐない、否寧ろ、杜鵑を畫いた支那の繪などは、殆んど見當らぬといふてよい、こゝに日本と支那との國民性が違ひ、その藝術觀に於ても相隔つてゐる點のあるのがわかる。

繪畫と杜鵑　然らば、日本の藝術、特に繪畫では、どんな風に畫かれてゐるか、如何なる人々が好んでこれを畫いてゐるかといふと、これも此の鳥の非常によく知られてゐるのに比すると、極く一部に局限されてゐるやうな傾向がある、即ち、四條圓山の系統に屬する人々はよくこれを畫いてゐるが、他の流派ではあまり畫いてゐない、これも著しい現象である。

◇

蘆雪の作　著者がこれまでに見た杜鵑の繪で、一番多いのは蘆雪の作である、あの奔放な性格をもつた蘆雪も、一面には非常に感傷的なところがあつたと見えて、よく杜鵑を畫いてゐる、近江の淺見家舊藏の『月杜鵑』は中々の大作で、雲に技巧が潛めてある、川崎男爵家舊藏の『月下杜鵑』は、殆んど同じやうな構圖ではあるが、月がはつきり畫いてある、松澤家の蘆雪の『月下杜鵑』も同じやうな構圖であるが、これは横物であつた、まだ此の外にもあるが、以上の三作を比較しても、大體の構圖は同じで、唯、杜鵑の全身を畫かず、頭と翼の雨覆をはつきり畫いてあとはぼかしてゐる、これは蘆雪の特長といふてよい。

應擧の作　應擧もよくこれを畫いた、源三位頼政と、月に杜鵑と双幅にした作など、彼の得意のものであるが、この方は杜鵑をはつきり描き、月を片割れ月にしてゐる。

月に配す　月に杜鵑といふものは、調和もよいので、多くの人が書いてゐる、松本双軒庵舊藏品に芳園の作があつた、之れは月と杜鵑とを別に畫いて双幅にした、達者なものであるし、杜鵑など中々よく描かれてゐるが、大した深味のある作ではない、月に杜鵑を畫いたものはまだ抱一にもあり、秋暉にもある、秋暉の作は、杜鵑の眼光が非常に鋭く畫けてゐる。

◇

卯の花と杜鵑　杜鵑の啼く頃は、卯の花が盛りである、それで、卯の花に杜鵑の啼き過ぎる處を畫いた作も隨分多い、有名なものでは、大橋新太郎氏所藏、文晁四季花鳥中の夏がある、これは文晁の爛熟時代の作品とて、技巧も手に入つてゐる、楳嶺にも卯の花杜鵑の名作がある、此の作は鳥の姿態が殊によく畫けてゐた。昔年にもこれを見たことがある。

變つた配合としては一鳳が青麥の上に杜鵑を畫いたのがあつた、來章の『杜梢郭公』は、九州森家の舊藏で
これは山水にして畫いてしまつた、森の上に杜鵑が啼き過ぐる情景を此の作のやうに山水にして畫いたもの
には、春草にもよい作があり、横山大觀氏にも例の得意な水墨で森を見せ、上に一羽の杜鵑を飛ばせた作が
ある。

北齋の奇想　北齋には、新樹の上に杜鵑を畫いた名作がある、新樹は彼一流の點苔を重ねた行き方であり
其一には『雨中杜鵑』の作がある。省亭にも、雨中杜鵑や月下杜鵑の作珍らしくない。
現代の人では、池上秀畝、木村武山氏等よくこれを畫き、京都では廣田百豐氏の作がある、最近では望月
春江氏の『香山盛夏』など杜鵑を配した作としては珍らしい構圖である。

◇

提壺の美酒をかひ、布穀の袴をぬけよといふは、皆おのれがゆゑならねど、世の人のしからしむるもの
なるか、蜀魄の不如歸と啼くは、きはめて拖物の聲ならくのみ　―支考―百鳥譜

悲劇の鳥　蜀魂といひ、蜀魄といひ、不如歸といひ思歸鳥といふ、それは、古くからの傳説に依るので、
杜鵑は初夏から月夜に啼きはじめ、秋まで八千八聲き啼續け、果ては血を吐いて死すといふ、何處までも悲
劇的に出來てゐる鳥である、『蜀魂』といひ、『不如歸』と呼ぶは、『蜀王本紀』に出てゐる、即ち蜀の望帝、そ
の臣鱉靈の妻に通じたが、自からこれを耻ぢ、位を禪つて去らうとした、その時杜鵑が悲しさうに啼いた、

蜀の人々は帝の去るのを悲しみ折柄啼き過ぐる杜鵑の聲を聞いても、それが『不如歸』といふやうに聞えた、
さては此の鳥は望帝の魂が化して居るのであらうと、そこで『蜀魂』といふたり、『蜀魄』と呼ぶやうになつた
日本では『四手田長』だの、『沓手鳥』だの、『うるみ鳥』『戀し鳥』『三月追鳥』などいろ〳〵に呼んでゐるが、
それは矢張り、それ〴〵に傳説をもつてゐるのである。

卵を他鳥の巣へ　杜鵑に就いて有名なことは、自から卵を孵すことをせず、鶯の卵の中に生んで、孵させ
るといふことである、その爲め卵の色は葡萄色でよく鶯に似てゐるが、鶯よりは幾分大きい、何にも知らぬ
鶯は、その卵を自分の生んだものと思つてこれを暖めて孵す、すると杜鵑の雛は、宿の主なる鶯の雛を虐待
しあらゆる暴君振りを發揮して、しまひには鶯の巣を占領してしまふ、こんな暴君であるが、人の爲めには
多くの害蟲を驅除してくれる益鳥である。かうした習性も古くから知られてゐたと見え、和歌にもそれが現
はれてゐる。

うくひすのねぐらのたけをしめおきておやのあとふむほとゝぎすかな　大納言經信

ほとゝぎす山のいつくにうちはふき鶯かへるほとを待つらむ　醍醐入道前太政大臣

などもそれであるが、『萬葉集』には、有名な高橋蟲麿の長歌がある。

鶯の、生卵の中に、ほとゝぎす、ひとり生れて、己が父に、似ては鳴かず、己が母に、似ては鳴かず、
卯の花の、咲きたる野邊ゆ、飛びかけり、來鳴き響もし、橘の、花を居散らし、終日に鳴けど聞きよし

鵑はせむ、遠くなゆきそ、吾が屋戸の、花橘に、住みわたれ鳥。

こんな幼時の殘虐性も、大して咎められることなく杜鵑は『啼けど聞きよし』と讃へられてゐるのである。

俳句の杜鵑　俳句では夏の季題中、特に重要な位置を占め、古來、これを吟じた句など全く枚擧に遑もない位である、有名なもの數句揭げて置く。

京に居て京なつかしや時鳥　芭蕉
時鳥あかつき傘を買せけり　其角
鯉はねて水靜かなり時鳥　言水
うぐひすもやゝ受太刀や時鳥　去來
時鳥啼くや湖水のさゝ濁り　丈草
ほとゝぎす啼て入りけり南禪寺　北枝
ほとゝぎす平安城を筋違に　蕪村
時鳥啼くかと待てば蜘の糸　几董

◇

杜鵑の形態と渡り　杜鵑は既に繪などでその形や色彩もよく知られてゐるが、羽色は背が灰がかつた青色、翼の風切羽は薄褐色、內に白色の横斑があり尾は黑く、これに數條の白い横斑があり、これが特長の一つ、

喉と胸が灰青色、腹には黑い横斑がある、此の鳥はシベリヤの東部からヒマラヤ地方、支那及び日本の北海道等で繁殖し、夏になると本州から、四國九州邊に渡つて來る、丁度五月上旬の新綠の頃に渡つて來るので例の、目に『青葉山ほとゝぎす初鰹』の句などになつて來る。動物學上では杜鵑科といふ科の中に、郭公や、じういち、つゝどりなどと共に包含されてゐる。

『ほとゝぎす』といふ語源に就いては、その鳴く音から來てゐるのであらう、普通『テッペンカケタカ』と聞えるといふのであるが、これは聞く人に依りいろ〳〵に聞きなされやう。『ホンゾンカケタカ』といふのもその一例である。

◇

郭公とじういち　杜鵑と混同されて、同一のやうに思はれてゐるのは郭公で、これはクワッコーと啼くので、種類の違ふことも明かにわかるのであるが、その色彩や形狀が似てゐるので、殆んど見分けのつかぬやうになつてしまつてゐる、和歌でも、俳句でも全く混同し、郭公と書いてホトトギスと讀ませてゐるのであるが、郭公は、啼く音が違ふばかりでなく、大さも杜鵑よりは幾分大きい、古く閑古鳥、喚子鳥と呼ばれてゐるのは、郭公のことゝせられ、日光邊に多く棲息してゐる、『慈悲心鳥』は、同じ此の科の『じういち』である、併しこの鳥は、幼鳥時代はやゝ杜鵑に似てゐるが、成鳥は、此の科の鳥の特色となつてゐる、尾の白斑や、腹の黑斑がなくなつてしまふ、そして小形の鷹のやうな形となる、自から巢を作らぬこと杜鵑の如く

多く小瑠璃や瑠璃びたきの巣の中に卵を生む。

筒鳥　此の科で、同じやうな種類に筒鳥がある、俗にぽんぽんどりと呼ぶ、大體の形は郭公に似てゐるのであるが、腹の横斑が長く、且つ濃く顯著である。幼鳥時代は黑味を帶びた茶褐色であるが、秋の換羽期になると、その羽色が親鳥のやうになる。

筒鳥や晝ひそやけき女人堂　文方

都々鳥や木曾のうら山岨に似て　白雄

一四　翡翠（かはせみ）

美しい色彩の鳥　翡翠は形こそ小さいが、美しい色彩をもつた鳥である、それ故、藝術に現はれて來る機會も多く、殊に東洋畫にあつては、逸することの出來ぬ好畫題となつてゐる、此の翡翠は翡翠科に屬する鳥の一種で、この科に屬する鳥としては、此の外に

山せみ、青せうびん、赤腹せうびん、赤せうびん、山せうびん、琉球赤せうびん

などを數へ、なほ我が委任統治下にある南洋諸島にも、數種類を見ることが出來る。

翡翠の名　支那の名玉の名をそのまゝに呼ばれる翡翠は、人も知る通り『かはせみ』又は、『かはせび』と呼ばれてゐる、古くは、『そび』といひ、鵜の文字を書いてゐる、此の『そび』といふのは『せび』の轉訛で、『せうびん』の名も、これに外ならない、そこで、水邊に棲息する方が、『川せび』又は『川せみ』と呼ばれ、深山幽谷に見る方が『山せみ』と呼ばれてゐるのである。

ソビの語源　此の語源に就いては、新井白石の『東雅』に

鵜ソビ、舊事古事記等に、翠鳥讀でソビといひしを、日本紀には鵜の字を用ひて讀むことは同じ、倭名抄に爾雅集註を引て、鵜一名水狗、青翠而食魚小鳥也、文德實錄には魚虎鳥の字を用ゆ、今按魚虎見兼名苑等と註せり、ソビの義不詳、今俗にショウビといふのは、ソビの語の轉ぜし也、又カハセミといふは、ミヤマソビといふものあるに對しいふ也、カハとは川也、ミヤマとは深山也、セミとはソビの轉ぜし也。

ソといひ、スといふは轉語也、ソビとは其の小しきなるをいふに似たり、古語に鳥を呼びてヒといひし事は下に見えたり、ミヤマソビといふものは、其形ソビに似て大きに、毛冠も大きくして、毛羽に白黑斑紋ある也、東國之俗に呼びてキヨモリなどいふ也、其故を問ふに、此鳥能渴して水を好むによりて清盛といふ也といふ、さらは古歌に奥山に水乞ふなど讃し水乞鳥といふものの類にや、詳なる事をば知らず。

と記してゐる。

◇

水乞鳥　序でであるから、此の水乞鳥といふものを調べて見やう、水乞鳥は、日本の文學には相當に古くから知られてゐた鳥で、『伊勢集』に『夏のいとあつき日ざかりに同じく』と題して

夏の日のもゆるおもひのわびしきに水こひ鳥のねをのみぞ鳴く

とあるし、『狭衣物語』には

あつさのわりなきほどに水こひ鳥にも劣らず心ひとつにこがれたまふもしる人もなし

とあり、又、『夫木和歌鈔』には、前の伊勢の歌の外に

君をおきてことこひするはおく山に水こひ鳥の水こふること　俊頼朝臣
やま里はたにのかけひのそえ〳〵にみつこひとりの聲きこゆなり　西行上人
山の井の結ぶしづくや濁るらんみつこひとりのあかぬけしきは　寂蓮法師

の三首を載せてゐる。

『櫟園隨筆』の說　此の水乞鳥とは何をさしていふか、中島廣足の『櫟園隨筆』には、先づ自作の

人しれずこがるゝおもひ夏日のみつこひ鳥におとらましやは

の一首を載せて、前に擧げた『夫木抄』や『狭衣物語』の一節を引き、更に

ある時京なる伴信友翁かり文通はす序に此歌ともを記して問たる事ありしに、かなたより書つけおこせられたるは、色葉字類抄、鷓鴣（みつこひとり）續字彙補、鷓與鴣同云々、鷓雀大而色青云々、布還切、大鳩、方言斑鳩作鳲鳩、和名抄、斑鳩、伊加流加貌似鴿白啄也云々、背大尾短者也、斑鳩は俗に豆まはし、豆たたき、などいふ鳥なり、此鳥ことに水を好み飲むもの也、日本紀略、永祚二年二月二日怪鳥入宮不知其名云々體如水乞鳥云々とありし也、なほ此鳥の考のくわしきものは別にあるよしなれどおのれいまだ之見ず、

というてゐる、伴信友ほどの人も、水乞鳥に就いては斑鳩にしてしまつてゐるのは笑止であり、廣足が鳥も知らぬのに歌を詠じてゐるのも呑氣である。

狭衣物語の水乞鳥　著者は十年ほど前、奥多摩の御嶽に登り、比の鳥の啼くのを聞いたので、山の人にその名を聞いた處、初めて水乞鳥というと答へを得た、それから、此の鳥の姿を見るべく、暫く山中にあつてその啼く方向に注意してゐた、すると、思ひもかけぬ方に、現はれた淡紅の鳥を、『あれが水乞鳥で』と教へてくれた、それは、『あかせうびん』であつた、絶えず咽喉が乾くので、水乞ひ鳥といふと傳へ、更に熱を病んだ清盛に譬へてゐるのも面白い、さて此の鳥、『狭衣物語』の文意に取つて繪にしたものに、荻生天泉氏の『水乞鳥』があり、『あかせうびん』を飛泉に配して描いた作に、田口蕉葵氏の『こだま』（第十五回帝展出品）がある。

◇

翡翠の生態　翡翠は、『あかせうびん』など、違つて多く水邊に棲む、その背の空色の美しさ、肩羽から、

雨覆ひにかけての鮮かな綠色、脚の珊瑚色、頭の綠の短かい縞模樣、栗赤色の胸、兎も角も美しい色彩を集めてゐるのが、支那の名玉になる翡翠の名を取つてゐるので、嘴が極めて長く逞しく、尾の短かいのが特長となつてゐる、その嘴の異樣に發達してゐるのは、これを以て、巧みに水中の魚中を啄むからでその動作の機敏なる、誠に電光石火の早業である、その異名に魚狗、天狗、水狗、魚虎などゝ呼ぶ〻、皆魚を狙ふことから來てゐる、翠鳥、翠雀といふのは、翡翠と共に色彩からの名であり、和名の『そび』は『せうびん』の轉訛であること勿論であり、天狗といふのは嘴の大きいのを鼻の高い天狗になぞらへたのであらう。

寺島良安の『和漢三才圖會』には、單に『せび』と呼んで、鵠の字をあてゝ居り、左の如く記してゐる。

本綱、鵠處々水涯有レ之、大如レ燕喙尖而長足紅、短背毛翠色帶二碧翅一、毛黑色揚青可レ飾二女人首物一性能水上取レ魚、蒸狗虎皆獸之睡物者、此鳥害魚故得二其名一、穴居爲巢、亦巢于木、其肉鹹去レ腸、煆飲服之主治二魚骨哽一

更に曰く

翡翠（かはせみ）、鵠之大者、爾雅謂二之鶺一、或云雄爲翡、其色多赤、雌爲翠其色青也

と、これは良安の誤りで、翡翠は色彩から見ても、山ぜみに充てるのは誤りであり、山ぜみは全然色彩が違つてゐるし、翡翠の二字を分けて雌雄とすることも肯かれない。山ぜみに就いては後に記す。

翡翠の畫題　扨て翡翠は、前に記したやうな美しい色彩の鳥なので、盛に藝術に現はれ來る、その畫題として、此の鳥の現はれてゐるものを見ても

蓮華小禽　蓮華には多く翡翠を配す

一路榮華　楊柳に翡翠を配す

一點翠光　下に水の光、上に飛ぶ翡翠

芙蓉翠鳥　芙蓉に翡翠を添ふ

此の芙蓉翠鳥は、『十竹齋畫譜翎毛譜』中に記すところのもので、劉廷琮の詩

幽渚生紅蓼、柔條集翠禽、臨流不飛去、應有羨魚心。

などから來てゐるのである。

漢詩といへば、此の鳥、支那で翡翠と呼ばれるほどあつて、彼地では詩人の吟詠に上ることも多い。

天長水遠網羅稀、保得重重翠碧衣、挾彈小兒多害レ物、勸レ君莫二近五陵飛一。韓　偓

それから、その動作を

久停二玉沼一翻然下、纔得二金鱗一瞥爾飛

と賦してゐる人もある、

水邊飛去青難辨、竹裏歸來色一般。

も、その翠色を讃していうた處である。

◇

雪舟翡翠の圖　繪畫に現はれたものゝ中で、有名なものは紀州家舊藏の雪舟筆『翡翠圖』である、雪舟八十一歳の筆で、斜に伸びた枝の上に、正面に翡翠がとまつてゐる、あの大きな嘴の如きは、僅かに上墨の一線を以て現はしてゐる丈けであるが、敏速なる此の鳥の習性を描き出して寸分の隙がない、素朴の極があり、常信と了々齋が箱を書いてゐる逸品である。

華山にも『敗荷翡翠』の傑作がある、もと波多野古溪氏が祕藏してゐたもので、天保元年の作、豪放活達の筆、翡翠の姿は飄逸の中に生氣漲る、華山贊して曰く

一曲寒塘漾夕暉、珍禽照影惜毛衣、非魚所自知魚樂、不肯花荷掠水飛。

と、その嘴を逃れた魚は、將に水中に沈まんとしてゐる。

岸駒の名作　翡翠の名作としては、双軒庵舊藏の岸駒の『柳翡翠圖』も逸することは出來ない、圖は水邊の柳條に、今し一羽の翡翠が、小魚を捕へて嚥下する處、その柳や水には、沈南蘋風の處があり極めて眞摯な作で、岸駒晩年の作に見るやうな粗笨な點がない、翡翠の色もよく出てゐる、この作は天明元年、岸駒廿六歳の時の筆で、落欵には『蘭齋岸矩寫』と記してある、大阪の唐長傳來の名品である。

双軒庵には、なほ此の外に、文晁の淡彩、『柳翡翠圖』と、岡島清曠の同じ圖の横物があつた、文晁の作は流石に筆致洗練、翡翠の容姿も活けるが如く、堂々大家の風あり、清曠の作は、四條派の筆致を最もよく發

揮した穩健の作、流れに若鮎を泳がせたりしてゐる、清曠は金澤の産、景文の孫弟子に當る人で、金澤地方では名を賣つた人、明治十年、五十歳で歿した。

竹田の作　竹田にも、『翡翠海魚』がある、蕪村風の柳樹に翡翠一羽を配し、下の流に魚が泳いでゐる、此の翡翠の姿は如何にも飄逸であるが、然も、流れの小魚を狙ふ意氣紙背に徹してゐる、面白い作である。

土佐派には餘り見ないが、光元の作といふのが高橋是清氏舊藏の中にある、洲濱形に畫いた裝飾風なもので、柳下に二羽の翡翠を配したが、二羽を一幅の中に畫いたのも珍らしい、これは、椿に雉子と双幅になつてゐる。

以上に擧げたのは、主として柳に翡翠を畫いたものであるが、他の植物に配したものでは、雪村には澤瀉に此の鳥を畫いたのがあり、蓮花に配したのは、柳に次いで多く、守景、春栞、其一にあり、薔薇に配したものは一鳳に見え、更に變つたものでは、白河樂翁公が、梅花に翡翠を點出したのが內藤子爵家にあつた。

◇

現代畫壇の人々の作　現代の人々の間にも翡翠はよく畫かれる、横山大觀氏の作には、横物に之を畫いたのがある、流れに臨んで一羽の翡翠を點出し、右端に躑躅を畫き、散松葉がこぼれてゐる、氏獨特の構圖で、流れには氏の研究がよく現はれてゐた。川合玉堂氏が第十三回の帝展に出品した『土橋』も面白い作であつた、金屏二曲半双に土橋を一杯に畫いたのが中々變つてゐたが、その橋杭の處に、一羽の翡翠がとまつて

ゐる、所謂畫龍點睛で、此の翡翠に全體の中心を集めてゐる。小室翠雲氏も好んで『翡翠』を畫く、氏の作は柳に配したものが多い。

中村岳陵氏には、葦の末に翡翠一羽を配した作があり、結城素明氏にも氣が利いた小品がある、帝展に現はれたものでは、十回の小川翠村氏の『殘る秋』、第十一回の川船水掉氏の『清蔭』、佐野五風氏の『敗荷』の中に現はれたものなど擧ぐべきであらう。

川せみに對し、山せみがある、然し、これは全く色彩を異にした鳥で、翡翠よりは形やや大きく全身灰色で小さい黑い斑紋がある、その名の通り深山などに棲んでゐる、繪にしては、あまり面白いものと思へぬが結城素明氏には、これを描いた作がある。

一五　鵲（かささぎ）

鵲と畫題　鵲は日本では九州福岡縣と佐賀縣の一部に棲息地があるばかりで、本州では野生のものは全然見られない、併し繪には昔からよく畫かれて、その畫題として傳へられてゐるものを擧げても相當にある。即ち

喜報早春　白梅、茶梅、竹、靈芝これに鵲を配す。

喜報三元　香園に喜鵲を畫く。

喜占春魁　梅花に喜鵲を畫く。

喜沐恩波　喜鵲の水に浴する圖に題す。

桃花四喜　桃花に四羽の喜鵲を配す。

萬年報喜　萬年は長壽の意で松、これに鵲。

等で、此の中でも『喜報早春』や、『萬年報喜』は、目出度い畫題なので、昔からその作も少くない。

七夕と鵲　それから、いま一つは、此の鳥が傳說の鳥として、古來いろ〳〵の方面に現はれて來る處からたとへ本州地方に見られなくとも、比較的よく知られてゐるのである、即ち一は七夕と鵲の關係である、有名な

七夕のたえぬちぎりをそへんとや羽をならふる鵲の橋　皇太后宮太夫俊成

などその一例で、その出所は『淮南子』の

烏鵲塡ゝ河而渡ゝ織女ゝ

から來てゐる、即ち七夕に牽牛と織女と天の河に相逢ふの時、鵲がその翼を以て織女を渡すといふのであるこんなことから鵲の橋といふ名は、禁中の御階の異名ともなつた、禁中は天にたとへたので、

鵲の渡せる橋に置く霜のしろきを見れば夜ぞ更けにける　家持

は此の方である。

鵲の鏡の傳說　鵲の鏡も、有名な傳說である、鏡が化して鵲となり、思ふ人の處へ飛んでゆくといふ、それから、思ふ人の姿を見やうとする時は、鏡の裏に鵲の姿を鑄込むのであると、これにはいろ〳〵と傳說も分れてゐるが、話の筋は大體似てゐる、これを文にしたものに、幸田露伴博士の『金鵲鏡』があり、繪にしたものでは、山川秀峰氏の『鵲の鏡』があつて、これを日本化して畫いてゐる。

鵲和尙　道釋人物の中に、鵲に關係の深いのは、抗州の『鵲和尙』である、その出處は『傳燈錄』である、曰く

抗州鳥窠道林禪師本郡富陽人也、姓潘氏云々、後見秦望山有長松、枝葉繁茂盤屈如蓋、遊棲止其上、故時人謂鳥窠禪師、復有鵲巢于其側、自然馴狎人、亦自爲鵲和尙、元和中、白居易出守茲郡、因入山禮謁乃問師曰、禪師住處甚危險、師曰大守危險尤甚、曰弟子從鎭江山何險之有、師曰、薪火相交識浪不停、得非險乎、又問、如何是佛法大意、師曰諸惡莫作、衆善奉行、自曰三歲孩兒也、解恁麼道、師曰三歲孩兒雖道得八十老人行不得、自禮遂作禮。

と、鳥窠禪師卽鵲和尙が、樹上に扶座してゐる處は好個の畫題で、古來いろ〳〵の人に依つて畫かれ、俵屋宗達の作など有名だが、近く吉川靈華氏や、宴田穀彥氏にもこれを見たやうである。

詩經の鵲　詩經には、召南に有名な『鵲巢夫人之德也』の句があり、鵲巢の詩がある

維鵲有巢、維鳩居之、之子于歸、百兩御之、維鵲有巢、維鳩盈之、之子于歸、百兩成之。

鵲は樹木を集めて樹上に巢を營むが、鳩は巢を營まうとしない、その代り鳩は性靜かで鵲のやうに騷がしくない、鳩は巢を作らずして鵲の巢に入つてしまう、婦は鳩の如く靜かで、鵲の作つた巢の中に入るやうに人の家に嫁ぐのであると。これも繪になる。

◇

鵲の棲息地　鵲は鳥學上では鴉科に屬し、その分布區域は緬甸から海南島、支那、日本では朝鮮、臺灣、九州の北部で、此の九州北部のものは、朝鮮から來たもので、傳說に依れば、加藤淸正に依つて傳へられたものといふ、然し、鵲が朝鮮から日本に傳へられたのは、ずつと古いことで、『日本紀』には

推古天皇六年、自新羅國獻鵲二隻、乃使養於難波杜、因巢枝產之。

とある。その形態に就て、『本草綱目』には

鵲乃烏屬也、大如鴉而長尾、尖嘴黑爪、綠背白腹尾翮黑白駁雜、上下飛鳴以音感孕以視而抱、十二月始巢、開戶背大歲、向大乙、知來歲風多、巢必卑下、故曰鵲知來、猩々知往、又云鵲有隱巢、木如梁令鸞鳥不見、人若見之主富貴也、鵲至秋則毛毬、頭禿、其性最惡濕、靈能報喜、故名喜鵲、淮南子云、鵲矢中蝟、蝟卽反而受喙。

と、これで畫になる理由も明かであらう、その名稱も、鵲の外に、『乾鵲』『神女』『飛駁鳥』『鴛尼』など、呼ぶ、その『かささぎ』といふ語原に就いては、『東雅』の說がよく穿つてゐる。

カササギとは、新羅の方言と、此國の方言とを併せ呼びしと見えたり、即今も朝鮮の方言に、鵲を呼びてカシといふ也、カサといふ、カシといふは轉語なり、サギは即噪なり、鵲噪ぎぬれば喜ありなど漢人の說に見えたり。

山鵲と山娘　それから古畫などには、よく『山鵲』といふ文字が見える、これは支那產の鳥で、尾長にも見えるし鵲にも似てゐる、今日の『鳥類圖譜』式のものには見えぬが、『本草綱目』等に據ると、左のやうに記してゐる。

山鵲、山林處々有之、狀如レ鵲而、色有二文采一、赤嘴赤足尾長不レ能二遠飛一、亦能食二雞雀一、諺云、朝鬱叫晴暮鬱叫雨、說文以此爲知レ來事一又能鷹鸇之聲、而性惡二其類一相値則搏也。

この中、嘴と足とが赤く、烏色といふ點は餘く『山娘』に似てゐる、『山娘』は臺灣特有の鳥であつて鵲や尾長に似てゐるが遙かに大きく、且つ美しい、頭は瑠璃がかつた墨色で胸にまで及び、全灰藍色、翼の先に白羽が交つてゐる、最近では櫛原紫峰氏が、自からこれを飼養し、時々これを畫くし、油畫の方でも高間惣七氏は、同じくこれを飼ひ、畫材としてゐる。

◇

鵲の名畫　鵲の畫かれた名畫を擧げて見やう、先づ朝鮮李王家博物館にある傳趙涑筆の『老樹棲鵲圖』を擧げる、公孫樹とも見える老樹の枝に二羽の鵲と、他の小禽二羽が描かれてゐる、筆致如何にも雄勁で構圖も凡でない、趙涑は朝鮮豐壤の人、字は景溫、滄江と號し、宣祖廿八年（西曆一五九五年）の生れである、花卉翎毛をよくし、その名一世に高かつた。

朗世寧の作　朗世寧にも有名な『桃花喜鵲圖』がある、大湖石を中心に、桃花と長春とを配し、これに二羽の喜鵲を點出してゐる、極めて精緻な筆で、上に『怡親王寶』の印が捺してある、朗世寧はもと伊太利の人、本名をヨセフ、カスチローと呼び支那に歸化して朗世寧と改め、乾隆帝の命により幾多の力作を爲し、乾隆三十三年七十一歲を以て歿した、鵲の寫生の如き、中々に精密を極めてゐる。

支那の畫には、黃道周の『松石孤鵲』といふ作がある、大阪の藤田男爵の舊藏品であるが、この畫はもと大鹽平八郎が非常に愛翫してゐたものといふ、松の描寫の如き、豪宕勇勁、如何にも中齋の愛翫畫らしい處があつた。京都の笹川鹿堂氏藏の艾宣の『群鵲喙蟲圖』は、有名な作で、一羽の蟲を數羽の鵲が爭ひ喙まうとしてゐる處、これは構圖が面白いので、幾多の類似した構圖がこれから生れた。此の外、趙仲穆には『柏樹群鵲圖』があり、沈南蘋には『梅花喜鵲圖』があり、吳筠には『瓊花山鵲』の作があり、高橋是清氏舊藏の『松下猛虎』の作にも、松上には鵲が二羽畫かれてゐる。

梅逸の作　日本の畫人の作では、梅逸がよくこれを畫いた、片岡家舊藏の『萬年報喜圖』濱松の中村氏舊藏

の『喜報早春』の如き、梅邈一流の達者な筆に依つて畫かれてゐる、鳥の形には、梅邈獨特の型はあるが、兎に角達筆である、秋暉もよく此の鳥を畫いてゐる、波多野古溪氏舊藏の『梅花喜鵲』小田原の山田氏の『柳樹喜鵲』など、その一例だが、鳥はよく躍動してゐる。この外、春琴には、『秋艷野禽』の題で、石榴の樹の上に、喜鵲を畫いた作があるし、竹田には、『紫陽花に喜鵲』の作がある、此の喜鵲は形、やゝ尾長に類してゐるが、『小院雨晴天欲曉、鵲聲報喜至瓊花』とあるから、本人は鵲のつもりで書いてゐるのに相違はない。

◇

狩野家の人々は、探幽をはじめ、常信や守景などが、よく山鵲を畫いてゐる、雅邦にも『萬年報喜』などの作があるが、鵲といふより、寧ろ尾長に近い形に畫いてゐるのは、古畫からの傳統に依つたのであらう。

現代の人々の作　そこへ行くと、現代の人々は、或は自からこれを養ひ、或は親しく棲息の實況を觀、これが寫生を基礎としてゐるので、その形に誤りが少い。

横山大觀氏には、古く『揚柳喜鵲』の作がある、鵲に配せられる植物としては、松と梅が比較的多いのであるが、揚柳にこれを配したのは珍らしい。荒木十畝氏には、『萬年報喜』『松上群鵲』の作がある、ともに得意の松に配したものであるが、後者は、鵲の姿態がいろ〳〵に研究されてゐて面白く、共に『十畝畫選』の中に收められてゐる。

第十三回の日本美術院展覽會に、古莊肇成氏が出品した『鵲』は珍らしい構圖であつた、それは、篠懸の木の下に、鵲が三羽、蟲を爭ひ食べてゐる圖である、此の鵲の群れが、蟲を爭ふの圖は、支那にも同巧のものがあるが、篠懸の樹を配したのは珍らしい。

近い處では、昭和十年の青々會に兒玉希望氏が『雪中喜鵲』の力作を出品した、二曲一双で、手一杯に雪中の老松を描き、右に二羽、左に鬪爭してゐる八羽の鵲を畫いたものであるが、その姿態には相應に研究が積まれてゐた。

鵲と文學　文學の方では、多く七夕の故事から鵲が題材に登つて來る、即ち鵲のかけたる橋である、これは矢代通賢の『古今要覽稿』七夕の項にも記してある通り、『鵲といふ鳥の羽をならべ橋となし二星を渡し得るとふるくよりいひ傳るのみなり』である。

かさゝぎのはしつくるより天の川水もひななむかち渡りせん　家持

天の河たえぬ契りのわたりにや羽をかはせるかささぎのはし　沙彌生蓮

かささぎのわたせる橋に七夕の契のみこそかはささりけれ　法印定爲

など皆それである。

漢詩には　これが漢詩の方になると、

鵲歸鸞去雨悠々、青瑣西南月似鈎、天上歲時星右轉、世間離別水東流、金風入樹千門夜、銀漢橫空萬象秋、蘇小橫塘通桂檝、未應淸淺隔牽牛。　唐溫庭筠

◇

鳥鵲橋成上界通、千年靈會此宵同、雲收喜氣星橋滿、雨拂香塵月殿空、翠輦不行青草路、金鑾徒勝白楡風、絲盤花閣無窮意、只在遊絲一縷中。

唐　劉　威

その喜びを報ずるといことから、

神鵲神鵲好言語、行人早回多利賂、我今庭中栽好樹、與汝作巣當報汝。　王　建

といひ、又、

今朝聽聲喜、家信必應歸。

蕭　紀

ともいうてゐる。

俳句の鵲の巣　俳句では、春の季題に『鵲の巣』がある、これは、例の七十二候の『鵲始巣』から來てゐるのであらう。改造社の『歳時記』には

鵲が巣を懸けにけり　栗老木　　圭史
鵲の巣をいとなめる日數哉　　丹重子
鵲の巣やかたみに動く二つの尾　　すゞえ

の三句を載せてゐるが、何れも新人の作であり、古いのは概ね七夕に縁あるものばかりである。

一六　佛法僧（ぶつぱうさう）

姿の佛法僧　佛法僧が靈鳥として取扱はれた時代は去つた、その鳴く音の佛法僧と聞えるのは、羽色の美しい此の鳥ではなくて、木の葉木兎であることも、黒田長禮博士の實驗に依つて明かになつた。

『嗚呼矣草』の先見　併しながら、此の問題は、決して今日學者の間に珍らしさらに唱へられたのではなくて既に文化二年出版の田宮仲宣著『嗚呼矣草』卷の三にそれとなく記してある、これによると明方に見た鳥の形は鳶程もあるもので、梟の類であらうといつてゐる、著者は前著『鳥』に於てこの一文を引き

啼く音は佛法僧でも、見た鳥は佛法僧ではなく青葉木兎などであらう、高野山あたりの案内者の佛法僧が啼かぬ時は、青葉木兎の啼く音を佛法僧だとて、ごまかしてしまうさうである。

と書いて置いた、『鳥』は昭和四年の出版である。

佛法僧と文献　その啼く音に疑問を逸早くもさし挾んだのは、此の田宮仲宣の『嗚呼矣草』であるが、佛法僧に關する文献としては、伴蒿蹊の『閑田耕筆』、中山高陽の『畫譚雞肋』、岡部東平の『嚶々筆話』などがある、此の『嚶々筆話』中『聞佛法僧鳥說』には、佛法僧と啼くのは訝かしといひ、その末に

心なくなく鳥の音を法（のり）といひ佛と聞くも人からにして

というてゐる。馬琴の『玄同放言』卷五にも『佛法僧並慈悲心鳥』の項があつて、馬琴一流の博學ぶりを發揮したことであらうが、惜しかな、卷四以下未刊なので眼に觸るゝ機會がなくなつてしまつた。此の外喜多村信節の『筠庭雜考』には最も精しく之を記し、石井塘雨の『笈埃隨筆』にも記されてゐる。

札幌本府の『佛法僧』　近い處で、『札幌本府』といふものゝ其二に佛法僧の圖があり、例の弘法大師の

閑林獨座草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、聲心雲水供了々。

に對し松浦弘和といふ人

蓬窓月落天將曉、欹枕閑聽念佛鳥、唱名此名豈無由、法統東漸原了了。

と次韻してゐる此の法統東漸云々は、上に東本願寺法主巡錫の圖があるから、それを指したものであらう、下には佛法僧が、菩提樹にとまつてゐる一圖を畫き

庚午七月廿五日平旦兩三聲を聞て土人是を佛法僧なりと云ふ

夜に入りホウホウ〳〵〳〵と啼く鳥あり、土人これをアクタコダンチカウと云ふ、

其譯黃泉鳥也、其聲佛法と聞ゆ、土人云最上ニシは此鳥を聞て、內地にも有て尊き高山に住む佛法僧と云ふよし語られしと、此地にて黃泉鳥、漢土にて羅漢鳥、また唐韋蟾が詩に靜聽林飛念佛鳥とあり、

で、此の鳥の圖を一曜齋國輝が畫いてゐる。北海道にも此の鳥の居る證とならう。唯珍らしい文獻故にこゝに紹介して置く。

◇

繪の佛法僧　姿の佛法僧が如何に繪畫に現はれてゐるか、先づ人口に膾炙されてゐるのは、森一鳳の筆である、菩提樹に此の鳥一羽をとまらせた構圖のものが二つある、一は大阪の藤田男爵家の寶立に出たもので、これは拙著、『樹木と藝術』口繪に菩提樹の畫かれた作として掲げて置いた、次で双軒庵松本氏の襲藏品にも同一構圖のものが現はれた、唯後者は菩提樹の葉が幾分粗い、併し鳥の色彩の如きは、中々よく研究されてゐる、石川縣の樋爪家のものにも、菩提樹と佛法僧の細物がある。これは、鳥の姿が著しく優しくなりてゐるが、嘴の鋭さとが缺けてゐた、北齋にも松に佛法僧を畫き月を點じた作がある、例の閑林獨座の詩を題してゐるが、頗る俗なものである。

長野草風氏の『三寶の輝』　現代の人々の中で、最もこの鳥を早く畫いたのは中村岳陵氏であつた、氏は既に第三回日本美術院展覽會出品『維盛高野の卷』にこれを畫き、次に長野草風氏が十五回同展に『三寶の輝』と題して、弘法大師の肖像を描き、上に二羽此の鳥の飛んでゐる處を畫いた、昔の作は大抵樹木にとまらせてゐるのに、飛んでゐる姿を畫いたのが非常に珍らしい。

大觀氏の作　横山大觀氏は昭和九年の日本美術院試作展にこれを畫いた、高野槇に此の鳥を二羽畫いて、月影を見せた、佛法僧が夜こんな姿して然も二羽姿を見せてゐるかといふ疑問が起る、環境構圖に就いてはかうした疑問も起るやうなものゝ、氏は自からこれを飼つて親しくその姿を寫したのであつた。

泰生氏の『若き佛法僧』　水上泰生氏は、同じ年、極東の生物展覽會に『若き佛法僧』を畫いた、雛を畫いたのは恐らく此の作を以て嚆矢とするであらう。

◇

佛法僧遠ち方にして鳴きしかば心靜めて我れは聞きけり　小林克郎

くろぐろと杉のみし立つ山あひに佛法僧の聲のひゞかふ　佐々木胤元

待ち待ちて向うの峰より聞え來るかすかなる聲佛法僧なるか　谷義一

一七　錦雞（きんけい）

錦雉彩羽　鳥類の中には、その羽毛の美しいものが多數ある、錦雞の如き、將にその一つで、色彩の多趣多樣にして、絢爛を極むる點に於ては孔雀すら一歩を輸るところがある、然もこの美しい色彩をもつた鳥は人の手に依つて美化されたものではなくて、全く自然が賦與した粧ひといふに至つては、誠に驚嘆の外はない。

その美しい色彩の持主は、いふまでもなく雄で、頭には長い黃金色の羽冠を戴き、同じ色の腰衣に尾の基部を蔽ひ、尾は暗褐色で細かい斑點があり、顏の後から襟へかけては、黑と橙色だんだらの羽毛、丁度兜の鐵の如く胸から腹は濃紅色、肩は暗紅色、後列風切は紫色で朱に交り、嘴と脚は黃色で、將に五彩陸離たるものがある。これに反して雌は褐色に黑斑があるのみ、極めて單調なのは、他の雞類と大差ない。

原産地は支那　此の鳥の原産地は、支那の西南部で、陝西甘肅の南部から、四川、湖北の西部、宜昌の下流にかけて棲息するといふ、大抵六百米突乃至千三百米突位の山地であるから、綠樹の間に此の鳥の飛翔る姿の美しさは、蓋し想像に餘りある。併し古くから支那を經て我が國に渡來し、飼鳥となつてゐるので、今日見るところのものは、大抵我が國で繁殖したものと見て差支へない。

◇

古書に記す種類　寺島良安の『和漢三才圖會』を見ると、錦雞の外に、鷩雉、金雞、山雞、采雞、などの異名を掲げて居り、『本草綱目』を引いて、

錦雞、鷩雉、二物同類而稍有二分別一俗呼爲一矣。

鷩雉、狀如二小雞一其冠亦小、背有二黃赤文一絲頂紅腹紅嘴、利距而鬪、以二家雞一鬪レ之、卽可レ獲、養レ之穰二火災一。

錦雞狀小二於鷩一而背文揚赤、膺前五色炫耀如二孔雀羽一、其文尤燦爛如レ錦、故名、又名文鷩、或云錦雞乃鷩雉之雌也、亦通是一類不二其相遠一也、愛二其羽毛一、照水卽舞、目眩多死、照鏡亦然、鶡雞（かまどり）愛尾餓死皆以文累其身者也。

按錦雞、自異國來、畜二于樊中一、狀似レ雉而五色頂白有二黑細文一、冠亦白頰黃、胸腹紅背綠、翅黑腰帶二細白毛一、尾長三尺、黃黑紫斑下尾稍短、純朱色、嘴淡紅脛灰黑、利距善鬪、價貴、故畜之者少矣、而未レ見二鷩雉一。

と記してゐる、こゝに鷩雉と呼ぶのは何鳥であらうか、詳かでなく、錦雞の方も、多少今日見るところのものと異つてゐる、これは、まだ當時、此の鳥が珍しくて、その觀察が不十分であつた爲めではあるまいか。

◇

程敏政の詩　姿が素晴しく美しいので、支那の詩文には昔からよく現はれた。

平原空笑戈人勞、山木青葱護錦毛、何處晚風堪レ顧レ影、石泉澄澈見秋毫　程敏政

は、錦雞の羽毛を愛する習性をも詩中のものとして、そのまゝ畫になつてゐる。この外、劉克莊は『朱丹飾二尾距一綵繡錯二襟衽一』といふ美しい文字を連ねてゐるし、溫庭筠は『繡翎翻草去、紅嘴啄花歸』と詩化し、張舜民は、

春色滿山歸不レ得、對レ人猶復吐二文章一。

といふてゐる。

繪畫に畫かれた場合　繪畫にこれを畫く場合も、鳥が絢爛を極めてゐるのに、その添景には相應に苦心してゐるやうである、左に錦雞の畫かれた名畫三四を擧げて見やう。

先づ元の時代にあつて、王若水の作を擧げなければならない、もと鳥津公爵家に傳へられた橫物で岩上に雌雄の錦雞を畫き、牡丹を配し、岩の傍から野薔薇が一枝伸びて白花を開き、これに一羽の雀が囀つてゐる堅實極まる手法で、鳥の姿態もよく活躍してゐる。

呂紀の作　明では先づ呂紀が好んで之を畫いた、本邦に傳へらるゝ名作も少くないが、帝室博物館所藏の『牡丹錦雞圖』の如きは、その代表的佳作といへやう、畫面の中央に岩石を見せ、これを境として、上には桃花咲き誇つて小禽之に遊び、下には牡丹艶を競ひ、薔薇之に和し錦雞二羽地上に何か啄んでゐる、誠に絢爛無比の畫面を畫き出してゐる、呂紀にはなほ佐竹侯爵家舊藏にも、花鳥の双幅があり、中々の力作で、同じく牡丹に錦雞を畫いてゐる、この方は鳥の位置を岩上に取つてゐる、呂紀は明代花鳥の大家、楊子江に近い鄞に生れ、はじめ邊文進に就いて學び、後、唐宋大家の筆に私淑して花鳥畫に精進し、後孝宗帝に召されて仁知淑供奉の畫士となり盛名を恣にした、その作は精緻纖細を極むる中に一脈の覇氣を藏してゐる。

周之冕の作　明時代の人ではなほ、周之冕にも錦雞の大作がある、矢張牡丹に錦雞で、此の作は、呂紀のそれの如く、覇氣はないが、牡丹の描法や、鳥の姿態等にも著しく和みがあり、殊に錦雞が、その嘴を以て羽の間を搔いてゐるのは珍らしい。

降つて淸初の人、孫億には、松浦伯爵家の舊藏に『金思鳳凰、錦雞牡丹中松梅』の三幅對がある、呂紀や周之冕よりはグッと硬くなり、畫品も一段と下つてゐる。この外、金臺倪の錦雞の圖がある、これは高橋是淸

氏舊藏の作を見たのであるが、構圖の重要な役割をつとめる柳の枝などが、かなり大膽な位置におかれ、錦雞の姿も一種の威を備へてゐた。高橋家にはなほ明畫で無落欵の竹に『錦雞圖』があつた、落ついた筆で、萱草など配した洒落れた筆致のものであるが、構圖がやゝ散漫に陷つてゐた。

◇

直庵の花鳥屏風　日本の畫家の作では、先づ最初に曾我直庵の花鳥圖屏風を擧げなければならない、これは帝室博物館の所藏で、八曲一双の大作であるが、錦雞の描かれたのは、その右半双で、梨花咲く庭砌の岩上に極密着色で、錦雞が今や飛ばんとしてゐる姿を畫いてゐる、筆力高雅、畫品亦任からず、錦雞の姿態もよく寫してゐる。

元信の作　狩野派では、古く元信に『四季花鳥屏風』の大作がある、これは昭和十年四月、名作屏風展覽會の呼物として上野の帝室博物館に陳列されたものであるが、多數の鳥類を畫いてゐるから、錦雞には特に努力を費してゐる、常信には、孔雀と錦雞を双幅とした豪華なものが松浦家に傳へられてゐたし、德川伯爵家には伊川院の『牡丹錦雞』の大作がある。

此外、含英公は雪中芭蕉に錦雞を配した珍らしい作があり、四條派には、蘆雪が四季花鳥の中によく錦雞を加へ、崋山にも『枯柯錦雞』といふ崋山としては珍しい作があるし、竹田も梅花に錦雞を配した作を遺してゐる、かうして見て來ると、錦雞に配するには、牡丹が一番多く、桃花、梨花、竹など之に次いでゐる、現代に於ては此の鳥を畫くもの漸く少くなり、餘り見受けぬが、昭和四年の帝展に、高木保之助氏が『夏の粧ひ』と題し、咲きみだるゝ夏草の前に、錦雞を配した作など近頃では珍らしいものといはねばならない。

◇

銀雞の美　錦雞の姉妹鳥に銀雞がある、これは近年日本に渡來したもので、その原生地は西藏の東部から南支那四川雲南方面の山地といはれてゐる、錦雞の黃金色に對し、これは銀白色が主となつて居り、首筋から襟にかけて美しい銀色に黑色の波狀紋があり、尾羽亦白色、これに黑色の横線とその線と線との間に細かい蒼黑色の斑點がある、頭は青綠色で朱色の冠毛があり、眼の周圍の裸出部は淡綠色、背から尾までの間には青銅色や橙黃色、濃紅といろ〳〵の色彩が美しく入込んでゐる。

他鳥を威嚇する時は、兜の鍬のやうになつてゐる襟毛を立て、首を埋め眼を睜らす、その形が中々面白い繪畫には現代の人々の作が二三あり、荒木十畝、小室翠雲、水上泰生、五島耕畝氏等に依つて屢々畫かれてゐるのみである。

一八　白鷴（はくかん）

白鷴は支那の鳥　白鷴は雉科に屬する美しい鳥で、白雉と俗に稱せられてゐる、黑田長禮博士の『鳥類原

色大閼說』に據れば、『南支那に產し、北は浙江省に達し、近似亞種は雲南西部に產す』とある、しかし、羽毛が美しい處から、飼ひ鳥として洽く世界的に分布せられ、日本にも古くから渡來してゐる。

渡來した年代　その渡來した詳しい年代は不明であるが、元祿八年の出版である平野必天の『本朝食鑑』に

白鸚此亦自中華來、不レ過二三四十年一、狀似錦雞、而色白有二細黑文一、如二漣漪一、尾長三四尺、體備冠距、紅頰黑腹、赤嘴丹爪其性耿介、其雌蒼赤色、頰紅嘴微赤、脛亦淡紅、尾裏白而有細黑文、生卵不伏、以雞伏之、故種類未多、其所啄之食亦多、於見世俗能多畜、最不知氣味、惟官家畜二之奬中一、以爲珍賞也。

とあるから、明暦、寛文頃の渡來ではあるまいか。

白鸚の形態　兎もあれ、その美しい姿は、これを苑に飼つて十二分に眼を娛しませるに足る、雄は頭に紫色の羽冠を戴き、胸から腹へかけて亦紫色であり、頰は紅く、背から尾へかけては白雪の如く、翼から背にかけて小波形の黑い斑があり、これが此の鳥を美しくしてゐるのであるが、雌の方は雄ほど美しくなく、頭に褐色の冠羽があり、頰僅かに紅く、咽喉の邊は白く、外側尾は黑く不規則の白色と橄欖色の斑がある。

その種類　種類には、縞白鸚、深山白鸚、紫紺白鸚、薄墨白鸚などゝいふものがあり、それ〴〵特色の形態を備へてゐるが、普通の白鸚ほど美しくはない、支那では古くから、此の鳥を珍重してゐたと見え、閑客として五客の一に數へ繪畫にはよく畫かれてゐる。

◇

呂紀や王若水の作　呂紀や、王若水のやうな花鳥畫の大家は、よくこれを畫いた、本邦に傳はるもので、呂紀の作では越前の松平家に大作があつた、これは枇杷に連雀と二幅對になつてゐるその一つで、流れに臨み岩上に雌雄の白鸚を畫いた大幅である、王若水の作は、桂花に白鸚を配したもので、京都福田淺次郎氏の所藏である。

應擧の『陶靖節放白鸚圖』　我が朝の畫人では、圓山應擧に力作がある藤田男爵家舊藏の『牡丹白鸚圖』は、絢爛を極めた牡丹に白鸚を配し、更にその美を加へたるもの、また近江の淺田家には、『陶靖節放白鸚圖』がある、『王右軍觀池鵝圖』と双幅で陶淵明がその愛、鳥に及ぶを圖したるもの、卽ち永く飼つてゐた白鸚の籠を開いて放つ圖である、應擧の謹嚴なる筆、自から襟を正さしむるものがある。

探幽の作　狩野派の人々の作にも、よく白鸚を畫いたものがある、探幽の作では、松方公爵家に傳はる花鳥屛風の中に、克明な筆でこれを配してゐるし、また横物の力作で、雌雄の白鸚を畫いたものもある、探幽の筆は雄勁な中に、寫生をよく活かしてゐる。同じ流れを汲む人々の作としては、德川伯爵家舊藏の養川院惟信の白鸚の屛風、同家のもので、伊川院榮信が梔子花に白鸚など構圖が極めて珍らしい。

此の外、白鸚を畫いたものに、岸駒の『五客』があり、竹洞は竹と長春を描いて之を配し、竹溪は牡丹の艶に添へて一層の美しさを見せ、變つた方面では含英公が梭梠の木を背景として描いてゐるなど珍らしい。

白鸚事林響　近頃の作では、故石井林響氏は、此の鳥を愛し、品川に畫室を構へてゐた時から、上總の大

網に居を移してからも、雌雄の白鸚を飼育して、よくこれを畫き、自からも白閑亭と號してゐた位である。

現代作家の作　この外、各展覽會に現はれたもの、若しくは個人の祕藏品で、現代の作家に依つて畫かれた白鸚の作を擧げると、主なもの左の通りである。

永田春水	薫苑麗日	第十回帝展出品
五島耕畝	後苑遊禽	第十二回帝展出品
喜多川玲明	白鸚	第八回帝展出品
荒木十畝	華蔭鳥語	秋野光廣氏藏
小室翠雲	初夏新霽	昭和九年尚美展
小杉放庵	春苑	昭和九年個展出品
池上秀畝	一色の春	三回十八公會展出品

此の中で、春水氏の『薫苑麗日』は、牡丹の花の下にこれを描いた絢爛華麗の出世作、五島耕畝氏の『後苑遊禽』は、向日葵のかげに、雌雄の白鸚を畫いた面白い構圖の作であつた。

一九　伽藍鳥

（ペリカン）

ペリカンの種類　ペリカンは、鳥類の中で特殊な姿をしてゐるので、動物園などの愛嬌ものとして、無くてならぬものとなつてゐる、あの嘴についた大きな袋を擴げて小魚などを掬ひ込む姿は、一寸ユーモアな氣分で面白い、いま上野その他の動物園に飼はれてゐるペリカンは、濠洲產のホワイト、ペリカンと、アフリカ北部原產の桃色ペリカンであるが、ペリカンの種類は全世界に十二種ほどある、いま日本で見られるのは、前記の二三種に過ぎない、そして普通これまでペリカンと呼ばれてゐたのは、羽毛が白色で翼の初列風切羽や雨覆羽の一部が黑い、そこで此の種を腰黑ペリカンと呼んでゐる。桃色ペリカンは、その名の通り桃色で一寸黃を含んだ色で中々美しい、この外に翼の銀白色をしてゐるホワイトペリカン、比律賓ペリカンがある、腰黑ペリカンは濠洲地方に棲息して居り、稀に東部シベリヤ邊にも現はれる、桃色はアフリカ北部の外、印度錫蘭島、爪哇のあたりにも群棲し、その昔、日本に飛んで來たりしたこともある。

伽藍鳥の名　ペリカンは、その昔は伽藍鳥（がらんてう）と呼ばれてゐた、つひ五六年前までは、動物園の檻にもガラン鳥といふ名札が揭げられてゐた、ペリカンは英語で、今は此の方が通つてゐる、併し異名をつけることの好きな支那では、いろいろに呼んでゐる。

伽藍鳥、鵜鵜、逃河、淘鷺、納鳥、塘鷺、淘河、鵜鶘

日本讀みにして加良牟鳥などゝある、この中で、鵜鶘といふ名は、此の鳥が鵜の種類であることを示してゐるし、塘鷺だの、陶鷺だのといふのは鷺の屬と見たものらしい、更に興味を唆るのは、逃河、陶河の名である、これは川淡ひといふ意味になる、何故にこんな名がついたのであらうか。

特長は嘴　ペリカンの特長は、いふまでもなく、あの大きな嘴、そしてその嘴についてゐる大きな袋である、動物園のものより見てゐない日本人には、此の鳥の自然生活は見られないが、その產地へ行くと、多數群をなして棲息し、そして川や沼に下り、あの大きな口をあけ、袋を擴げて一齊に餌を漁る、その有樣をトムソンは、『科學大系』の中で

ペリカンも亦、淺瀨で魚を捕へる鳥で、大きい口を十分に開いて、水の中に入れながら徒涉する、そして出會はす餌は嘴の下にある大袋の中に受け容れる、仲間が共同してやるので、恰も生きてゐる大網のやうに一列になつて、沼の中を掃除する、鵜は魚を追ひまくり、ひつくり返して攫む、かつをどりは高く飛び、躍り下つてそして刺す、ペリカンは掃除をして歩いて捲き込む。

とある、その川の掃除といふのが、淘河の文字になつてゐる、支那人は實に名のつけ方がうまいものである

伽藍鳥は、袋の大きいところから、伽藍の名がつき、或は、加蘭陀鳥、コンガラ鳥と呼ぶ處もある。

◇

日本へ飛來した記錄　ペリカンは時とすると、日本や支那に時々飛んで來た、『和漢三才圖會』を見ると、

『本草綱目』を引いて

鵜鶘、處々有レ之、水鳥也、似レ鶚而甚大、灰色大如二蒼鷺一、喙長尺餘、直而且廣、口中正赤、頷下胡大如二數升囊一、好群飛、決水食魚、亦能竭二小水一取魚、俚人食其角取二其脂一入レ藥、能通レ鬱治腫毒、其脂取收、以其嗉盛之、則不レ滲漏二他物一、其胸骨斫骨作筒吹、鼻藥其妙、莊子曰、魚不畏網而畏二鵜鶘一言能以嘴刀取魚故也。

と記してゐるのでもわかる。

日本に飛んで來たことに就いて、黑田長禮博士は、六回までその記錄があるといはれてゐる、處が近年發見した材料で、內田清之助博士が著者に示された一の例があるから、これを加へると七回といふことになる

それは南部藩の記錄で左の文字がある。

山城守重直公時代、承應三年九月毛馬內三郎助、志和郡間野々村(現在紫波郡德田村間野々村か)に於て異形の大鳥を捕獲して之を藩廳に獻上す、其大さ恰も人體位にして、形狀白鳥に似て毛薄鼠色、兩翼の先に霜降り形あり、上嘴長さ一尺幅一寸五分、下嘴廣さ八寸にて袋あり、兩翼を張れば九尺七寸五分、兩足の長さ五寸、鴻雁の足に似て黃色を帶びたる大鳥なり、頗る珍奇のものなれば、之を德川幕府に獻上せゞ。

これは『南部藩雅書日記』の一部で、こゝに書かれた鳥が何鳥かと、内田博士の所へ問合せて來たのであるが、紛ふ方なきペリカンで承應三年といへば、昭和拾一年を遡ること、二百八十三年である、ペリカンの渡來したのは多く九州地方であるのに、岩手縣に飛んで來たのが面白く、記錄を辿つても、これが一番古いものらしい。

ペリカンの見世物　その後、ペリカンは、京都の今宮御旅所、四條河原などへ出る見世物に現はれたりしてゐる、伴蒿蹊の書いた『閑田耕筆』にそれがある、『閑田耕筆』は寛政十一年の出版である、そしてそのはじめに『今より二十年ほど前』云々とあるから安永八九年の事らしい、見世物には隨分いろ〳〵のものが現はれたらしく

この外がらん鳥と名付けて鵜鶘を見せしが、頷下に袋あつて、數升の水を飲ましむるに能く牧む、たゞし面赤くなり、眼を働かして頗る苦しむさまなり、川澤にかくれ、共に呑んで魚を取るとなん、其水は吐き出せり、指揮せるもの〻言に從ひ進退せるなど、教へればをしへらるゝものなりと感じぬ、教へに從はぬ人は鳥にだもしかずといふべし

と末を教訓めいた文字で結んでゐる。

◇

古信の寫生畫　記錄の上ばかりでなく、珍らしく古い繪畫にも、これが現はれてゐる、それは舊伊達家の所藏で、第二回の同家賣立に現はれた、筆者は狩野古信で、三尺位の大横物、鳥の名がわからぬので、唯大鳥の圖としてあるのみだが、畫かれてゐるのは將にペリカン鳥で、唯袋を十分に見せず、嘴の中に疊み込んでゐる所を描いて居り、狩野家の繪のことであるから、矢張り流れや蘆の葉などを添景としてゐるが、實に細かい寫生で、その風切羽の黑い點まではつきりと畫かれてゐる。

狩野古信は、木挽町狩野家の五代で、如川周信の子、享保十六年三十六歳で歿してゐる、年から推察すると、享保年間に畫いたものらしい、どうしてこんな鳥を畫いたものか、幕府の命令にでもよつたものか、その動機がわかると面白いが、それははつきりしない。

山村耕花氏の作　ペリカンを藝術の上に表現したものは、古いものでは此の古信の作位であまり見當らぬが、近いところで先年山村耕花氏が、木版畫を出した折、此の腰黑ペリカンを面白く扱つたことがあり、これを切かけに版畫には二三見た、繪畫としては昭和九年の青龍社展覽會に小畠鼎子氏がこれを畫いてゐる、二羽のペリカンをそれぞれ異つた姿態で畫き、双幅にしてゐた、これまでに突込んで畫いた作は珍らしい、同年同期に開かれた構造社の展覽會には、金成眞輔氏が、『鳥三題』と題した彫刻の中に、ペリカンを製作してゐた、一寸面白い作であつた。

◇

ペリカンの棲息地　ペリカンは、かうして日本に渡來するごときは極めて稀なのであるから、我々は動物

園以外見ることが出來ず、動物園のものは、自然の生活から大分歪められてゐるわけである、だから、その棲息地の北部アフリカや、濠洲印度の錫蘭島、爪哇地方で、此の鳥が多數群を爲して飛翔してゐる處は定めて壯觀であらう。併しその翼は擴げると五尺七八寸もあり軀も隨分大きいから、體量も自然重い、だから飛ぶ時も、さう高くは翔らず、低く旋回的に舞ひ翔り、そして水邊をめがけて舞ひ降りるといふ。

そんな風であるから脚もあまり長くない、寧ろ太く逞しく、指は四本あるがこれが全部膜で繋がつて居り水掻になつてゐる、更に面白いのは、その指が眞直に前に向つてゐるのではなく、外側へ向けて末廣がたに擴がつてゐることである、それが爲め陸上を歩く時はヨチ〳〵してあまり形のよいものではないが、一度水に入ると全く見違へるほど立派に此の水掻きが活躍する、かうして指全部が膜で繋がつてゐる種類を全膜類と呼んでゐる。

ペリカンの生態　ペリカンの自然生活はどんな風であるか、北部アフリカや、濠洲あたりに棲息してゐるものは、海濱の岩や砂丘などの間に巣を營み小魚や貝類などを餌としてゐるといふ、その種類の上から見ると、鵜の種類に近いのであるから、水中の生魚を捕へることは誠に巧みで、唯に嘴の先で小魚などの居さうな處を探し廻り、啄むばかりでなく、横に嘴を開いて浚つて掬ひ込み水だけ出すのであるから、大抵の小魚など、これにかゝつては逃れられない、『莊子』に『魚網を畏れず鵜鶘を畏る』といふてゐるのも、よく穿つてゐる。

なほ此の大きな嘴は、餌を掬ひ込む外にいろ〳〵と仕事をする、第一が羽毛の掃除である、水中に入つて生活する鳥のことであるから、いろ〳〵不潔なものが羽毛につく、すると嘴を櫛でも使ふやうに巧みに動かして、羽毛を撫で廻し、見違へるやうに美しくする。

年に一回産卵し、四個乃至六個の卵を生む上野の動物園でも二三年前産卵したがうまく孵らずにしまつたとか聞いてゐる、なほ古い書物には、肉は食用に供せられ、脂は藥に入れて耳の病に用ゐ、また骨は鼻の病氣にも用ふるといふやうなことが書いてあるが、これはあまり當てにならない。

二〇　孔雀（くじやく）

桃榔暗天蕉葉長、纔露文章嬰世網、故山桂子落秋風、無因雌雄青雲上。　黄山谷

鳥類隨一の美　孔雀はその羽毛の美、鳥類中に冠絶し、その陸離たる光彩、將に自然の一驚異である、かうした美しい鳥であるから、從つて藝術とも深い交渉を有し、唯に、繪畫その他工藝美術にこれが表現されるばかりでなく、羽毛は取つて直ちに裝身器や、室内の裝飾品に充てられ、更にこれが佛畫として孔雀明王の如き姿を以て現はれてゐる。

應擧の傑作　孔雀を畫いた名作としては、古來いろ〳〵の作が擧げられてゐるが、先づ圓山應擧を第一に

擧げなければならない、應擧の寫生帖を視ると、孔雀が極めて綿密な筆に依つて寫されてゐるが、此の周到なる用意は、忽ち人目を眩せんとするやうな、美しい作品となつて現はれて來る。

先づその代表的傑作としては、曾て澁澤子爵が愛翫してゐた、中壽老西王母、左右櫻紅葉孔雀の三幅對を推さねばならない、此の作は天明元辛丑、應擧四十九歳の圓熟時代に筆を執つたもので、右には山櫻の下に岩上の孔雀を描き、左には紅葉の下に尾羽を擴げた白孔雀と地に伏してゐる雌を描た、その構圖が如何にも雄大であり、孔雀の姿態も寫實の精妙を盡してゐる。應擧には、まだ此の外に數點有名な作がある。その中で、但馬國朝來郡森村の龜居山大乘寺、俗に應擧寺の孔雀の間の孔雀の如き、その晩年の傑作と稱せらる、

徹山の孔雀　四條圓山派の中で、森徹山は孔雀の名手として知られてゐる、その生涯に孔雀の作を殘した數も少からぬのであるが、その最も優れてゐるのは、もと小坂順造氏の所藏であつた牡丹孔雀の双幅である右には上に海棠、下に白牡丹、左は白長春に紅牡丹を描き、各一羽の孔雀を描いた、綿密なる寫生に立脚し然も色彩には金屬性光澤あり、その賦彩には如何に肝膽を碎いたかが察せられる。

孔雀畫家秋暉　徹山の孔雀と對照されて、その名手と稱せられるのは岡本秋暉である、秋暉は、その瑰麗なる筆を揮つて、幾度か孔雀の作を遺した、中でも力作と稱すべきは、南波禮吉氏藏の、『芙蓉孔雀圖』である、此作極密の着色畫で畫面斜に老樹の幹を見せ、芙蓉の花その下半を彩り、此の間に雌雄の孔雀を配した雄は上空を仰ぎ、雌は流れに臨まんとしてゐる、よく秋暉の熱意ある作風を想見せしむ、秋暉には此の外、

『雪松孔雀』の奇拔の構圖のもの老松に孔雀を配したもの、瀑布を背景としたるもの、水邊に水を掬ばんとするもの、牡丹朝陽に配したるもの、種々の構圖で、その技を縱横に發揮してゐる。

岸駒の作　變つた方面では、岸駒に孔雀の横物がある例の奔放な筆致を牧めて神妙な筆遣ひである、これは曾て、明治大帝の天覽を忝うした作である、姿の變つたものとしては西山芳園に飛翔してゐる孔雀を畫いたものがある、思ひ切つた構圖である。

白孔雀　狩野派では遠く山樂に櫻花孔雀屏風があつて、絢爛無比の畫面を見せてゐるが、常信にも『白孔雀』の珍らしいものがあり、探信あたりも之を畫いてゐるが、狩野派の人々の畫くところ、その尾羽を擴ばる形も、グッと裝飾風になつてゐる。

◇

雅邦水墨の孔雀　近代の人、現代の作家のもので、忘るゝことの出來ぬのは、雅邦の水墨の孔雀である、絢爛華麗なるべき孔雀を水墨で描き、然も色彩以上に墨の働いてゐるのは流石である、これはもと青森市田家所藏であつたが、築地の某家に入り、危く大震災で燒かれやうとした處を一令孃の機轉で免れたといふ一揷話をもつてゐる。

荒木寛畝翁にも孔雀の名作がある、謹嚴な中に、豪宕の氣を潛ませてゐる處が異彩である、帝展では、池上秀畝、西澤笛畝、石崎光瑶、高木保之助氏等にその作があり、町田曲江氏も『淨晨』『摩訶摩瑜利』の二作

で孔雀を描き、日本美術院では荒井寛方氏の『樂土』が白孔雀であり、小林古徑氏の二十一回院展出品『孔雀』も、その裝飾風な扱ひ方で當時毀譽褒貶相半ばしたが、その上品な色調は忘られない、寛畝門下の渡邊晨畝氏は孔雀專門の畫家で、自から中華民國の徐世昌から贈られた孔雀を飼養し、絕えず之を圖にしてゐる『孔雀哺雛』の如きは、自から飼養する人でなくては畫けぬものである。

◇

孔雀の棲息地　孔雀には普通種と、印度孔雀とがあり、印度孔雀の變種に白孔雀がある、普通種と印度孔雀の異なる點は、頭部の冠毛で、普通種は細いが、印度產は末廣形になつてゐる、普通種は爪哇、馬來半島交趾支那、緬甸邊に產し、印度產は印度全土、錫蘭島に產する、白孔雀は全く人工に依つて出來たものであ
る、日本に渡來したのは、初めは普通種であるが、今日では印度孔雀が多きを占めてゐる。

孔雀渡來の始め　その渡來した始めを史實に徵すると、先づ推古天皇の六年八月、新羅から孔雀一双を獻じたことが見え、大化三年には新羅から又孔雀と鸚鵡各一双を獻じたとある、降つて承和十四年入唐僧慧雲が孔雀と鸚鵡を獻じたと記し、近世に至つては、慶長七年交趾より、虎と象、孔雀二羽を德川氏に獻じ、十五年には安南國から貢の船が入つて、さま〴〵の產物とともに孔雀一羽を獻上したとある、かうして見ると孔雀の渡來は隨分古いことであるがもと村井吉兵衞氏藏の浮世繪風俗屛風に、孔雀が見世物として現はれ、群衆がこれを見物してゐる處が畫かれてゐるのを見ると、當時も珍らしかつたのであらう。

徽宗皇帝と孔雀　支那では隨分古く、孝武帝の時、旣に孔雀の渡來してゐることが記されてゐるし、宋の頃には盛に孔雀も飼はれてゐたやうであり、徽宗皇帝に關する逸話なども傳へられてゐる。

宋の徽宗皇帝が畫院の畫工たちに、孔雀が丘に上らうとする樣を描かせたことがあつた、畫は出來上つて上覽に供せられたが皇帝はどれを見ても一向氣に入らぬらしかつた、皇帝はいつた、『孔雀が丘を上るときには、つと左脚から先にするものなのだ、それなのにお前たちの畫は皆右脚から先に踏み出してゐる、こんなに事實に違つてゐては、とても駄目だ』　薄田泣菫―『草木蟲魚』

『雀屛中撰』　また『雀屛中撰』といふことがある、『唐書后妃傳』に曰く

高祖太穆皇后竇氏、父毅常曰、此女有奇相、見識不凡、何可妄與、因畫二孔雀屛間一、請婚者使レ射二矢一、陰約中則許之、射者數十、皆不合、高祖最後射中、各一目遂歸二於帝一。

と甚だ面白い、小室翠雲氏が繪にしてゐる。

孔雀明王　孔雀の佛像となつたのは、孔雀明王である、明王は金色の孔雀に騎り、白蓮華上に趺座す慈悲の相に住し、四臂あり、右第一手は開敷蓮華を執り、第二手は俱縁果を持し、左邊第一手は心に當てゝ吉祥果を持し、第二手は三五基孔雀尾を執る、その名畫として傳はるもの京都智積院所藏、藤原時代の作の外、數點國寶級のものがある。

◇

歌と俳句　孔雀はその姿の美しい割合に文學には縁が遠い、歌なども極く少い、二三擧げると

青鳥の孔雀の鳥が笠のこどくうちひろげたるしだり尾の玉　正岡子規

たま鳥の八尋のたり尾開きたてめぐる姿は見もあかざけり　田安宗武

長雨のあとの心にひるかへり孔雀火のごと啼く日來りぬ　北原白秋

俳句にも季題に入つてゐないから、他の鳥のやうに多く吟詠に上つてゐない、二三引く

春風に尾をひろげたる孔雀哉　子規

陽炎の燃えつゝ思ひ孔雀哉　芙蓉

尾枯せしを孔雀憐む落花哉　竹の門

二一　鷹（たか）

秋風逕翅下雲衢、野性翩々不受羈、欲借一枝江畔宿、等閑花鳥莫相疑　陳憲章

鷹の威容と習慣　鷹は、猛禽類中極めて性俊敏勇猛、よく禽獸を捕へてこれを屠る、然も容姿は端嚴にして威あり、眼光烱々として冑し難く、全く鳥類中の一異彩である、これが爲め花鳥畫の好畫題として、古來幾百千人の畫人に依つて之が畫かれてゐるし、そればかりでなく、種々なる方面に勇猛の象徴として表現されてゐる。

前田青邨氏の『鷹狩』　近い例を擧げると、昭和九年の日本美術院展覽會に、前田青邨氏の大作、『鷹狩』がある、六曲一双で左半双に鷹が一羽の丹頂を仕留め、組んずほぐれつしてゐる複雜なる姿を描き、右半双には、これに驚いて逃げて行く鴨の群れを畫いてゐる、此の作、總てが點線の連續で、巧みに墨と線の調子をつけてゐる變つた試みの作である。

十畝氏の獻上畫　一つは全國中學校生徒が滿洲國皇帝に獻上した、荒木十畝氏の『威振萬年』である、これは老松の幹に一羽の鷹がとまり、烱々たる眼光何物をか睥睨してゐる颯爽たる作で、蓋し十畝氏得意のものである。

この外、昭和九年の第十五回帝展には、望月春江氏が『晨明』と題して枯木に鷹のとまつた豪壯な作を見せてゐるし、第十二回の帝展には、鷹の研究で、自他共に許してゐる京都の福田翠光氏が『ほぐゝみ』の傑作を出してゐるし、西澤笛畝氏は樺の木に鷹を畫いた『振威八荒』を出品して好評を博し、水上泰生氏は『深山爽秋』の題下に柳の木に鷹を配した作を出し得意の腕を見せ、更に古くは第九回に勝田蕉琴氏が『喬松双鷹』を出し、松の描寫に新意を見せ、第四回には根上富治氏が『飼養』を出品し、特選となつたが、此の鷹は寫生の極致を盡して世評頗るよく、柳原紫峰氏が國畫創作協會に出品した六曲一双の『赤松』も鷹を配した作として近頃評判のよかつた作である。

◇

古畫の鷹　古畫には鷹の畫かれたものが極めて多い、殊に著しいのは、徽宗皇帝筆と稱へる所のものである、著者の手記を探つても、舊伊達家の所藏品、島津公爵家の舊藏品、越前松平家の襲藏品、故下條桂谷翁の愛藏品、片岡直溫氏遺愛品其他數點に上り、此の外、徽宗皇帝と傳へられてゐるものを擧げると十指を屈するもなほ餘る位である。

この中で、伊達家のものは、とまり木にとまつてゐる姿を描き、幅の上部中央に宣和の印があり、蔡京が賛をしてゐる、松平家のものは、老松樹上の白鷹で、同じく上部中央に落欵があり、宣和殿大學士臣何執中と署して何執中が賛をしてゐるし、柳雪京泰の極めがある、島津家のものは、同じく白鷹でとまり木にあり下を觀てゐる、上部右印章がある、何れを見ても皇帝が、此の種のものによく筆を揮つたことがわかる、『桃鳩圖』や『水仙鶉』のやうな皇帝の傑作ではないが、何處にか皇帝らしい筆は見える。此の外、宋代には鷹をよくした人が多かつたと見え、『君臺觀左右帳記』を見ると、李安忠、張氷涯、徐澤、李仲和、皆鷹をよくしたやうに記してある。

林良の『朝陽鷹圖』　鷹の古畫の中で、特に印象に殘つてゐるのは、林良筆『朝陽鷹圖』である、これは某大名の舊藏で、兀立した巖上に一羽の鷹がとまり眼光鋭く何物かを凝視して居り、岩下には怒濤勢凄まじく、これに朝陽が現はれてゐる、墨痕淋漓、覇氣横溢、誠に痛快なる作、探幽の添狀極めもある素晴しいものであつた。變たつ作では、佐竹侯爵家舊藏の、王晉卿の『三白』がある、三白は『白鷹、白雪、白雁』を多く畫き時に白梅を加へて雁を除くもある、王晉卿のは、鷹と雪と雁との三白を面白く扱つたもので、構圖も大膽極まるものであつた。

雪舟の作　日本のものでは、雪舟に有名な鷹の屏風があるが、今は日本になく米國ボストン博物館襲藏となつてゐる、これに次いで有名なのは東京美術學校所藏の永德の松鷹屏風である。これは金屏六曲一双で、左右とも、老松を手一杯に描き、下には流れに岩石を見せ、霞を隔てゝ遠山を現はし、右には、普通の鷹、左には白鷹各一羽づつを配し相對せしめてゐる、構圖の大膽奔放なる、然もその中に鷹の如きは周到なる寫生を基礎とし、些の弛緩なく、全幅を蔽ふ覇氣は、犇々として人に迫るものがある、將に桃山藝術の粹である。

以來、狩野家には、鷹を畫くもの少からず殊に探幽は好んで鷹を畫いたので、今も所々にこれを見る、中に就ても川越東照宮の繪馬の白鷹は探幽の作中での尤品であらう。三幅對として、中に富士や白衣觀音を畫き、左右に鷹を配したものもよく見受ける。

直庵の鷹　鷹の名手としては曾我直庵を擧げなければならない、直庵の筆は雄勁にして豪快、殊に鷹を畫くと躍動人に迫るものがある、紀州德川家舊藏『巣鷹』の如きその一例である。四條派の人々の中では、寛齋がよくこれを畫く、綿密なる寫生風で、やゝ通俗的ではあるが、流石に品位を保つてゐる。

◇

鷹狩の沿革　鷹がかく藝術上に深い交渉を有し、畫などに表現されるやうになつたことには、凡そ二つの理由がある、一つはいふまでもなく、その容姿端嚴にして威あること、一つは昔から狩獵に用ひられ、所謂鷹狩として此の鳥が飼育訓練されて來たことに因る、鷹狩はしまひには一つの趣味的傾向を帶びるやうになつたが、その起りは、矢張人がその食糧を得る目的で、此の鳥を利用したのである、そして此の方法は非常に古くから行はれ、我が國では雄略天皇の御宇からであるが、外國では、更に古く、支那では西曆紀元前二千年頃から行はれ、印度、アラビヤ、ペルシヤでは、更にその以前から行はれてゐた、これは各所からの發掘物で知ることが出來る、なほマルコポーロの紀行文の中には、韃靼人の大汗は一萬人の鷹匠を宮中に養つてゐたことが記されてゐるし、ペルシヤにも王が鷹狩の歸途ある女を垣間見、これから悲劇を生む物語が傳へられてゐる。

鷹狩の流派　鷹狩といふものは、中々やかましいもので鷹飼、卽ち鷹匠が主に鷹のことを司つた、昔は朝廷にも主鷹司といふものがあり、鷹は持明院家で預ることになつて居り、その鷹を使ふにも流派があり、政賴流と諏訪流がこれを司る、政賴流は唐崎大納言政賴これを創め、諏訪流は福津神平これが祖となる、此の風は德川期にまで及び、明治維新後は、宮內省にこれが置かれて、鷹も飼養されてゐたのであるが、今は唯その技を傳ふに過ぎない。

鶴の御成　德川家では、屢々鷹狩を行つた、殊に八代將軍吉宗は、これを好み、鷹匠頭を置き、戸田勝房・間宮敦信をして之に當らしめ、千駄ヶ谷と雜司ヶ谷に鷹所を設け、毎年、晩秋初冬の候に、今日の瑞江方面に鷹狩を催した、これを鶴の御成といふ、卽ち將軍家の鷹が鶴を捕へるので、前田青邨氏の鷹狩は卽ち此の圖である、なほ昔は狩野家などでも、屢々此の鷹が鶴を捕へる處を畫いたものである、吉宗が此の鷹狩を好んだのは、鷹狩に事よせて民情を視察する爲めであつたといはれてゐる。

◇

鷹の種類　鷹には數種類ある、狩に用ひられるのは、蒼鷹で此の種は、鷹の中でも大形で翼長一尺あり、北海道、奧羽地方、津輕、南部の產が昔から優種とせられてゐた、鶴とか雁とか、鴨、五位鷺などを捕へるには雌を用ひる、雌のことをタイタカといひ、雄をセウタカと呼ぶ、縞は前種より小形であり、翼長漸く六寸から八寸、この種に限り雄を『コノリ』と呼ぶ雀鷹は最も小鷹で、翼長五寸五分から七寸二分、特に雌を、『ツミ』雄を悅哉『エッサイ』といふ、此の外隼、ちやうげんぼう、さしばなどといふ種類がある。

白鷹　白鷹は、別に特別の種類であるのではなく動物によくある白化作用であるが、白鷹は姿勢一層端嚴なので、珍種として昔から尊重されたので、從つて繪にも畫かれることが多かつたのである。

なほ鷹の名稱、『タカ』は猛き鳥の意であり摯猛を稱し、或は高く飛ぶといふことかちして呼ばれてゐるといひ、鷹といふ文字は、鷹を以て、敵を擊つ鳥の意、古語では『かしこどり』とも呼んでゐた。

◇

鷹の文學　今度は文學の方面を見やう、我が文學に現はれた處では、先づ『萬葉集』の鷹の長歌二篇を擧げなければならない、一は十七卷の『放逸せる鷹を思ひ夢に見て感悅して作れる歌』であり、一は十九卷の『白き大鷹を詠める歌』で、ともに大伴家持の作、その後の一篇を左に掲げる。

白き大鷹を詠める歌

あしびきの、山坂越えて、去き更る、年の緒長く、しなざかる、越にし住めば、大王の、敷きます國は都をも、此間も同じと、心には、おもふものから、語り放け、見放くる人眼、乏しみと、思し繁く、其ゆゑに、情和ぐやと、秋づけば、萩咲きにほふ、石瀨野に、馬だき行きて、遠近に、鳥踏み立て、白塗の小鈴もゆらに、合せ遣り、ふり放け見つゝ、憤る、心の中を、思ひ伸べ、嬉しびながら、枕附く、妻屋のうちに、鳥座結ひ、すゑてぞ我が飼ふ、眞白節の鷹。

反歌

矢形尾の眞白の鷹を屋戸に控ゑ掻き撫で見つゝ飼はくし好しも

と、白鷹を手に入れた氣持、その誇りけな心情流露してゐる。

定家卿の鷹三百首　短歌では定家卿の『鷹三百首』が有名であるが、この外の作にしても、大抵は鷹符に因むもので、自然觀象としての鷹の歌などは極めて少い。

あまたとしとやふむ鷹はましろにてかたたの草の露にこそふれ　祭主輔親

いかにせんとやての鷹のあふ事もまれなる戀にかゝりそめては　衣笠内大臣

山かへるあかけのたかのてなれても心おかるゝ君にもあるかな　民部卿爲家

いくかへり年は送れとはし鷹のましろはぬ身そ世をはうらみぬ　衣笠内大臣

などは、鷹にかこつけての戀や心の裡を詠じてゐるので、あまり面白いとも思はれない。それよりは、支考が『百鳥譜』の中に

蒼鷹の人を見こなして、眼の內に、あらゝかなる才智をそなへたる、いとにくしされど一藝に名あるものと、世の人それをゆるしもしつべし。

といふてゐるのは至言である。

『古今著聞集』には、面白い隼腹の鷹の話や、蛇を退治する熊鷹の話などあつて興味を唆るが、さて繪になるほどのものでない。鷹匠のまだ前髮の若者が、鷹を捧げ持つたる姿は、大津繪によく見る、何處か繪になつてゐるのが興味を唆る。

二二　鷲（わし）

鳥界の猛者　鷲は猛禽類の一つで、例へば獸類の獅子の如く鳥類の世界に君臨し、烱々たる眼光、鋭利な嘴、稜々たる劍の如き爪を備へて、威武八紘に振ふの概があり、將に鷹と共に鳥界の覇權を爭ふが如き感がある。啻に容姿が堂々たるばかりでなく、その翼は飽くまで強く、よく長途を飛翔し、爪嘴亦鋭くして、等身の敵を仆す、洵に鳥界の猛者である。

花鳥畫の一異彩　かうした勇猛な姿故、尙武の象徴として、よく昔から藝術にも現はれた、花鳥畫といへば、大抵は花と鳥といふ風に、優雅纎細な感じのする中に、太く強く鋭い線で、力の表現を主とした鷲などの繪の交ることも極めて興味ある事柄である。

鷲の名畫　鷲の名畫の中で、何といつても第一に思ひ浮べるのは東京美術學校所藏、芳崖の『鷲』である、この作は、芳崖が伊藤博文公に贈つたものであるが、將に豪氣堂々天下を呑むの概があり、芳崖の筆の力を遺憾なく發揮したものである、少し古くは、應擧にも傑作がある、吉田楓軒翁舊藏の衝立で、周到な寫生本意の作だが、活氣横溢、此の猛禽の氣魄を遺憾なく傳へてゐる、藤田男爵家には『枯木猛鷲』の大幅があつた古幹嵯峨たる樫の梢に猛鷲一羽何物かを狙つてゐる、その視線の向く方を見れば、そこには一頭の小猿が、

その勢ひに慄えつゝ潜んでゐる、若冲の筆は、一面かうした作にぴつたりとはまつてゐる。

林良の双鷲　支那の繪では、林良によい作がある、溪間の岩上に二羽の猛鷲相對する處を畫いたもので、林良獨特の覇氣があり、然も四圍の風物を描くに當りては非常な謹嚴ぶりを見せてゐる、これは高橋是清氏の舊藏であつた、一寸珍らしい作である。

◇

現代畫人の作　現代の人々の間にも、よく鷲は畫かれる、大作としては、橋本關雪氏の久邇宮邸御襖繪の『波に鷲』を擧げなければならない、巨浪濤に當つて碎くる處、猛鷲一羽、毅然として天の一方を睥睨してゐる、雄大な感じを懷かせるもの、又、氏が滿洲國皇帝に獻上した作も同構圖のものであつた。

岳陵氏の『荒天睨鷲』　中村岳陵氏には『荒天睨鷲』の作がある、第十一回日本美術院展覽會に出品したもので、荒天と題に示してゐるやうに、畫面の大部分を荒天の描寫に盡し、下の岩上に鷲を見せてゐる、規模極めて大きな構圖である。

希望氏の『黎明』　兒玉希望氏が第十五回の帝展に出品した、『黎明』は、同じく岩上に三羽の猛鷲を畫き、四圍の色調に黎明の氣分を表現せんと試みたもの、氏は更にその翌年、戊辰會に『劍翎鈎爪』と題して鷲を畫いたが、此の方は桃山風の豪華を狙ひ、屏風の金地を利用して裝飾風を加味し、出來榮は此の作の方が優れてゐた。

荒木十畝氏は、昭和十年の日本畫會に『鷲』の作を出品したが、覇氣横溢、遺憾なき筆の偉力を見せた。勝田蕉琴氏も、第十四回の帝展に『鷲』を出品した、これにはかなり大膽な筆を用ひて居たし、小泉勝爾氏が第十二回帝展の『濤聲』も『鷲』が主材であつた、なほ此の作に、第十五回帝展に於ける中西辨次氏の『鷲』江川武村氏の『天風』、橋崎鐵香氏の『催雨』などが擧げられ、橋本平八氏は木彫で『鷲』を製作し第十回の院展で好評を博した。

◇

萬葉の二首　文學の方面では、先づ『萬葉集』中の二首が思ひ浮ばれる。

澁溪の二上山に鷲ぞ子産(こむ)とふ翳(さしは)にも君が御爲に鷲ぞ子生むとふ　作者未詳

筑波嶺にかが鳴く鷲の音のみをか鳴き渡りなむ逢ふとは無しに　同

前の歌は越中國の歌であり、あとのは『鷲に寄す』と題した常陸歌である、前のは、子を産むといふことが主になつて居り、後者は鳴く音が問題であるが、何れにしても、鷲の勇猛などには及んでゐない、それから後の歌にも

しのぶ山こたちのおくにかふ鷲のその羽はかりや人にしらるゝ　前中納言定家

つれなさはつゆふりもせぬ鷲のはのやよなそかゝる心こはさそ　源仲正

ともすればとやなる鷲の尾羽きれて立出かたき世をなけくかな　民部卿爲家

人とほきみ山のわしもあはれなり誰にむくひのはねおとすらん　光俊朝臣

などとあつて、かうした勇猛な鳥にさへも、物のあはれを感じてゐるなど、よろづ感傷的な我が歌人の歌ひさうなことである。

俳句の鷲　俳句では冬の季題に入つてゐる、古人にはあまり句はないが、新しい人々の作にはいろ〳〵ある。

磯鷲はかならず岩にとまりけり　石鼎

は、皮肉にも、いまの鷲の繪を見るやうである。

大いなる古創顔にこれの鷲　誓子

何れ動物園あたりに飼はれてゐる鷲のことであらう。

鷲の眼に檻もあらじな空青き　木國

といふ風に、飼はれた鷲には眸を向けてゐるのであるが、

大鷲のいかり毛寒き嵐かな　吏登

といふやうな、自然の姿を吟じた作の少いのが遺憾である。

◇

鷲の種類　鷲は本州及び北海道に産し、九州でも見られる、邛馬溪を通ると、よく岩の上で、猿と鷲が爭

ふてゐるのを見かけることがあるといふ、昔は時に人など攫つたこともあると見えよく物語にあらはれて來る、良寛禪正の物語など好い例であり、『今昔物語』や『日本靈異記』などには、いろ〳〵の傳說を載せてゐる

種類は、犬鷲、尾白鷲、大鷲、禿鷲などがある、此の鳥は雄よりは雌が形大きく、姿が飽くまで獰猛である。犬鷲は形が大きく、頭から後頭にかけ柳葉狀の羽毛がある、嘴が他種よりやゝ小さい、大鷲は、名に似合はず、犬鷲や尾白鷲より小形で、羽毛の所々白色部があり、殊に肩の白羽毛が著しい、尾白鷲は名の通り尾羽が白い、禿鷲は嚴密にいへば、科を異にし禿鷲科に屬してゐる、動物園に居る『コンドル』に類し、頭部が禿げて裸出し、嘴も大きく、形は他種よりは醜い。

何れも猛禽類中の猛者で、小獸や禽鳥を捕へて喰ふので、他の鳥類などからは惡魔の如く怖れられてゐるのであるが、かうした猛禽類でも生存競爭の上からは、寧ろ敗者の方で、年々に種族が減つて行くといふ、それは多く食餌の關係であらうと思はれる。

繪に畫かれのは、尾白鷲が多い、時に朝鮮大鷲を見ることもある、植物を配する時は、松檜のやうな常綠植物が多いが、一番多いのは岩上に翼を休めてゐる姿である。

二三　鳶（とび）

古畫には少い鳶　鳶が盛に繪畫などに描かれるやうになつたのは、あまり古いことではない、古畫などには滅多に見られないし、これを主題として畫いた作なども、昔の繪にはあまりない、處が近頃はよく鳶が繪の中に現はれて來る、殊に昭和九年の帝展には、珍らしく鳶の畫かれた作が多かつた、先づ大高爲山氏の、『鳶』これは海濱に餌を漁る鳶を畫面一杯に畫いた、この作隨分克明な寫生であるが、尾羽の形が違つてゐた、それから中川正次氏の『鵄』、これは雪の野に二羽の鳶を畫いたもので、一羽は翔り、一羽はとまつてゐる、此の方は尾羽の形もよく自然に近かつた、唯、雪の中の雜草の形があまり整ひ過ぎてゐた、次が土岡春郊氏の『鳶』で、松の梢に一羽の鳶がとまつてゐる、これは、昔よく描かれて松上の鷹を思はせるやうな構圖で、枝に巢があつて雛の居る處が他と變つてゐる、今尾景春氏の『しぐるゝ朝』には、水澤の杭の上に鳶が一羽、烏が二羽描かれてゐる、如何にも時雨るゝ朝の感がよく出て居り、鳶の形にも難は無かつた。

栖鳳氏の鳶　これより前の作を擧げると、大正十四年秋淡交會の第二回展覽會に、竹内栖鳳氏がこれを出品してゐる、この作は、枯木に二羽の鳶がとまつてゐる處を描いたもので、例の洗練された筆致を以てよく靜止してゐる鳶の姿を寫してゐた、飛んでゐる鳶を畫いたものでは、その前年の大正十三年、日本美術院第

十一回展覽會に鄕倉千靱氏の『蒼空鳶之圖』がある、これは、大空に二羽の鳶が舞つてゐる處で、栖鳳氏の作とは反對に羽毛の描寫など、極めて克明なる寫生的筆致であつた、相對する意氣組もよく評判の作である。當時中村岳陵氏の作にも空に舞ふ鳶を畫いた作があつた。

龍子氏の『舞扇』　近い處では昭和九年春の日本美術院試作展に、奥村土牛氏の『鳶の圖』があり、同年六月川端龍子氏の個人展覽會、『富士を周りて』の中に、『舞扇』と題し、薔薇色の富士の前に、翼を張つて舞翔る鳶を畫いたのが非常に評判であつた、此の『舞扇』は、四扇と題したもの〻一つであつて、四扇とは、右の鳶を春とし、石楠花の花を前景とした富士を夏として『華扇』と題し、秋は山葡萄の紅葉から富士を透し見たもので『紫扇』と題し、冬は『白扇』と題して、空林枯木の間から雪の富士を仰ぎ、これに二羽の『えなが』が飛んでゐる處を畫いた、如何に此の作者の才氣煥發で縱横無盡なる取材の廣いかゞ覗はれるものであつた。それから昭和十年秋の珊々會の西村五雲氏の『砂丘』も鳶の大作であつた。

◇

鳶の尾の形態　かうして擧げ來つた鳶の作品を見て、何れもよくその特長を摑んでゐるのは眼と嘴である、烱々たる眼光、鉤の如き鋭い嘴、鳶色といふ色彩の名にまでなつてゐる羽毛、それらは大抵間違なく描けてゐる、だが問題となるのは尾羽の形である、以上の中で、鄕倉千靱氏の描いたものは最も自然に近く、尾羽の先が凹んでゐる、處が奥村土牛氏のは、それが扁平で凸凹が見えない、これは空中を飛翔してゐる處を見ると、凹みが見えず扁平にも見えるものであるが、正しくは多少の凹みあるものである、處が大高爲山氏の鳶となると、全く正反對に、却つて尾羽の先が、中央外へ凸出してゐる、これでは全く自然の鳶と別物である。鳶を畫くもの〻心すべき點である。

◇

都會の猛禽　鳶は鷲鷹科に屬する猛禽類であるが、鷹や鷲が深山幽谷に棲息するのとは反對に、都會地に棲息したり、海濱などに徘徊する、廣重あたりの風景板畫を見ると、よく大江戸の市街の上を飛ばせてゐたり、時には町を歩く丁稚や女中が、手に持つたものを攫はれて、呆然と空を眺めてゐる漫畫氣分のものなどもよく散見する。

海邊の鳶　海濱にあつては、魚類の死屍などを漁つてゐるのがよく目に殘る、體の上面は所謂鳶色で、微かに紫色を帶び、頭部の羽毛も軸が黑くして先端赤褐色を呈し、形細長く柳の葉のやうである、翼の雨覆羽は、先が黄白色で、風切羽は黑褐色、内の基部に白い部分があるので、翼を擴げた處を下から見ると、此の白色の部分が著しく目につく、尾は既にその形狀を記した通り、羽にはあまり明白でない横帶がある、日本に於ては、千島から南、沖繩まで到る處に棲息し、臺灣にも鳶が居るが、これは『ひめとび』と稱し、亞種を異にすとは『日本動物圖鑑』の記す處である。

『三才圖會』の鳶　寺島良安の『和漢三才圖會』を見ると、いろ〳〵面白いことを記してゐる。その名稱は鴟

といふ文字で呼び、『止比』と訓じ、梵書には『阿黎耶』といふと記してある、さて本文は

本綱、鴟、似レ鷹而稍小也、其尾如レ舵、極善翔、專捉二雞雀一、其攫レ物如レ射

三才圖會云、鳶鳴則將レ風、朝鳴卽大雨、暮陽卽小雨

酉陽續集云、相傳鴟不レ飲二泉又井水一、惟遇雨濡レ翮、方得二水飲一

按、鴟狀似レ鷹而赤黃色、羽毛婆々而尾如レ披レ扇、其尾羽亦造二箭羽一、名二之鐵鳶羽一、最下品也、脚灰青色爪黑、風吹則高飛舞、每捉二鳥雛猫兒等一、或攫二人所提携魚物豆腐等一、總鳶鴉有レ害無レ益而多有之鳥、爲人所憎也、然俗傳曰、愛宕之鳶、熊野之烏以爲二神使一、未知其據也、鳴聲如レ曰二比伊與呂與呂一、朝鳴雨、暮鳴卽晴。

と、『三才圖會』では、『鳶が鳴けば風が吹き、朝鳴けば大雨、暮に鳴けば小雨』とあるのに比し、良安は、朝鳴けば雨、暮に鳴けば晴といふてゐる、かうした言ひ傳へは、その鳥の習性に何等かの關係があるので、此の方面を仔細に研究したならば、面白い事實を發見するかも知れない。

それから、良安はまた、鳶烏共に害あつて益なき鳥と貶してゐる、併し、鳶は、好んで野鼠を捉へて食べるので、此の方面では決して無益の鳥と貶し去ることは出來ない。

◇

宴席の品を捘ふ話　鳶に就いて、なほ興味を唆ることは、物を捘ふといふことである、日尾耕山の『燕居雜話』に曰く。

宋蔡絛が、鐵圍山叢談に云、都下飛鳶至多、而大內中爲レ最、每集英殿下、燕則飛鳶動、千百爲群、翔二舞庭中一、百官燕食至則多爲所レ掠、故事遇二燕設一、乃於二隣殿一、置肉以賜レ鳶、後稍々得引去、然猶多有レ之也、周官射鳥氏、賓客會同、以二弓矢一毆二烏鳶一、則鳶之善鈔盜有二自來一矣、今乘輿在レ御、又鳶飛既衆、是弓矢有二不レ可レ毆之者一、故賜二鳶肉一、乃出二本朝一、等不レ知二其始一、竊謂、儻非二仁廟之至仁一、必繇二祖宗之聖智一矣とあるを見れば、鳶の物をさらふこと、和漢同日の談にして、彼此よりはなはだし。

と、宴席の食物を捘ふに至つては、全く言語の外である、日本の鳶はそれほどではない。

鳶の珍話　同じ物を捘ふにしても、岡西惟中の『一時隨筆』の記す處は餘程變つてゐて面白い。

むかし、ある國のやまざとの古木に、鳶の巢有り、ひとりの若もの、竊に巢をさぐりて子をとる、しばしありて鳶忽來、あるもの〻頭巾をつかむ、しばししてかのあたまの上に返す、ある日の暮に、巢をりしもの〻頭巾をつかみ、剩、糞をたれて去る、この鳶はじめあやまりてつかみし頭巾を悉なく返したる心、誠にあやまりてあらたむるの道歟、尊とき有さまいふも更也、世の人義理をしらず、非をなしてあらたむる事なき類ひ、鳶にだにしかざるべけんや、たしなむべきは義理也。此の事、鷹のことにして鶴林玉露のうちに見えぬ。われいまだ忘れがたく侍る。

これは聊か道話めいては居るが、一寸面白い。

鳶と雀の緣　西村白烏の『煙霞綺談』にも、珍らしい話を載せてゐる、曰く

鳶の巢に、雀、巢を作つて同居し、又烏の巢の近所必らず鳩の巢あり、鳶烏は常に諸鳥の巢を探して害を爲すに、近きには其の碍なきは未審な事に思ひて、里の童にたづねたれば、鳶も烏も嘴鋭くして卵の殼をやぶるに其雛を疵つけ殺す、ゆへに鳶は雀を扈ひて貝割の危難を逃れ烏は鳩の子鳥姥にまかせて、後產の滯なしと始めて聞侍るまゝに此にしるす。

と、これもその習性を細く調べたら、何か得る處がありさうである。

古事記の『金鵄』　鳶に關するものとしては、『古事記』の金鵄が何といふても有名であり、建國日本を象徴するものとして、此の鳥の位を高くしてゐるが、此の外には餘り見當らない。鳶が愛宕の使といふことは、矢張り此の金鵄から出てゐるので、大朏東華の『齊諧俗談』には次のやうに記してゐる。

天人熊命化して三軍の幡となる、その後、神武天皇、長髓彦と戰ひたまひて勝たまはず、時に金色の鳶來つて天皇の弭に止る、其かたち流電の如し、因て敵軍みな迷眩す、天皇よろこびたまひて曰、いづれの神ぞ、奏して云、天照大神の勅を奉り、鳶に化して來る、吾此國に住て軍戰を守らんと、また問たまふに、何の所にか住むと思ふ、奏して云、山背國怨兒(あたこ)の山に住べしと、因に其山に住せしめ天狗神を領せしといふ。

また、鳶に關する傳說として、『雜說囊話』の記す處によると、鳶が人の頭や顏に糞をかけると、その人必らず災に遭ふ、その時は酒を以て洗ふ、又、鳶の巢を毀すと、其家必らず火災に遭ふと、此の書の著者は、二度までその實例を見たから疑ひなしと獨りで極めこんでゐる。

◇

鳶と文學　文學の方面を見ると、古歌などには餘り見當らない、『夫木鈔』には

鳶のゐる井杭の柳なはへして芽ぐみにけりな春を忘れず　仲正

があるが、これも鳶の歌ではなく柳の歌である、併し、新しい方面では時々目につく。

一うねの青菜の花の咲きみてる小庭の空に鳶舞ふ春日　正岡子規

梅ばやし野分の跡のあかるきに吾立ち見れば鳶高く飛ぶ　伊藤左千夫

草井戸にすゝぎし居れば朝な朝な鳶長鳴けり山の上の家　久保田不二子

著者にも愚作がある。

里神樂の笛の拍子の一ふしを高鳴きつゝも鳶舞ひ翔る

大空にいくつ輪を描き舞めぐる鳶の翼の下に富士見る

俳句には、春の季題に『鳶の巢』があつて、

鳶の巢としれず梢は　鳶の　聲　北枝

などの名句があるが、この外、鳶の讀みこまれた句は隨分ある。

初秋やこゝろに高し　空の　鳶

などは將に、鳶の天空高く飛ぶ光景を寫し得て妙である。

鳶の輪の崩れて入るや　山　樓

これは丈草の句、その空に輪を描きながら舞ふ姿を立派に詩化してゐる。

二四　木　兎（みみづく）

夜の猛禽　木兎は梟と共に梟鴟科の猛禽類である、鷲や鷹も猛禽ではあるが、これは晝の中に、小動物や小禽などを捉へるので晝猛禽と呼ばれ木兎や梟は、夜その猛威を逞うするので夜猛禽とされてゐる、木兎の文字を見ると、樹木の上に棲息して、兎のやうな羽角があることを示し、『みみづく』も亦、耳羽といふて、此の羽角を特長としてゐるのであるが、嚴格にいへば、木兎といふ中にも、『青葉木兎』のやうに羽角のないものがあり、梟の方にも羽角のあるものがある、併し、こゝでは、極く一般的な區分法に依り、羽角のある木兎の方に就いて記して置く。

古書の描いた形態　木兎は、此の文字の外に鴟鴞とも書き、恠鴟、角鴟、夜食鷹、鈎鴞などといろ〳〵の名があり、雚とも書く、雚といふのは、兩耳を立てゝゐる此の鳥の形から來てゐる。『本草綱目』に依ると

鴟鴞大如鳴鷹、黄黑斑色、頭目如猫、又如老兎、有毛角兩耳、（故名雚也雚字象形）晝伏夜出、鳴則雌雄相喚、其聲如老人、初如呼後如笑、所至多不祥、夜能拾蚤虱、鴟鴞之小者爲鴞鶹。

寺島良安は、三才圖會に於て之に加へ曰ふ

按木兎（日本紀用此二字）大如兄鶏而全體褐黑色、有白彪似豆者、臆胸亦同色、横有白彪相亂似蛇腹文、頭目如猫目、外作白圈、眼中黄赤、而能旋轉、毛角有小點彪似胡麻、其下有耳穴、怒則毛角竪起一寸許、脚黄赤脛短有毛、謂之傳毛、似矮雞之脛、爪勾利其啄下短上長勾黑、不能遠飛、夜出搴小鳥、啄聲似梟而短、連聲如曰甫伊甫伊、其尾短十二枚、表之幽微裏又鮮明、畜之爲囮縫閉眼、繫架頭側設羅櫞、則諸鳥來集噪々猶笑木兎盲目形而罹羅櫞者不知數、以不勞捕鳥人賞也。

顔盤の特徴　『頭目猫の目の如く、白圈を作す』といふのはよく觀察して居る、此の白圈といふのは眼の周圍の隈であるが、これを動物學上では顔盤と稱へてゐる、それから、此文には記して無いが、脚の指四本の中、外指は自由に回轉することが出來る、これも此の鳥の特長の一つである。

◇

その種類　日本に産する『みみづく』の種類は、梟と稱するものを別として、虎斑木兎、小木兎、木葉木兎

青葉木兎、魚木兎などがあり、木葉木兎も、琉球、朝鮮、臺灣と產地に依つてその地名を冠し、大きなものには、更に大の字を冠して居り、小木兎にも二種ほどある、魚木兎は臺灣のみ產するもので、魚や蟹を捕食するので聞えて居る、一般には木の葉、虎斑が知られて居る、虎斑は耳が長いので、繪などに畫かれる時は大抵これである、木の葉木兎は、近頃、佛法僧と鳴く鳥の正體が此の鳥であることが知られて、一層有名になつてしまつた。

青葉木兎の聲　青葉木兎は、他の種類とは多少趣きを異にし、眼光は相應鋭いが耳もなく、顏盤も明かでない、冬は南洋方面に渡つて行き、四五月の青葉若葉の頃再び本邦に歸つて來て、ホーホーと鳴くので此の名がある。虎斑木兎は、他の種類が多く夜活動するのに、この種丈けは晝間も往々人の眼に觸れる、野鼠などを好んで捕食するので、非常に有益な鳥である。

巢と雛と　その巢は樹木の洞穴や、岩石の間隙などに營み、二個から十個位までの卵を生む、雛は初めは白色であるが、だん〳〵と色がついて行く、その雛を育むさまは如何にも愛らしい、木兎類の食餌とする處は、野鼠のやうな小獸昆蟲爬蟲類、少數の鳥などである。

◇

木兎の歌　文學の方面を見ると、あまり豐富でない、『夫木集』に、土御門院御製の

あしびきの山深くすむみみつくはうき世のことをきかしとや思ふ

の一首と、光俊朝臣の

山風にならの葉かしは音たかしすむみみつくもききやおとろく

の二首があるが、これは珍らしい、『拾玉集』には

いほりさすかそやまぎしのみみづくもいかか聞きなす峰の松風

がある。

俳句の木兎　俳句ではこれを冬の季題に入れてゐる、その理由は『栞草』の

古抄は秋の部に入れたれど渡鳥にもあらず、色鳥にもあらず、まして鳴聲の物凄きは寒さを賦へるゆゑにとや、決して冬と定むべし

といふのに基いたのであらう、句では

みみづくやうき耳ありと山の奥　也有
木兎なくや人の人とる家ありと　一茶
みみづくの頭巾は人に縫せけり　其角

など面白い。

木兎曳　秋には『木兎曳』が季題になつてゐる、木兎の眼を縫ひ架上に繫ぎ側に樅(はと)を置いて諸鳥を誘き寄せ擬にかける、これは一寸面白いもので、古く抱一にその作があり、木村武山氏にも、これを畫いた作がある

◇

一休の畫賛　木兎を畫いた作は、古來澤山あるが、その中で、一休禪師に『木兎畫賛』があり、これは珍らしいものである、賛に曰く

腐鼠無端嚇鳳凰、鴟鴞何事噪忙々、小人交會也如此、看畫前知亡國殃。

と、如何にも一休らしい、德川家光公にも『木兎』の作がある、松浦家の舊藏であつた。

現代畫家の作　現代の人々では、曾て横山大觀氏が第九回院展に『夜』と題して、竹林に木兎を畫いたが間もなく荒木十畝氏も讀畫會展覽會に竹林の『木兎』を畫いた、前者は纖月であり、後者は滿月で、兩々相比較すると、それ〴〵に特長があつて中々面白い。

小虎氏の作　川崎小虎氏も木兎に興味をもち、これまで數回これを畫き展覽會にも發表してゐるが、特に雛に興を催らしてゐる、堅山南風氏も第二十一回の院展出品『射翠帖』の中『斜陽』と昭和九年院同人作品展覽會の『おぼろ』等で木兎を畫いてゐるが、此の『おぼろ』には木兎の飛翔してゐる處を畫いたのが珍らしい。

此の外、川端龍子氏は個人展覽會に、暮色と題して櫛の木と木兎を畫いて居り、橋本關雪氏の作にも『おぼろ』と題した木兎の作がある、十四回帝展に、堀田秀叢氏の『薄暮』と題した作があつたが、これは栗の木の洞に雛を育む木兎を畫いもので、寫眞からの實寫であつた、昭和十年秋の東京會展には、森白甫氏が『月』と題して之を畫き、十五回帝展には、飛田周山氏が、『明暉』題下に、松上の木兎を畫き、月光を配して莊嚴な光景を畫き山口蓬春は六潮會に山櫻と木兎を畫いてゐた。

二五　梟（ふくろう）

木兎の姉妹鳥　梟は、木兎と同じ梟鴟科の猛禽で、動物學上からは、別に區別は立てられてゐないのである、唯古來の慣習に從つて、羽角のあるのが木兎で、無いのが梟といはれて來た、併し實際には羽角のある梟も居るわけで此の區別は正しいものではない、だが古い慣習で、何處となしに感じが違ふ、そこに藝術上や趣味の上の興味も繫がれるわけである。

島の眷族　梟には普通種の外に、南支那や臺灣に棲む大梟があり、伊豆から九州に多い九州梟、臺灣特有の面梟、朝鮮梟、高砂梟、特に面白い白梟などがある、普通種の梟といふのは、本州のみに產し一般に知られてゐるもの、白梟は北極圈をめぐる地方に繁殖し、冬になると北海道から本州の一部に出現する、名の通り純白で、これに褐色の細かい斑紋がある、なほ此の外、北海道特有の蝦夷梟、形の小さい姫梟、金面梟などといろ〳〵ある。

生態や習性、それは總て木兎と大した差はないが、羽角がなく顏が圓いので、如何にも愛嬌がある、そこで、古書に見える顏鳥、箱鳥といふのも梟ではないかといふ說さへ起つてゐたわけである。

◇

傳說では親不孝な鳥　かうした愛嬌のある、又、野鼠だの他の害になる動物を捕食してくれる有益な鳥ながら昔から妙な傳說に祟られて親不孝な鳥といつて嫌はれて來たのである、その出所は、『本草綱目』に

梟、狀如二母雞一有二斑文一、頭如二鴟鴞一目如二猫目一其名自呼、好食二桑椹一、其少美好而長醜惡、盛午不レ見レ物、夜則飛行、不能遠飛、長則食二其母一、不孝鳥也、故古人夏至磔レ之、梟字從鳥首在二木上一、北方梟鳴人以爲悪、南方晝夜飛鳴、與鳥雀不レ異、家々羅取使二捕鼠鼠一以爲勝猫也。

孟康三、梟母レ食、破鏡食レ父、破鏡者如レ貙而虎眼獸也。

とある、母を殺した爲めこれを磔とし、首を木にかけるので梟の字を以てするのであると、こゝにいふ父殺す貙といふのは、五爪の虎であるとの事である。

梟の鳴き聲は、ホウホウと聞えるのであるが、これにも古い言ひ傳へがあつて、將に霽れやうとする時には、『乃利須里於介』と聞えるし、將に雨が降らうとする時には、『乃里止利於介』と聞えるといふ。

◇

山家集の梟の歌　文學の方面を見る、和歌では『山家集』の

山ふかみけぢかき鳥の音はせでものおそろしきふくろふの聲

は、餘程この聲を恐ろしく聞いたと見える、これは『寂然かもとへつかはしける』十五首の中の一つである。

物思へば木たかき森にふくろふのくるしきかともとふ人そなき　寂蓮法師

これは、梟の聲を同情を以て聞いてゐる。これが新しい歌人の作となると

肩の凝り朝宵は癒えず獨居て梟の鳴くをやすけくし思ふ　米川稔

といふ風になつて來る。

梟の句　俳句では、形が面白いので、いろ〳〵に觀察してゐる、『改造社版歲時記』の例句には

梟よ松なき市の夕あらし　其角
梟のむく〳〵氷る支度哉　一茶
梟の眼に冬の日午なり　子規
大きな眼二つ晝けは梟哉　月斗

など擧げてゐるが、どれも面白い。

俳人の觀察としては、支考の『百鳥譜』の

梟の晝出て、まよひありきぬるいとおかし、かならず笑はれじと、はたらきたる顏にもあらず、さるたぐひの老僧にや、むかしも市中にあそびける也。

とあるのが面白い。

◇

梟の繪　繪畫に現はれたものでは、古畫には餘り見えず、中期で、永暉に『枯木梟圖』がある、沈南蘋の筆意を模したといふ横物で、いつも程秋暉の癖の出て居らぬのを擧ぐべきであらう、抱一にも同じ畫題のものがある、これはもと大澤百花潭の所藏であつた、贊あり曰く

夜が明けたらはゆをわかそふゆかわいたらは茶を立てよふ

と如何にも面白く抱一らしい趣向である。

小虎氏と秋光氏の作　第十五回の帝展には、二つの梟の作が現はれた、一は川崎小虎氏の『森の梟』で、二曲半双、カンヴアスに洋畫風の筆致で、面白く梟を扱つてゐる、雛の描寫が殊に興味を唆つた一つは吉田秋光氏の『梟』である、これは山櫻の上に一羽の梟を描いたのであるが、薄暮の感じがよく出てゐて興が深いし、また櫻との對照も何かの暗示を與へてゐた。

◇

京都清水觀音の盥盤の下に梟の彫刻があり、そこから水が出てゐる、梟の水と稱して名物となつてゐると古書に記してある、今日果して殘つてゐるであらうか。

二六　櫃鳥（かしどり）

かけすの名　櫃鳥は俗に懸巢とも呼ばれてゐる、姿もよく人に知られて居り、鳩より少し小形で、頭が白くこれに黑い斑點が散布し、後頭部は羽毛やゝ長く眼の周圍は黑色で、背は葡萄褐色に灰色を加味し、腰の下部から上尾筒は白色である、翼の雨覆は赤褐色だが、その一部は黑と白と藍色で美しい縞模樣となり、この鳥の著しい特長となつてゐる、尾は深黑色で、全體の色彩の調和が極めて面白い。

笛畝氏の『巢ぐるみ捕へて』　かうした特長のある色と姿とは、繪畫の題材としても極めて趣きがあるので近頃此の鳥を描いたものが甚だ多い、近い例では、第十四回の帝展に好評を博した西澤笛畝氏の『巢ぐるみ捕へて』がある、木の枝を組合せて作つた巢には、巢立つたばかりの雛が親に餌を求めてゐる、親鳥はその巢の上に居を占めて周圍の光景に氣を配りながら雛を育てゝゐる、母性愛をよく現はした作で、構圖も非常に面白い。

桂月氏の『秋晴』　松林桂月氏は同じ年に『秋晴』を出品した、これは山葡萄の葉が紅葉して老木の幹にまつはる處、その老樹の枝には一羽の櫃鳥が居て何ものかを凝視してゐる圖で、櫃鳥の色彩と山葡萄の紅葉、その間を綴る松や竹が、彌が上にも此の畫面を美しいものにしてゐる。

榊原紫峰氏も亦よく樫鳥を畫く、鋭い感覺を以て此の鳥を畫面の上に拉し來り、よく生動活躍せしめる、その畫集の中に收められた『懸巣鳥』にしても、栗の木に此の鳥を配した作にしても、實によく寫生が行屆いてゐる、川端龍子氏も時々これを畫く、昭和五年の個人展覽會には、花鳥十二ヶ月を畫き、その十月『朗秋』の題下に櫛の木とこの鳥を畫き、八年の個展出品『山楓四題』の中、『青嵐』にも樫鳥が活躍してゐる、この外小室翠雲氏の『銀杏樫鳥』、眞道象明氏の『櫛に樫鳥』、宇田荻邨氏の『溪間』、森白甫氏の『綠蔭』、皆この鳥が主になつてゐる。

◇

兪曾の『桂花樫鳥』　古い處を擧げると、兪曾に『桂花樫鳥』の作がある、福井侯松平家の舊藏で、中々の密畫、支那人の作には餘り樫鳥は畫かれてゐないが、此の作の如き珍らしいものである、應擧は時々これを畫いた、說田家舊藏の『石榴小禽』の如き注目すべき作といふべく、細川家には『紅葉樫鳥』の珍らしいものもある、更に狩野家では、松榮に『梅に樫鳥』の作がある、帝室博物館の所藏で、松榮一流の筆致であり、狩野家のものとしてはこれも珍らしい方である、文晁には『竹に樫鳥』の作があり、奔放な中にも鳥の姿は、一糸紊れず整つてゐる。この外、秋暉にも『石榴樫鳥』の作があり、秋暉一流の達者さを見せた。

樫鳥と風物　かうして樫鳥の繪に描かれる處を見ると、多く紅葉に配したり、櫛の木に添へたりして秋の季節が多くなつてゐる、これは此の鳥が盛夏の候は深山にあつて繁殖を營み、秋になると人里近く群を爲し

て現はれて來るので、自然人の目に觸るゝことが多く、それが繪畫化されて來るわけである、その名の樫鳥といふのは、樫の木を好み巣を懸け、その實を啄むといふ處から來てゐるのであるが、栗や團栗の實も好みよくこれを啄み去つて土中にかくしたりする、これは樫鳥の著しい習性として知られてゐる處である。

それから此の鳥は性が中々怜悧で、よく他の物音を眞似たりすることも有名である、それが自然籠鳥としての愛嬌のあるものとなつて、古來人々に愛せられてゐる、昔は大晦日に商家では此の鳥を食べたものだがこれは樫鳥が貸取りに通じ、集金の幸先を祝つたわけであるが、勿論味などよいわけではない。

◇

その種類　樫鳥は鳥學上からは鴉科に屬してゐる、本邦では到る處見られ人々には馴染の深い鳥である、種類は普通種の樫鳥の外に、『深山かけす』『赤尾かけす』『屋久島かけす』『高砂かけす』『瑠璃かけす』などがある、此の中で、『屋久島かけす』はその色彩形狀、殆んど普通種に彷彿としてゐるが、全體が一層色を濃くした形である、これに反し、『深山かけす』は普通種の白い處が茶褐色であるから、それだけ色が複雜になつてゐる、これは北海道に限つて棲息するものである、『高砂かけす』は雨覆の色彩は同じであるが、頭部の色彩が全然違ふ、白地に黑の斑點がなく、葡萄褐色を淡くした無地である。

珍鳥瑠璃かけす　瑠璃かけすといふ一種がある、これは奄美大島に限り棲息するもので、頭部から體の上半が美しい瑠璃色で、他は褐色、咽喉の處に白い斑點がある、樫鳥の中では、最も美しい色彩を有するもの

昔は此鳥、羽毛の色の美しい處から帽子の飾りに供すべく濫獲せられ、危く奄美大島にもその種族を絶たんとしたので、今は天然記念物として保護されてゐる、椎の實を好んで食べ、その巣も椎の枝などで作るといふ特長をもつてゐる、分布は奄美大島から德之島に及んでゐる。

◇

櫨鳥の文學　文學の方面から見ると極めて貧弱である、俳句の方では、秋の季題に加へられて、古來有名な句もあるが、現代の他の文學などからは殆んど顧みられてゐない、古句の中で

櫨鳥に杖を投げたる麓かな　其角

は、山など旅してよくかうした氣持になる、谷川の水が直ぐその耳もとに響いて、滴るやうな七葉樹の葉かげなどに櫨鳥の類を認めるといふ處である。

かけす鳴けば山越す頃と思はれよ

これは乙二の句、矢張旅の思ひ出である、人里近くに此の鳥の聲を聞くと、一層望郷の念が高まつたりする

著者は昭和十年の秋、紅葉を分けて碓氷峠を熊の平に下つて進んだが、その途中、紅葉の中に此の鳥の飛び交ふのを見て何ともいへぬ美しさに打たれた、そして古の巨匠が、かうした境地を畫いたことの決して偶然でないことをしみ〴〵と悟つた。

わが宿の背向に立てる櫨の木に櫨鳥來鳴く頃ははや來ぬ　田安宗武

二七　鷺（さぎ）

鷺の名畫趙仲穆の柳鷺　鷺の名畫といへば、先づ第一に京都西本願寺藏、傳趙仲穆筆の『雪柳群鷺圖』が目に浮ぶ、水邊に臨む柳の老樹は、幹も枝も雪を戴き、根際の笹も重たげに雪に蔽はれてゐる、此の雪柳を中心に、九羽の白鷺が、或は餌を漁り、或は空に翔り、或は岩上に憩ひて羽並繕ふもある、その構圖整然として一糸紊れず鷺の姿態も寫生の堂奥に入つて活けるが如くである、誠に鷺の名畫中、隨一に推すべきもの、筆者趙仲穆は、趙子昂の第一子で、花鳥をよくし、山水も董源に學んで一家の風を成す、その官は集賢待制又知湖洲總官府事に到つた、將に元代に於ける代表的名畫である。

牧溪にも芦鷺の傑作　牧谿にも有名な『芦鷺』の傑作がある、これは東山御物の一つで、幅一尺五寸餘、縦三尺五寸八分、紙本で隈描きにより白鷺二羽を畫き、筆勢雄渾なる蘆葉を點じ、下方僅かに土坡を見せてゐる鷺の冠毛の畫き方、嘴の線など妙味いふべからず、素晴しい作である、これはもと、越前松平家の襲藏であつた。

徐熙の作　徐熙にも有名な作が二三ある、一は江戸の藩家青地家に傳はつたもの、『雪中柳鷺圖』で、雪の積つた枯木の上に一羽の鷺が片脚で立ち、片脚をかがめ、何物かを凝視してゐる、雪に粧はれた枝が二三點出

されてゐる、たゞこれだけの構圖であるが、此の鷺の姿態が端嚴冒すべからず、一種の宗教畫を見るやうな感じを覺える、一は神戸の川崎家舊藏の名幅で、『寒汀雪鷺』である、二羽の白鷺はともに水中にあつて、一は獲物を狙ひ、一は彼方を凝視してゐる、雪の積つた蘆葉蘆花には、かなり大膽な筆が使はれ、鷺の筆致も前者と全然異つた手法を用ゐてゐる、面白い作で、これを對照すると、後世の諸家が鷺を畫くに至つて影響するところの少からぬを思ふ。

呂紀の作　呂紀には、花鳥の密なものが多く、鷺もよく畫いてゐる、然し前に擧げた作などゝは、まるで變つた狙ひ方で、例へば、越前松平家舊藏の大幅の如きは、絢爛華麗なる牡丹に鷺を配してゐる、これなどは餘り類を見ない配合である。

顧德謙と惲南田　この作のやうな密畫で、印象の深いものは井上侯爵家舊藏の顧德謙筆『蓮鷺圖』である、この作は蓮池水禽と双幅を爲してゐるもので竪四尺九寸七分、幅三尺の大作であり、蓮池に二羽の白鷺を描いてゐる、一は高く翔り、一は水中にあつて上を仰ぐ、蓮花は既に盛りを過ぎて、蓮瓣片々として舞ひこぼれ、上には紅蓼を配し、水面には水車前（みづおばこ）が浮いてゐる、この白鷺、餘り繪に畫かれてゐない中鷺の方を寫してゐるのが非常に珍らしい。

惲南田にも蓮鷺の名作がある、著者の見たのは、高橋是清翁の舊藏で、蓮を手一杯に畫き、その下に鷺を張り餌を狙つてゐる白鷺二羽を點出してゐる、惲南田一流の精緻な筆、加ふるに氣品も高く、鷺の氣組も非常に緊張した出來であつた。

◇

雪舟の花鳥屏風　我が國のものでは、先づ雪舟の花鳥圖屏風（大橋新太郎氏藏）左半双の一隅に畫かれた白鷺が逸すべからざるもの、水邊に向つて飛翔してゐるところであるが、その形が如何にも活躍してゐるので後の作に此の姿態を借り來つてゐるもの極めて多い。雪舟で著者の眼に殘つてゐるのは、もと大澤百花潭氏所藏、中觀音、左右芦鷺の三幅對である、これは白鷺ではなく五位鷺であるが、筆致の雄勁、略筆の妙、然も鷺はよく活躍して寸分の隙もない、これに遠州が箱書をしてゐる有名な作である。

雪村には、松方公爵家に傳へられた『柳鷺』の横物がある、八幡名物の一つで、柳の線の妙と白鷺の姿の美しさと、共に忘るゝことの出來ぬものである。

狩野派の人々　狩野派の人々には鷺の作が殊に多い、就中元信は鷺の名手であつた、世に元信の鷺と傳へらるゝものの中には、中々よい作があるが、殊に秀でゝゐるのは、越前福井の松平家に傳へられた『蓮鷺圖』である、此の圖は下に水墨で蓮葉と、既に實を結んで瓣の四散し僅かに六瓣を殘した花を描き、上に白鷺が一羽翔つてゐる、此の描法は隈描きで、淡墨の隈で白鷺を殘し、これに羽毛の線を加へたに過ぎない、此の隈描きは、更に片刷毛を使ふやうになり、探幽あたりで、その技巧が極致に達してゐる、此の元信の作で面白いことは、鷺の姿が、前に擧げた雪舟の花鳥屏風に一寸似てゐて、元信は一層それに寫實味を加へてゐるこ

とである、兎に角、此の蓮鷺は、畫品といひ構圖といひ、間然する處なき名作である。

元信は此の圖が餘程得意であつたと見え、同じ構圖のものが、井上侯爵家にも傳へられてゐた、此の方は中が布袋、左が蓮と燕、右が此の蓮鷺で、畫幅の大さ松平家のものよりやゝ大きく三幅對となり、違つてゐる處は、此の方急雨を見せ、地上に蓮瓣二片を散らしてゐるところである、鷺の姿態の如き、全く同巧である。此の外、松本双軒庵襲藏の三幅對の一に芦鷺があるが、これも面白い、中は琴高仙人、右は尾長鳥、左が芦鷺であるが、此の作は、舞姿ではなく水邊に立つてゐる、その筆致暢達、蘆の描法も面白く、元信の味を十分に發揮してゐる。

探幽の鷺　探幽の鷺は、愈々技巧が手に入つて居る、その片刷毛隈描きは、鷺の姿態を十分に活躍せしめ寸分の隙もない、中でも埼玉縣の大澤百花潭氏舊藏の中維屢、左右蘆鷺の三幅對の如き、此の隈描きが神に入つたものといへる素晴しい出來である、更にこれを略筆したものに吉田楓軒氏舊藏の中硯子、左右芦鷺の三幅對がある、隱元禪師の賛のあるもので、此の左の芦鷺の如きは、片刷毛隈描きの外に、上墨で僅に嘴と脚を畫いたばかりであるが、實によく畫けてゐる、密畫の方では松方公爵の四季花鳥四幅對中、夏の柳燕柳鷺の如き忘るゝ能はざるもの、此の作、探幽七十一歳の筆で、柳條の柔かさ、水邊四羽の鷺の思ひ思ひの姿態、柳の枝がくれて飛んでゐる一羽の形の面白さ、これが古稀を過ぎた人の筆かと驚かれる、昭和九年の多淺田家の賣立に現はれた中辨財天、左右柳鷺の三幅對も大作である、これは探幽六十八歳の作で、前者ほど

密ではないが左の雪中柳鷺の如き、構圖にえもいはれぬ妙味がある、常信や、尙信にも、蓮鷺、柳鷺、蘆鷺の名作が多い、殊に常信には破墨を以て敗荷を畫き、これに隈描きで鷺を畫いたやうな極めて洒落たものもあるし、有名な原富太郎氏所藏の『檜鷺』のやうな變つた構圖のものがある、亭々たる檜の上部、差し出た枝に白鷺を點出した如き、誠に並々ならぬ技巧である。

◇

乾山の柳白鷺屏風　狩野派以外のもので、眼に殘つてゐる作では、神戸川崎男爵家舊藏に、乾山の柳白鷺屏風がある、右半双は柳の老樹に燕子花や水葵を描き五羽の鷺を畫き、左半双は紅葉を中心に右手に蛇籠と水草、左に蘆を描き、これに七羽の鷺をさま〳〵の姿により綴り配してゐる、殊に柳の左方に肩を縮めた五羽の鷺を並べて描いたのが面白い、これは乾山八十一歳の作で、乾山としては大作の部に屬するものである

光琳の鷺　光琳もあの濕ひのある線で面白く鷺を畫いてゐるのがある、澤瀉などを添へて十分に裝飾的效果を見せ、抱一にも小品には、飛翔の姿や、片足かゞめて水中に立つ風情を寫したものがある、應擧には、例の寫生風の作は勿論のこと、片刷毛隈描きの筆致を用ゐた面白い作があり、四條派の人々では、景文がよくこれを畫いてゐる。

明治以降の人では、橋本雅邦が、片刷毛隈描きを盛にやつてゐる、狩野の傳統を最もよく傳へて居る處である。

南畫の鷺　南畫の方面では、草坪に有名な蓮鷺の大作がある水墨を十分に驅馳し、白鷺十數羽、種々なる

姿態を寫して應接に遑なからしめてゐる、素晴しい作である、竹田にも『風標公子』と題して五羽の白鷺を畫いた名作が、双軒庵藏にあり、竹洞にも『秋汀白鷺』と題し、芙蓉咲く中に白鷺五羽を配した作があり、春琴には『秋艶野禽』と題した『鷺と鵲』の作があるし、梅逸もいろ〳〵と鷺を畫いてゐる。華山には『秋柳雨鷺』の大作がある、小坂順造氏の舊藏で『春柳雨鴉』と双幅になつて居り、華山三十歳頃の作といはれてゐる。

近代の作　近年の作では、榊原紫峰氏が國畫創作協會に出品した『雪中柳鷺圖』が世人の記憶に新たるものがある、これは西本願寺の趙仲穆の作に新しき解釋を施し、『雪中柳鷺圖』の再檢討を試みたもの、氏は引續き鷺の研究に沒頭し、次で『蘆鷺』の大作を發表し、『蓮池白鷺』にもその飽くなき製作慾を充たしめた。

富田溪仙氏が、十八回日本美術院展覽會に出品した、『梢の鷺』も面白い、樅の木に白鷺十數羽を配したもので、鵜の作と對になつてゐたもの、筆致殊に洒落を極めた、堅山南風氏は第十一回の日本美術院展に『霜且殘照』と題し、唐黍に白鷺を配して畫いたが、これは構圖が變つてゐるので興を引いた、宇田荻邨氏の、『淀の水車』も裝飾風の作で、水車と蘆これに白鷺を點出した見るからに美しい作であつたし、第七回帝展に帝國美術院賞を獲得した評判の作、堂本印象氏の帝展出品『朝』も鷺を畫いた作としては逸することの出來ぬもの、更に最近では、竹内栖鳳氏が昭和九年の夏、東本願寺の壁畫に畫いた『柳鷺圖』は或は氏の作中での力作であらう。

◇

默庵の五位鷺　これまで列擧した鷺の作品は、白鷺であるが、五位鷺を畫いた作も中々多い、その中で第一に推さねばならぬのは、公爵近衞家に傳はる默庵筆の『柳鷺圖』である、默庵は牧谿の再來といはれる程、その筆がよく似てゐるし氣品も高いのであるが、惜しむらく其の生涯は元に渡つて送つたので、我が國に作の傳はるものが極めて少く、此の作は小堀遠州から伊達政宗に贈り、政宗から近衞家に獻じたものといふ、楚石の『水清魚見』の賛がある、柳の枯木にとまつて魚を狙つてゐる姿態眞に迫り、嘴や脚の線が凄いほど利いてゐる、啓書記もよく五位鷺を畫いた、その一つで眼に殘つてゐるのは鄕男爵家舊藏の作である、水墨で一氣に五位鷺を畫き、その上に枯枝が出てこれに翡翠が一羽とまつてゐる、簡略な形であるが、構圖も面白く、一點一劃の加除を許さぬ神品である、これに似てゐる作が、神戸田村氏舊藏の中にもある、但しこれは柳が背景になつてゐる。

藝阿彌の五位鷺　藝阿彌にも『柳鷺』と題した瀟洒なものがあり、竹田には、『芙蓉立鷺』があつて、第三回双軒庵の展觀に現はれた、極めて暢達した筆で芙蓉を畫き、その下に五位鷺一羽を配してゐる、四條圓山の方面では、吳春が洗練した筆でこれを畫いたのがある、柳に此の派一流の技巧を見せてゐる。

近年の作では、荒木十畝氏が第十二回の帝展に出品した五位鷺が評判の高かつた作である、横はつた柳の幹に二羽の五位鷺が、一は立ち身となつて嘴を開き、一は首を傾けて、何ものをか凝視してゐる、墨色よく發揮されて恰も一刀彫の名彫刻を見るが如く、見るからに東洋畫の妙味を遺憾なく發揮せるを思はしめた、